
ローザニアの聖王子

小夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローザニアの聖王子

【Nコード】

N3863V

【作者名】

小夜

【あらすじ】

苦難の末、王子の座に返り咲いたローレリアンは、王国の未来を憂える。

そんな彼を、アレンとモナシェイラは、支えたいと願うのだが……。ローザニア王国の王子ローレリアンと未来の花嫁モナシェイラ、波乱の恋の物語。シリーズ第2弾！

建国節の祝賀 … 1

内海の東岸を支配する大国ローザニアの春は、建国節と呼ばれる祭りの季節である。

豊かな平原がいくつもの小国にわかれ土地を奪い合った乱世の時代に終止符を打ち、現在のローザニア王国の礎を築いた聖王パルシバルが、王都プレブナンに宮廷を開き建国を宣言したのが、この季節とされているからだ。

王都の春は4月中ごろから本格化する。

風が南からの暖かいものになると、そこかしこに咲き誇る花の種類が急激に増え、繁殖期に入った鳥は、にぎやかに歌い始める。それに気づいた人間も、訪れた春に心を浮き立たせるのである。

しかし、祭りのムードに心を弾ませているのは、庶民だけであった。

この季節、プレブナンの王宮には、国中から集まった貴族たちがあふれかえる。

表向き彼らは、忠誠を誓う国王へ、建国節の祝いをのべるために集まったことになっている。

だが、実際のところ貴族にとっての建国節の祝賀会とは、秋の収穫の決算をすませ、毎年、国王へ領地経営の報告書を提出するため集まりなのだ。その季節の忙しさと負担感の重さは、国の要職につく大貴族にとっても、下っ端の貧乏貴族にとっても、大変なもの

である。

もっとも、表向きは、あくまでも祭り。

貴族が集まる王宮では、連日、なにがしかの催し物がおこなわれる。

夫や父親につきしたがって領地から王都へやってきた女性たちにとっては、この催し物は最高の娯楽だった。

着飾って舞踏会や音楽会へでかけていくのも楽しいし、この国のファッションリーダーである大貴族の奥方や令嬢の今年のドレスを拝見するのも楽しい。

役人に書類の不備をつかれたり、国家事業への出資を求められたりして、連日脂汗をかいている夫や父親の苦勞など、彼女達には理解できない。

女子供に仕事の愚痴を吐かないのは、高貴なる男たちの矜持に類すること。

自分の妻や娘は、蝶よ花よと、甘やかす。

それが、国王陛下から領地を預かる誇り高き貴族の男の、しかるべき態度というものなのである。

春らしいおだやかな晴天に恵まれた今日も、王宮には大勢の人が集まっていた。

人々が集っていたのは、広大な王宮の南面に位置する芝の広場で

ある。いま、その広場には臨時の観戦席がしつらえられ、三方向から見下ろす芝の舞台の中央では剣術の試合が行われている。

年に一度の、御前試合。国中から集まった腕自慢の男たちが、その年の一番の勇者の地位を競う、恒例の祭りだった。

例年、この試合は、かなりの盛りあがりを見せる。

国王陛下の軍隊に仕官している者なら、たとえ平民であろうとも、この試合には出られる決まりになっているからだ。御前試合で優勝して桂冠騎士の称号を得ることは、この国の軍隊において、平民が出世の足がかりを得られる唯一の機会であった。

だから、試合に参加する男たちの意気込みは、半端なものではない。試合自体は寸止めのルールで進行するが、毎年怪我人が続出するのも、仕方がないことだと思われていた。

しかし、今年の試合は、どこか空気が違っていた。

圧倒的な強さで決勝まで勝ち進んできた第6師団の怪物ルース・ファイルスが、相手に容赦のない一撃を放つては、大量の血を流していたのである。

もともとルースは好戦的な男だった。

まるで熊のように筋骨たくましい体と、国境の小競り合いを日常とする第6師団で実戦をくりかえしてきたせいで潰れた鼻。そして、眼窩の骨折のために瞼が動かなくなり、眠そうな半眼となってしまう右目と、逆に右目の視界の悪さを補うために、爛々と輝くようになった左目を持つ。まさに怪物というあだ名にふさわしい、外見

をした男なのである。

決勝戦を前にして、彼は鼻息荒い。

待機所でおとなしく座ってはいられないようで、さきほどから試合場の芝の上を、抜身の剣を手にして歩きまわっている。

観客席の客も、興奮しきっていた。

とにかく誰もが、近年まれにみる大勝負を観戦できる幸運に感謝し、浮かれているのである。

決勝戦で怪物ルースと対決するのは、18歳の士官候補生だった。

彼は、王都に新設された士官学校の第一期生である。噂によると俊敏な剣の使い手で、勉勵をいとわない努力家。そのうえ人望もある、第一期生の星と呼ばれる存在だという。

しかも彼は少年時代に、伝説の名剣士として名高いアストウール・ハウエル卿のもとで、見習いを務めていたという経歴を持つ。

アストウール・ハウエル卿は自身も若いころ、5年連続で、この御前試合に優勝した経歴の持ち主なのだ。人々が、因縁を感じないわけがなかった。

現在、アストウール・ハウエル卿は、近衛連隊の顧問官である。

本来なら連隊長でも務まるほどの人物であるが、彼はみずから望んで、その地位についた。彼が『我が王子』と呼んで敬愛するローザニア王国の第二王子、ローレリアンの側仕えをするためである。

いまでは彼は、『王子殿下の影』と呼ばれている。王子殿下がいるところには、必ず彼もいるからである。

才気あふれる若者として父王から愛され、その優れた頭脳で深く考えたすえに生み出す立言の数々を重用されてきたローレリアン王子には、敵も多かった。赤子のころに死んだものとされていた王子が中央政界へふたたび姿をあらわした時、「なんでいまさら？」と笑った者たちは、やがて既得権を失う予感におびえ、激しい恐怖を覚えるようになったのである。

その結果、数えきれないほどの刺客が、アストウール・ハウエル卿の手によって、血の海に沈むこととなった。

王子に害をなそうとする者は、王子に近づくことすらできずに終わる。

伝説の名剣士の名声は、いや増すばかりである。

その伝説の名剣士『王子殿下の影』は、西側の試合待機所で管をまいていた。

待機所で決勝戦の開始を待つ、士官候補生をからかっているのがある。

「どうだ、アレン。勝ち目はありそうか？」

あの化け物、なにか薬でもやってるんじゃないだろうな？

見てみる。あいつ、興奮しきって、いまにも涎を垂らしそうじゃないか。まるで、狂犬病にかかった闘犬だな。危なくしてほしいがな。

あんなの、どこかへ鎖でつないでおけてんだ」

士官候補生のアレン・デュカレットは、うさん臭そうな目で、昔の上司を見た。

アストウールは3年前と、ちつとも変わっていなかった。

戦いで失った右目は皮の眼帯の下。

気障な形に整えられた口髭。

その髭の下には、皮肉が大好きな口がある。

どうも、王子殿下に直接お仕えして、世の中の嫌なものをいっばい見てきたせいで、彼の皮肉好きには、さらなる磨きがかかったようである。

いまの態度だって、とても可愛がっていた昔の部下を、励ましているようには見えなかった。

柵にもたれて、ほれほれほれと、アレンが座っている椅子を蹴ってくる。

その傍若無人ぶりは、アレンに付き添っていた士官学校の教官が、あきれて注意するほどである。

「どうか静かにしてください、ハウエル卿。

そうにぎやかにされては、デュカレット候補生は、精神統一ができません」

アストウールは、アレンを取り巻く大人達を、ぐるりと見まわした。

みんな、一様に、青い顔をしている。

ここまでできたなら、アレンに勝ってもらいたいと思うのは当然だろう。彼が御前試合に勝てば、士官学校で教育を受けた者は優秀であると、世間に証明できる。

しかし、その思いでアレンの肩に期待という名の重荷を乗せるほうが、よほど彼の集中力をそぐのだからなあと思う、アストウールである。

ところがだ。

問題の士官候補生、アレンは笑っていた。

「あいかわらずですnee、アストウールさまは。俺のことなら、ご心配なく。

あとは、無心で頑張るだけです。

それより、いいんですか？ 王子殿下のそばから、離れたりして

アストウールも笑って答えた。

「大丈夫だ。

いま、殿下の側には国王陛下の護衛がいる。

俺は、がんばれよと伝えて来いと、使いを命じられたのだ」

「それは、どうも。殿下に、お礼を申し上げておいてください。それ……」

アレンは元上司の耳元へ唇をよせる。

「約束は、忘れないでくださいよ?」

「ふん」と、アストウールは鼻で笑う。

「王立士官学校第一期生、アレン・デュカレット候補生! 時間で
す! 中央へお進みください!」

呼び出しの大声が、二人の会話をとめる。

「では、いってきます」

呼ばれた候補生は、剣を手にして周囲へ軽く会釈をし、堂々と試
合場へ出ていった。

アストウールは、まぶしげに隻眼を細めた。

アレンの後ろ姿に、3年前の面影はない。

3年前と同じだと言いつれるのは、癖のある茶色い髪くらいのも
のだ。

背はすらりと高くなり、肩はがっちりとした大人の肩になった。

胸板もずいぶん厚くなっている。

それに、なにより、雰囲気が変わった。

にぎやかなおしゃべり好きの子供っぽさは、欠片もなくなつてし
まったのだ。いまの彼は士官学校の同級生や後輩たちから『氷鉄ひやてつの
アレン』と呼ばれているらしい。彼の冷静な表情が動くことは、め

ったにないので。

アレンが無表情になったのには、アストウールにも多少の責任があった。

士官学校の一期生には、大貴族の子弟が大勢いたのである。初めての入学資格審査試験が行われる際、士官学校の設立メンバーの名簿に箔をつけたがった馬鹿どもが、本人のやる気や才能をまったく無視して、貴族の子弟ばかりを優先的に合格させてしまったからだ。

自分の出身家庭が立派であることを自信のよりどころにしている大貴族の息子たちにしてみれば、貧乏豪族の三男坊であるアレンが、同級生の中でもっとも成績優秀で武芸にも秀でているという状況は、我慢ならないものだった。

しかも、アレン・デュカレットは、伝説の名剣士アストウール・ハウエル卿のもとで見習いを務めていたという、ねたましいまでに恵まれた過去を持つ男なのである。

自尊心ばかりが肥大した大貴族の息子たちは、おのれの努力が足りないのを棚に上げ、自分だって幼少時代に有名な剣士の弟子になれていたなら、もっと周囲から認められているはずだと考える。

おかげでアレンは、ことあるごとに大貴族の息子たちからいじめられた。

しかし、アレンは、そのいじめを、ことごとく実力ではねのけた。

寝る間も惜しんで勉強をするから、試験の結果は、いつでも主席。剣術や馬術、はては射撃訓練まで、他の連中の二倍の練習をして、

一番を貫いた。

アレンにとっては、同級生からのいじめなど、どうでもいい問題だったのだ。

彼の目標は、ただ一つしかなかった。

これから始まる御前試合の決勝戦に勝てば、その長年の望みはいよいよかなうはずなのだ。

試合場の中央で、アレンは怪物ルースと正面から向き合った。

ルースは興奮しきっており、アレンのところまで荒い呼吸のせいで動く、空気の気配が伝わってくる。

その気配を、アレンは静かに無視した。

3年間、ずっと願ってきたことに意識を集中する。

負ける気はしなかった。

アレンは、この日のためだけに、3年もの月日を精進に費やしてきたのだ。

剣を鞘から抜き、鞘は介添え役に預ける。

なまめかしいほど滑らかな、刃の光をながめて愛でる。

この剣は、士官学校の一年目が終了した時に、アストゥールからもらった名剣だ。

そのころにはすでに、アレンの成績がきわめて優秀だということ
が、あらゆる場所で噂にのぼりはじめていた。アレンを見い出して
素養を磨いたことになるアストウルにしてみれば、かなり嬉しか
ったのだろう。

この剣をもらったときに、アレンはアストウルと約束を交わし
た。士官学校卒業時の御前試合に勝ったら、『王子殿下の影』と呼
ばれる役目は、アレンに譲ってやると。

握りしめた剣に、気を注ぐ。

猛獣の咆哮ほうぼうのごとき雄叫びとともに、ルースは切りかかってきた。

試合の判定役が、鼻白んでいる。

ルースの切り込みは、試合開始の合図より、わずかに早かった。

勝つためなら手段を選ばない。

そういう男らしい、この怪物は。

一合、二合と、剣を切り結ぶ。

アレンの剣は、士官学校仕込みの正統派だ。

しかも、基本は名剣士アストウル・ハウエルからの仕込み。力
だけで押してくる怪物の粗雑な剣を、真っ向から受け止めたりはし
ない。相手の豪剣の勢いを利用して、右に左に剣を払うしぐさは軽
やかで、美しくさえある。

戦場において、士官は馬上で剣をふるうことが多い。馬を御しながら片手で剣をふるうためには、相手の攻撃までも利用する華麗な技が必要なのだ。

3年間、ひたすら精進にはげんだアレンの剣筋は、まるで熟達した舞い手の踊りのようだった。

そして、相手の剣がわずかに泳いだすきを利用して、すれちがいざまに、わきを狙う。

観客が、いつせいにどよめいた。

ルースはかろうじて逃げたが、アレンの剣は彼の脇腹を、確実にかすっていた。

第6師団の赤い制服の切れ端が、まるで血のように風に舞う。

今日初めて怪物ルースは、一撃を浴びた。

怪物の顔に、血がのぼる。

アレンは思った。

怒りに醜くゆがんだ赤い顔は、人間を悪事へ誘う魔王オプスティネにそっくりだ。

子供のころ村の祭りで、よく人形劇を見た。

赤い顔のオプスティネは、正義と公平の神口トに必ず倒される。

自分が口トだとは言わない。

ただ、ルースには負けたくなかった。

ここで彼に勝ちを譲ることになれば、彼にはそれなりの地位が与えられる。

こんなやつが人の上に立って、理不尽に権力をふるったりしたら、それこそ無数の不幸を量産してしまう。

たいした努力もせずに威張り散らす貴族達にも、上官にも、もううんざりだ。

ルースは技を極めただけ、そんな連中よりはましかもしれないな。そう思いながら、もう一度彼の豪剣を受け流したら、ルースは激しいのしり声をあげた。

「この、卑怯者め！」

ちよこまかと逃げを決め、人の隙ばかりを狙いおる！

それが、士官学校仕込みの剣か！

臆病者の、小童め！」

まともな剣の技をさして、卑怯とは笑わせる。

そもそも、卑怯なのはお前のほうだろう。

相手を恫喝して心理的な揺さぶりをかけようとすることをさして、小賢しいというのではないのか？

まあ、戦場では、それが正しいやり方なんだろう。

どんな方法を使ったって、勝ったほうが正義になるのが戦だ。

だが、俺はだてに、鉄だの氷だのと呼ばれているわけではない。

つまらない挑発には、のらない。

ここは王都で、いまは剣術試合の真っ最中。

あくまでも、相手のすきをついてこそ、勝つ剣だ。

意識を、剣のみに集める。

雑念を捨てる。

そら、よろめいた、その足元。

ひとつ突いて返す手で切りつければ、一方的に押しまくるチャンスが、こちらにやって来る。

激烈な勢いで三步踏み込むあいだに、剣が二度鳴った。

「そこまでっ！　そこまで！」

判定役の士官が、両手をふりあげ死闘を止めた。

最後の二合には、二人の剣士の本気がこもっていたのだ。制止が、あと一瞬遅れたら、間違いなく多量の血が流れていただろう。

ルースが地面に膝をつき、咆哮する。

観客が、大喜びの声をあげている。

自分の呼吸の音が、やけに耳に響いた。

これで本当に、3年の苦勞が報われたのか。

士官学校の同級生や後輩たちが、試合場へ駆けこんできた。

彼らは口々にアレンの名を叫び、肩を抱く。

もみくちやだ。

いつも陽気なアンドサーダが、おどけた口調で号令をかけた。

「みな、帽を取れ！」

「いやあっ！」

掛け声とともに、士官候補生たちの帽子が、一斉に空へと舞った。

現金なものだ。

最初のころは身分の低い同級生をいじめていた連中も、いまではアレンを、自慢の仲間あつかいする。

「勝者は、前へ出よ！」

観客席の中央から、呼び声がかかった。

大騒ぎしていた士官候補生たちは、たちまち黙った。

アレンを呼んだのは、ローザニア王国の宰相カルミゲン公爵である。現国王バリオス3世の舅として長年権勢をふるってきた大公爵の声は、多少しゃがれてはいたものの、重々しい威厳に満ちていた。

アレンが導かれるままに一段高くなった演台へのぼると、そこにはおそれ多くも、国王一家がお立ちになっていた。

中央には、おだやかな雰囲気を持ち主である国王陛下。

一歩さがった斜め後ろには、今年30歳になる王太子とその妃。

さらにその後ろに、国王の寵妃であるエレナ姫と、エレナ姫の息子にあたるローレリアン王子の姿が見える。

アレンは、自分の胸のうちが震えるのを感じていた。

あれから3年。ローレリアンは22歳になっている。

自分が変わったように、ローレリアンも変わっていた。

彼はいまや、立派な王子殿下だ。

秀麗な容姿には、優雅な落ち着きが。

もとから上品だった身のこなしには、王族の威厳が。

そして、いつも口元にある微笑には、この国の豊かな未来を想像させる深い知性のあかしが読み取れる。

跪^{きは}拝し首を垂れるアレンに、国王が話しかけてくる。

「アレン・デユカレット。みごとな勝利であった。」

我が国の軍制改革の一環として新たに設立された王立士官学校の最初の卒業生が、この名勝負をなしたこと、余はたいそう嬉しく思う。

みなのもの、注目するがよい。

この試合の勝者は、国一番の剣士である。

ここに、その名誉をたたえ、桂冠勲章を授与するものである。」

これで、アレンは今日から騎士様だ。身分も一代貴族とはいえ、立派な貴族の一員。

国王の手から勲章を受けとった宰相が、輝くそれを、アレンの胸にピンで留めつけてくれる。

その様子を見ながら、国王が約束されている質問を、くりだしてきた。

「毎年、試合の勝者には、褒美ほつびとして何が欲しいか、たずねておる。そなたも、忌憚きたんのない希望をのべるがよい。」

かしこまりつつ、それでもはつきりと、アレンは望みを言った。

「おそれながら、申し上げます。」

どうか、わたくしに、緑の衣の着用をお許しください。

そして、心よりお慕い申しあげるローレリアン王子殿下の、お側へ仕えさせていただきたく存じます。」

緑の衣とは、近衛連隊の濃緑色の制服を指す。士官に任命されたあかつきには、ぜひとも近衛連隊に入隊し、ローレリアン王子へ仕

えたい。アレンはそのためだけに、士官学校で主席をつらぬきとおしてきたのだ。

国王は声を立てて笑った。

「王子よ、そなたに仕えたいと申す者が、また一人増えたな」

「おそれいます」

ローレリアン王子は慇懃いんぎんに腰を折った。

アレンは、国王の前で無礼と知りつつ、驚いて顔をあげてしまった。

ローレリアンは王宮へもどって殿下と呼ばれる身分になってからも、丈が短い聖職者の法衣を愛用している。黒づくめで飾り気がないその衣装は、いつも王子の美貌をより輝かせると言われているのだが。

しかし、今日の彼は憂鬱そうだ。

しかも、父親であるはずのローザニア国王のまえで、この陰気な表情は……。

だいたい、こいつのお辞儀おじぎのしかたは腰の角度からして、礼儀作法の教科書の解説どおりに分類するなら、臣下の礼と呼ばれるたぐいのお辞儀だぞ。

王族ともなると、親子の間にも、主従関係が生じるのかな？

アレンが、もやもやと考えこんでいるうちに、ローレリアンが前へでてきた。

観衆が、どっと沸いた。

最近、この美貌の王子は、どこへ行っても大人気なのだ。

それはそうだろうと、アレンは思う。

王のとなりに控えて不機嫌そうな顔をしている王太子ヴィクトリオは、さえない容姿の持ち主だった。

髪は、つやのない赤毛。

瞳の色は茶色で、顔立ちは平凡そのもの。

体つきだって中肉中背で、とくに特徴もない。そのうえ大人になってからは趣味の狩猟でくらしいしか体を動かしていないものだから、なんとなく、しまりのない体型だ。ゆったりとした服装で隠しているが、裸になれば間違いなく、腹が目立ってしまう中年体型だろう。

だいたい、若いころは美丈夫でおっていた現国王バリオス3世と王太子は、似ても似つかない外見なのだ。

バリオス3世は、金色の髪に水色の瞳をもっている。この特徴は、ローザニア王家に生まれる人間に、よくあらわれるものとされている。王国の開祖聖王パルシバルも、金色の髪に水色の瞳の持ち主だったそうだ。

そして、ローレリアン王子も、金色の髪と水色の瞳の持ち主。

王子の母親、エレーナ姫もだ。

この3人が並び立つと、人々は畏怖の念にかられる。彼らはまさに、伝説の王から受け継いだ、高貴なる血筋を体現しているような親子だからである。

その3人の中になると、王太子のさえない容姿は悪目立ちした。

口さがない者などは、「王太子はきつと、子宝の女神ユピが取り間違えた子なのだろう」といって笑う。

ローレリアン王子の人氣が増しているいまでは、「完全に負けている兄のほうの名前が『勝利』ヴィクトリオとは大笑いだ」と言う者までいた。

アレンの前までやってきたローレリアンは、優しげな笑みで表情をゆるめた。

それを見て、アレンは、ほっとした。

ローレリアンのほほ笑みは、アレンと出会ったところと、ちっとも変わっていなかった。

このほほ笑みには、だれよりも優しく他人のことを思いやる、かつての金髪の神学生、ローレリアンの真心がこもっている。

よく通る澄んだ声が、アレンに話しかけてくる。

「ひさしぶりだ、アレン」

「まったくです。ここまでお側近くによらせていただくのは、3年ぶりになります。レヴァ川の棧橋で、お別れして以来ですよ」

「堅苦しいのは、なしにしよう。きみは、わたしの友人だ。また会えて、本当につれしいよ」

立てと、しぐさでうながされ、アレンは立ちあがった。

ローレリアンの綺麗な顔が、ちょっとばかり驚いたふうに動く。

「まいったな。」

きみときたら、ずいぶんと背が高くなっていないか？
わたしより、視線の位置が高いじゃないか」

「この3年で、俺も成長したんです」

「すすすくと、育ったものだな」

「ですから、もう餓鬼あつかいは勘弁してください。殿下との約束を果たすために、俺はがんばってきたんです」

「おや、わたしは、なにかきみと約束を交わしただろうか？」

アレンは笑って答えた。

「おまえの背中が、俺が守ってやると。」

俺は、頭の出来じゃ、とても殿下にはかないませんが、体を使つた仕事は得意です。

きつと、お役に立ちますよ」

王子は、一瞬、眼を見開いた。

次の瞬間には、切なげに、その眼が細められる。

「国一番の剣士が、なにを言う。

力を貸してくれるという申し出も、ありがたいと思つ。
きみを友と呼べて、わたしは、とても幸せだ」

アレンはローレリアンに抱きよせられた。

彼の頬にあたった友人の金の髪の感触は、とても懐かしいものだった。

ただ、美貌の王子と国一番の剣士の称号を得た若者との間でかわされた友情の抱擁ほうようを見せられて、観衆が大喜びしたのだけが、違和感となる。

アレンは新たに、誓いを立てた。

これから俺は、ローザニア王国に仕える士官となるのだ。

立場は、あくまでも公人だ。

ローレリアンとの友情に甘えることなく、しっかりと、公務をこなさなければと。

建国節の御前試合は、その季節の昼間の行事の最後を飾る催し物だった。

その夜、王宮で開催される舞踏会は、国をあげての大舞踏会になる。この舞踏会が終わると、各種の報告のために王都へ上ってきていた地方領主たちも、領地へ帰っていくのだ。

舞踏会の会場は、きらびやかな装いで着飾った人々でいっぱいだった。

しかも、その場の空気には、人いきれと脂粉の香りが充満している。

天井を見あげれば、目もくらむシャンデリアの照明。

その照明のむこうからは、天井画に描かれた神話の神々が、集まった人々を見下ろしている。

宴はまだ始まってから間もなかったが、御前試合の優勝者として大勢の人間に囲まれて話しかけられ続けていたアレンは、すでにうんざりしはじめていた。

衣食住に不自由していない貴族たちは、普段の生活に退屈しきっており、劇的な出来事が大好きだ。

勲章を授与されるとき、衆目の前でローレリアン王子と友情の抱

擁をやってのけたアレン・デュカレット卿は、彼らの好奇心の絶好の獲物だったのである。

アレンは、そんな連中の質問に対して、「王子殿下の個人的なご事情にかかわる質問には、いっさい、お答えできません」と冷たく返答しつづけた。

幸いなことに彼のまわりには、士官学校の同級生たちがいつもいた。彼らは、このあと王国の軍の士官として、各地へ旅立っていく。その門出を祝う意味で、この舞踏会へ招待されていたのである。

栄えある王立士官学校の卒業生として、同級生たちは舞踏会の雰囲気をおおいに楽しんでいた。

その同級生たちは、アレンの代わりに、いくらでもしゃべってくれる。

「どうか、この男の無愛想ぶりを、許してやってください」

「この男は、不言実行が信条で、めったに感情をあらわにしないのです」

「ついたあだ名が、『氷鉄のアレン』ですよ」

「その名の通り、冷たく固い男です。我々がいくら友誼ゆうじゆを結ぼうと誘っても、そっけないことこのうえない」

「おまえの誘いは、悪事への誘いばかりではないか」

「酒場で結ぶ友情も、士官学校の同期生にとっては大切な関係です」

よ。将来一軍を率いる立場になったとき、将官同士がお互いのことをよく知っていれば、勝機につながる作戦も立てやすいというものです」

「大きく出たな！ 貴公、将来は将軍になるか！」

「あたりまえだ！ その気概がなくて、士官候補生になど志願するものか！」

晴れがましい席で卒業を祝ってもらい、同級生たちは浮かれまくっている。

知らないということは、幸せなことでもあるのだなど、アレンは思った。

きっと、新任士官として任地へ赴いた彼らは、そこで現実の厳しさを知るのだろう。

平民出身の下士官や兵士たちは、ただ頭でっかちなだけのエリートになんか、従いはしない。

圧倒的多数の兵士たちが求めているのは、自分たちに命令を下すだけの器量を持つ人間である。

軍人として、優れているかどうか。

求められているのはそれだけで、指揮官の身分など、伯爵の息子だろうが、男爵の弟だろうが、どうでもいい問題なのだ。

人垣のむこうが、ざわめいた。

「どうぞ、王子殿下のために道をお開け下さい」

式部官の先触れとともに、あわてた人々が後ずさり、腰を折る。

アレンも騎士の作法にのっとり、首を垂れた。

頭の上から、涼しげな声が言う。

「人気者だな、アレン・デユカレット卿は。」

ここまでたどり着くために、わたしは何度も、道を開けてほしいと、周りの者に頼まなければならなかったよ」

この場でしゃべってもよいのは、王族に話しかけられているアレンだけである。アレンは緊張して、言葉を返した。

「お呼びくだされば、わたくしのほうから、御前へまいります」

ローレリアンは、楽しそうに笑った。

「顔をあげる、アレン。」

きみは、今夜の宴の主役の一人じゃないか。

その、ぶつちよう顔つら顔は何だ？

もっと楽しそうにしたらどうなんだ」

王子の親しげな態度を受けて、アレンはつい、気をゆるめる。

「俺は、もとから、こつという顔なのです」

「本当は、もっと陽気な男だと、知っているのはわたしだけなのか？

それもまた、楽しくて結構な話だが。

しかし、公式の場で無愛想なのはいただけでないな。

もっと場の雰囲気を楽しむがいい。

そうだな、すこし、いっしょに会場を歩こうか。

わたしと親しい者達に、新任の護衛官を紹介しておきたいし」

「はい、お供いたします」

かたずをのんで王子殿下とアレンの様子を見守っていた貴族たちや士官学校の同級生たちは、いっせいに羨望せんぼうのため息をついた。

今日、国一番の剣士の称号を得た青年には、出世の道が約束されたのだ。王子殿下みずからが青年を友人として認め、それを公言して歩こうというのだから。

人垣から離れて歩きだした二人は、じつに見事な組み合わせだった。

威厳に満ちたローレリアン王子は、いつもの黒い法衣に茜色の大綬と王子の身分をあらわす銀の星章をつけている。

つき従う桂冠騎士のアレンは、士官候補生の礼装姿だ。純白に濃紺と金のブレードで飾りを施した礼服を身にまとい背筋を伸ばして歩く青年の姿には、これから背負う任務の重さへの覚悟と気負いが満ちていた。

もちろん、彼の左胸には、勝利をあらわす月桂樹の冠を意匠した新しい勲章が輝いている。

彼らとすれちがう時、貴族の令嬢は、みな小さな悲鳴をあげた。

建国節の王都に集う適齢期の貴族の令嬢たちは、自分と身分が釣り合う結婚相手を探しているのである。王子殿下のお気に入り青年士官などは、結婚相手としては極上の部類だ。

当然、アレンには熱い視線が注がれた。

ローレリアンは、それを見て、愉快だと笑った。

「すごいな、アレン。令嬢たちが君を見る目ときたら」

青年騎士は、しらけた顔で答えた。

「あの者達は、あなたを見ているのです。王子殿下」

「そんなわけがあるか。」

なんなら試しに、そのへんにいる令嬢へ声をかけてみるがいい。踊ってくださいとお願ひすれば、みな二つ返事で承諾するぞ」

「ダンスなど、興味がありません。」

それより、殿下こそ、他の者にお声をおかけにならなくてよろしいのですか」

「ダンスが嫌いとは、武骨なやつだな。」

ほら、聞いてみる。

この曲は、いま王都で売れっ子の作曲家、ムーランの新曲だ。聞いているだけで、足がステップを踏みそうになるではないか」

やけに機嫌がいいローレリアンは、音楽にあわせて人差し指を振った。

あきれてアレンは言う。

「楽しそうですね、殿下」

「楽しいさ。わたしは、舞踏会が大好きでね」

アレンは驚いて、あたりを見まわした。

アレンと出会ったばかりのころのローレリアンは、富を独占している貴族たちのことを、あまりよくは思っていなかったはずなのだが。

絢爛豪華な大広間には、喧騒が満ちている。

中央には、音楽にあわせて華麗にくるくると舞う男女の群れ。

ご婦人方のドレスは様々な色で、それが一斉につごめくと、見ているこっちは目がまわりそうになる。

なにしろ貴族たちにとっては、この建国節の舞踏会は大舞台なのだ。

着飾って集まり、子弟の結婚相手を探したり、領地経営にまつわる産業の関係者に顔つなぎをしたり、政治の根回しをしたり。

踊る男女の集団が、アレンには化け物じみて見えた。

あの貴婦人が身につけている衣装一式分の金があれば、今年の冬に流行した悪性の感冒で親を失った子供たちを、何人救ってやれる

だろうか？

水不足であえいでいる南東地方の民のために、何本の井戸を掘ることが出来る？

くっそー、二重三重に首に巻いた宝石なんぞを、キラキラさせやがって！

そんなことを考えたせいで、アレンは不機嫌になった。

表情をゆがめて、陰気に言い放つ。

「舞踏会がお好きなら、俺のことなど放っておいて、殿下も踊っておいでになればいいのです」

胸元の護符に手を当て、お祈りのしぐさをしながら、唇のはしでローレリアンは笑う。

「馬鹿を言うな。

踊る神官など、滑稽なだけだ。

それに、わたしが特定の女性と、踊ってみろ。

たちまちその女性は、妃候補だなどと騒ぎ立てられて、日常の生活もままならなくなるぞ」

「……………」

思わず、言葉を失うアレンである。

確かに、その通りかもしれない。

才能豊かな、第二王子。

兄の王太子をしのいで、この国の未来を変える人間になるのではないかと、国中から期待されている青年。

それが、目の前の、この男だ。

歩みを止めたローレリアンは、じっとアレンを見ていた。

彼の水色の瞳には、深い憂慮がたたえられている。

アレンの胸は、切迫感につまった。

ローレリアンの瞳から、目が離せない。

まるで、底が知れない深淵を、のぞきこんでしまったかのような気持ちになる。

王子は低い声で言った。

「貴族たちの舞踏会は、社交の名を借りた謀議の場所だ。

彼らは集まって踊りながら、この場で、ローザニアの未来を動かしてしまう。

議会は茶番。

国民の意志など、彼らには関係がない。

ならば、この謀議の場所を、わたしも利用してやるだけのことだ。なにか相談事が生じたら、相手へ簡単に声をかけられるだろう？

だから、わたしは、舞踏会が好きなのさ。

この人ごみの中で歩きながら話をすれば、秘密はぜったいに守られる。

わたしのうしろを歩いている『王子殿下の影』に逆らって、わたしと密談中の者に近より、話を立ち聞きするのは不可能だ。

だから、アレン。

きみも言いたいことがあるのなら、いまここで言ってしまうばいい。

聞いているのは、『王子殿下の影』だけだ」

背中に視線を感じて、アレンは振り返った。

そこには、近衛騎士の正装で身を飾った、アストウールが立っていた。

濃緑色の上着に、金ボタンと金のブレード。

胸には、ずらりと、武勲を示す勲章が並んでいる。

そして、腰には立派な剣。

この会場で佩剣はいけんを許されている人間は、ごくわずかだ。

そのうえ、アストウールが担っている役割は、王子の護衛だけではないらしい。

王子殿下からの「ちょっといっしょに、歩きましょうか」というお誘いには、じつは恐ろしい意味があったのだ。

ローレリアン王子は聖職者の衣と優しげな微笑をかくれ蓑みのにして、貴族たちのもとへ国王からの困った要求を運んでくる、恐怖の使者なのだった。

「アレン」

ローレリアンは、静かにいった。

「きみがこれから足を踏み入れようとしているのは、こういう醜い世界だ。

本当に、いいのか。

何もかも承知の上で、まだ、わたしの友人でいてくれるのか」

浮かれ騒ぎの喧騒が、アレンのまわりから引いていく。

彼とローレリアンのあいだには、重い沈黙があった。

たがいの瞳を見つめあい、二人は未来について考えていた。

いつかは、実現したい夢だ。

ローザニアを、すべての人が幸せだと実感できる国に変える夢について。

アレンは、ため息をついた。

心からの、安堵のため息を。

だれも聞いていないというのなら、俺の本音を、俺の言葉で言うてやるっ。

「よかったよ、リアン。おまえは、3年前と、ちっとも変わってないんだな」

「たったの3年で、人間がそんなに変わったりするものか」

「俺は、かなり変わったと、思うんだけどな」

「外見だけはな」

「ひどい言われようだな。」

でも、あの時の誓いだけは、変わらないからな。

おまえの背中が、俺が守ってる。

だからお前は安心して、前だけを見てる」

ローレリアンは心底嬉しそうに、アレンの肩を抱いた。

そしてふたたび、歩きはじめる。

「それでは、わたし個人へ腹心の誓いを立ててくれている者達と、引き合わせよう」と言いながら。

何も知らなかった無邪気な少年のときに立てた誓いは、いまふたび重い責任をともなって、アレンを縛った。

だが、これでいいのだと、アレンは思った。

彼はここで、人生をかけるにふさわしい大望を得た。

この誓いこそが、男子一生の本懐に、まちがいはなかった。

舞踏会の夜はふけてゆく。

王太子ヴィクトリオは、ほろ酔い気分で、舞踏と音楽が最高潮に達した大広間をながめていた。

彼は、つい先ほど、会場へ入ったばかりだ。

最近、いつもわざと遅れて、会場入りするのだ。とくに、座が乱れる舞踏会などでは。

遅れて会場入りすれば、目立たなくて済む。

人々はもうとっくに、会場へ入場してくる王族への興味など失っている。

若者はダンスへ、年寄は社交という名の密談へ、夢中だからだ。

本当なら、舞踏会になど出たくなかった。

うまい酒を飲みながら、女と寝所ですごすほうが何倍も楽しい。

しかし、王宮の行事をすっぱかすと、祖父のカルミゲン公爵から苦言を呈されてしまう。

殿下は次代の国王なのです。国王になるお方らしく振舞ってください、なごご。

酔った勢いで、ヴィクトリオは笑った。

最近では、しらふでは笑えない。

しかし、酔った勢いで笑うと、もっと惨めだ。この、こみあげてくるおかしさは、自分自身を滑稽だと思っている、自嘲のおかしさなのだから。

あなたは、次代の国王です。

もうそう思っているのは、ローザニア王国の宰相であり国王の舅でもある立場を利用して、長年にわたり中央政界で権勢をふるってきたカルミゲン公爵だけだろう。

3年前、異母弟が王都へもどってきたときに、すべての人々はヴィクトリオを見捨てたのだ。

面と向かつては言わないが、臣下の者はみな、ヴィクトリオを愚鈍だと思っている。

さえない容姿。

焦ると出る頬の痙攣。

考えることが苦手な頭。

趣味といえば、酒と女と狩猟。

王子に生まれなければ、早々にどこかでのたれ死んだのではないかと、自分でも思う。

なにしろヴィクトリオには、やる気というものが欠片もない。

兄とは対照的に、弟王子のローレリアンは、やる気の塊だ。建国節に入る前の一か月間は、内海の港町ラカンへ出かけていた。

その地は、王国に仕える5人の公爵のうちの一、ラカン公が領有する街だ。

弟はそこで何やら、難しい交渉事をまとめてきたらしい。

王都への帰還は、ラカン公といっしょだった。

弟と馬の轡くつわをならべて仲良く王都入りしたラカン公は、現国王バリオス3世にむかって、我が娘をローレリアン王子の妃にどうかと進言したらしい。

国王と側近は返答にこまった。

ラカン公爵の娘は、まだ8歳なのだ。

14歳の歳の差を無視してまでして、ラカン公爵はローレリアン王子との血縁関係を望んでいる。

その事実を、貴族たちを震撼させた。

ローレリアン王子は、すでに玉座へ片手が届いているのではないかと。

ローレリアン自身は、その可能性を否定している。

事あるごとに、あの異母弟は、「兄上のお立場をないがしろにし

て、わたしが差し出がましいことをしようとは思いません」と言う。
「わたしは正嫡の王子ではありませんので、玉座に野心はないので

す。
父国王陛下のおんため、いくばくかのお役にたてればと、それだけ

を望んでおります。

結婚も、する必要はないと考えております。
わたしは、一度は神々の御意志に、お仕えしようと誓った身。
いまも、神官位を返上しようとは思っておりません」

そういつて異母弟は、父国王や兄王太子に対して、臣下の礼を取る。

眞実、嫌味なやつだと、ヴィクトリオは思う。

あいつが深く礼をするたびに、ヴィクトリオは人々から、嘲笑を浴びるのだ。

馬鹿な兄上をお持ちだから、ローレリアン王子は御苦労なさると。

宰相カルミゲン公爵は、聖職者として生きること未練を残すローレリアンの気持ちに、最後の望みを託している。

だから、ヴィクトリオには、大きな問題を起こすなというのだ。

おとなしくさえしていれば、異母弟は、ヴィクトリオから王位継承権を奪いまではするまいと。

異母弟が、結婚もせず、神官位も返上しないというならば、ヴィクトリオを王位にすえて、陰ながら国を守る立場に徹してくれるに

ちがいないと。

「わたくしとて、孫である王太子殿下の行く末が心配なのです。それに、我が孫にこそ王位へ着いてもらいたいと願うのは、あとは枯れ木のごとく朽ちていくしかない、この老いぼれめの最後の夢ですぞ」

そういいながらカルミゲン公爵は、ローレリアン王子が誕生日を迎えるたびに、聖職者の位を贈ってきた。意地でもローレリアン王子には、国家の要職や肩書を与えるつもりはないようだ、人々は噂している。

遠い目で、ヴィクトリオは大広間のむこう側にいる異母弟の姿を追った。

弟は今日も、黒い法衣を身にまとっている。

右肩から斜めにかけているのは、王子の身分をあらわす銀の星章に付随する茜色の大綬だ。

銀の星章を身に着けなければならぬ正式な場所へ出るときには、神官位をあらわす記章が略章では格が釣り合わない、腰に神官の典礼服と同じサツシユベルトを結んでいる。

毎年、異母弟の神官位は上がっているから、いまのサツシユの色は3位の浅黄色である。

茜色も浅黄色も、黒衣によく映える色だ。ローレリアンの秀麗な容姿を、さらに美しく引き立てて見せる。

そして、あの異母弟が持つ、金色の髪と、水色の瞳……。

ヴィクトリオは奥歯を噛みしめ、拳をにぎった。

せめて、わたしにも金色の髪と水色の瞳があれば、ここまで惨めな思いをせずとも済んだであらうに！

泣きたい気分で、ヴィクトリオは、そばの椅子へ倒れこんだ。

最近ではいつも舞踏会のさいちゅう、彼はこうして座っている。

酒に酔って座っていれば、誰も彼に話しかけようとはしない。さわらぬ神にたたりなしとばかりに、放置しておいてくれるのだ。

ヴィクトリオは、ぼんやりと、宙をながめつづけた。

このまま、空気の中に溶けて、消えてしまいたかった。

しかし、その彼の前に、目が覚めるような光景が現れる。

女である。

美しい女。

若い女。

その女は、しなやかな細腰と滑らかな肌と、豊かな黒髪の持ち主だった。

白い優美なデザインのドレスを着ている。

そのドレスには、着飾った他の貴族の娘たちのように、しつこくとした飾りがついていなかった。

ただ、幾重にも重ねた薄絹の上に、同じ白糸で施した刺繍が素晴らしい。

胸元や肩口に飾られた、レースもだ。

レースのふちどりには、淡い紫の糸が使われているのだ。

そのせいで、たっぷりギャザーを取ったレースの美しさが陰影を得て、際立って見えている。

身につけているアクセサリは、透明な石のシンプルなネックレスとイヤリングのみ。

黒髪には白い薔薇。

だから、レースのふちどりの薄紫と紫の瞳だけが、この女の姿に色を添えるのだ。

しかも、その瞳が……！

なんと印象的な色をした瞳だろうか。

生き生きとした、生命感にあふれる色。

これは、すみれの花の色だ。

春がくると陽だまりに群れて咲き、可憐な花卉を風にゆらす、すみれの花。

ごくりと、ヴィクトリオの喉が鳴る。

久しぶりに感じる、女への欲情。

ローレリアンが王都へ帰ってくる前までは、暗愚だ、愚鈍だと馬鹿にしながらも、貴族たちは王太子ヴィクトリオへ、娘をさしだすことを嫌がりはしなかった。

一夜だけの相手に、不自由などしたことはなかったのだ。

しかし、いまではヴィクトリオの相手をしてくれる女は、商売女か、借金で困っている既婚の夫人たちだけである。

父親たちは、娘の純潔をささげるほどの価値を、ヴィクトリオに見い出していない。

欲しい。

あの女が欲しい。

あの美しい衣を脱がせて、しなやかな肢体をあらわにしたい。

黒髪に指をからめたい。

滑らかな肌に手を這わせ、嬌声をあげさせたい。

何度も何度も責めさいなみ、もう許してくれと、泣かせたい。

女は、椅子に座って、じっと自分を観察しているヴィクトリオの存在に、まだ気づいていなかった。

連れの男にむかって、快活に言う。

「お願い、お兄様。

もう一度、もう一度だけでいいですから、踊ってくださいな。

そうね、あのあたりを、ななめに突っ切りたいわ。

あそこのあたりには、衣装にお金をいっぱいかけた、成金令嬢や夫人が大勢いるもの」

腕を揺すられた男は、うんざりした様子だった。

「モナ。さつきから、もう一度、もう一度、これが最後だからを、何度くりかえしていると思う？

わたしは、もう疲れたよ。

おまえはよく動くから、ダンスの相手も大変なんだ」

「しかたがないでしょ！

このドレスが、どれだけ素敵かを見せつけるためには、ターンをくりかえして、裾をひるがえして見せない」と

ふいっと、そつばをむいた女は、悪戯っぽく笑う。

「いいわ。お兄様がお疲れだというのなら、そのへんの男性を捕まえて、お相手をお願いするから」

女の兄は、慌てふためいた。いくらか年が離れたように見える兄からすれば、妙齡の妹は可愛くてならないのだろう。

「よせ、やめる！」

わかった、いくらでも相手をしてやる。

だから、適当な男と踊るのはやめなさい。

おまえを、どこの馬の骨とも知れない男と踊らせたりなどしたら、わたしは父上から殺されてしまう」

「ありがとう、お兄様！」

「ごめんなさいね。」

本当は、アレンに相手をさせようと思っていたのよ。

だけど、あの子、もう早々とローレリアン王子殿下の御付きみに、なっちゃってるんですもの。声なんか、かけられないわ」

女は兄から、たしなめられる。

「モナ。アレン・デュカレットは、桂冠騎士の称号を得たのだ。もう気安く、あの子などと、呼んではいけない。」

王子殿下のお仕事の、邪魔をしてもいけないよ」

「はい。わかってます」

「まあ、わたしも、あの坊やが、あんなに偉くなるとは思っていなかったがね」

「失礼ね、お兄様。アレンは、とても努力家よ。きっと今に、王子殿下の片腕と呼ばれるようになるわ」

ヴィクトリオは不快になった。

また、ローレリアンが話題になるかと。

そばに控えていた式部官を手招きする。

「あの令嬢は、どこの家の者だ」

式部官は、うやうやしく答えた。

「兄上様と呼ばれておいでになるのは、ヴィダリア侯爵家の三男、王国軍第一師団の士官ロワール様です。おそらく、お嬢様は末の姫君、モナシェイラ様かと」

「ほう、南三国の王家出身の母親を持つ、なかなか高貴な血筋の姫だな。だから、珍しい瞳の色をしているのか。髪も黒髪で」

いまにも舌なめずりを始めそうなヴィクトリオの顔を見て、式部官が鼻白んでいる。

しかし、ヴィクトリオの衝動はおさえがたかった。

もともと意志薄弱なうえに、酒に酔っているのだ。彼には、まともな判断力など、ほとんど残っていない。

「あの者を呼んでまいれ」

命じられて、式部官は恐れおののく。

「王太子殿下、あの方は……」

「呼んでまいれと申しておる……」

「しかし、あの方は内務省長官、ヴィダリア侯爵の……」

「ええいつ、もうよいわ！」

しびれを切らしたヴィクトリオは勢いよく立ち上がり、仲良く腕を組んでおしゃべりをしながら、次の舞曲がはじまるのを待つ兄妹へと、近づいていった。

宴もたけなわの大広間の反対側では、ローレリアン王子を囲んで、ちよつとした打ち合わせがはじまっていた。

なるほど。ローレリアンが舞踏会を愛する理由が、これでもかっただぞ。

アストウールとともに王子の背後へ控えていたアレンは、妙に納得していた。

さつきからローレリアンは、腹心の部下たちへ、細かい指示を与えている。

「クーラント伯爵は水門の建設に対する土地と資金の提供を承諾したか」とか、「アルケメネ男爵を脅しつけた感触はどうだ?」とか。

たしかに、舞踏会は、謀略が張り巡らされる場所だった。

その中で、もっとも大きな網を張っているのが、王子殿下なのだから恐れ入る。

その網は、まるで大蜘蛛の巣のように粘っこく、哀れな生贄をからめ捕るのだ。

手持無沙汰のアストウールは、早々とアレンに仕事の引継ぎをはじめていた。体力がものをいう護衛の仕事は若手に譲ることにして、彼は、また違う仕事を王子のために始めるつもりなのである。

あれから3年の月日がすぎて、王子のまわりには信頼できる優秀な人間が、ずいぶん増えた。もついいかげんに、くたびれた中年が、つきつきりで側にいなくとも大丈夫だろうというわけだ。

「世間の連中は、ローレリアンさまが22歳になるというのに肩書ひとつ与えられていないことを、宰相カルミゲン公爵の圧力によるものだろうなどと、邪推しているがな。

本当のところは、国王陛下の御意志なのだ。

ローレリアンさまが王都へご帰還なさってからしばらくのあいだ、国王陛下はローレリアンさまに国務の何たるかを教えようと、つねにご自分の側へ置かれた。

国王陛下のもとへ上がってくる報告の書類を、すべて読ませたのだ。

ローザニアほどの大国になれば、国の政治に携わる者の数は膨大なものだ。

それらがどのような方向へ動こうとしているのかを常に把握しておこうと思うならば、結局、上に立つものは、上がってくる報告に丁寧に目を通していくしかない。

王なんて立場の人間は、いつだって書類にうずもれている。

しかし、われらが王子は並の人間ではない。

たちまち国王陛下が苦慮しておいでになる書類のすべてを把握し、分類整理、取捨選択に始まり、新たな秘書官の配置や要約筆記の作成など、ありとあらゆる手段を行使して、国王陛下の仕事の量を半分に減らしてしまわれた。

いまでは国王陛下は、書類に王子が書いた要約がついてくれば、

それにしか目を通されない。
そのほうが効率的だからだ。

王子に役職を持たせるのも、無駄だと言われる。
直接国王の輔弼ほひつをさせたほうが、将来のための経験を積めるだろうとな

アレンは声をひそめた。

「ヴィクトリオ王太子は、廃太子決定ですか」

アストウールも、小さな声になる。

「そう簡単にはいかん。」

廃太子の決定は、ヴィクトリオさまが公務に耐えられないほどの御病気になるか、精神に異常でもきたされない限り、なされな
いだろう。

一度、国の跡取りと定められた人間を、その地位から引きずりお
ろせば、その人間は社会的に抹殺される。そんな人間を国の跡取り
に定めていた、国家の権威も地に落ちるだろう。ローザニアは近隣
諸国から、いい笑いものにされてしまう。

だから宰相のカルミゲン公爵は、毎年せつせと、ローレリアンさ
まに神官位を贈るのだ。

人の世の至高の地位はお渡しできない。
かわりにどうか、神々の世界の権威で、ご満足いただけまいか
と。

宰相閣下は、自分の娘が生んだ男に、精神異常の烙印を押された

くないのだ」

「では、あいつは将来、この国の宰相ということに？」

「あるいは、摂政か。」

「王弟がプレブナン大神殿の大神官長の地位と、摂政大公の地位を兼任した例は、過去にもある」

「ああ、知ってます。」

「戦傷王コムメット二世陛下の御世ですね。」

「戦で負われた傷のせいで、後半生を寝たきりですごされたという」

「コムメット二世陛下と摂政大公を務められた王弟殿下の関係は、うるわしの兄弟愛として有名だがな」

「ローレリアンとヴィクトリオ王子の場合……」

「まあ、ヴィクトリオさまが大きな問題でも起こされない限りは、兄弟仲が今以上に険悪になることは、ないと思うが」

「問題、ねえ……」

「アレンがそうつぶやいたところで、新たな人間がローレリアン王子へ話しかけてきた。」

「殿下」

「おやと、アレンは思う。」

「話しかけてきたのは、役人やローレリアン王子にしたがう若手の」

貴族ではない。

宮廷の式部官だ。

式部官は、何事かを、ローレリアン王子へ耳打ちした。

たちまち王子の顔色が変わる。

「アレン！」

呼ばれたアレンは驚いた。

俺ってば、今日は見学でいいんだよな？

仕事のことは、まだなんにも、わかんないぞ。

血相を変えた王子は、さらに大声で言う。

「モナは王都へ帰ってきているのか！」

なんだ、そのことか。

話がおもしろい方向へ進みそうだから、アレンは笑う。

「ああ、帰ってきてるよ。」

俺が御前試合に出ることになったって手紙に書いたら、じゃあ応援したいから、建国節が終わる前に王都へもどるわって、返事がきたもんな。

モナ様も、けっきょく三年、アミテージでかんばってたからなあ。試合、見てくれたのかなあ？

お目にかかるのが、楽しみ、って、うげっ！」

油断していたアレンは、怒ったローレリアンから、鳩尾に一発食らう。

なんて乱暴な神官だ！ 自分で一方的に片思いだと決めこんでいるお姫さまと、俺が仲良しだからって、やつあたりかよ！

げほげほ咳きこむアレンのとなりで、アストウールが大声をあげる。

「殿下、おまちを！」

怒ったローレリアンは、足早に大広間を横切っていく。

アストウールが焦って追いかける。

優雅に踊っている人々の間を縫って大広間を横切るなど、普段のローレリアン王子には見られない態度だ。

驚いた何組かの男女が、ダンスのステップを踏むのをやめて、王子を見ている。王子がどこへ行くのかと。

その行く先を見て、彼らは息をのんだ。

王太子だ。

ヴィクトリオ王太子が、若くて美しい令嬢を口説こうとしている。

人々は、齒噛みした。

兄王子は、何と馬鹿なのだろうかと。

賢い弟王子が憤み深く兄へ恭順の態度を示してくれているのは、あくまでも兄が害のない人間でいることが条件だというのに。

この人つてば、なに？

気持ち悪い！

なんなの、この手え！

ヴィクトリオ王太子に迫られている最中のモナは、背中にだらだらとたれる汗を感じていた。

王太子はいきなり、モナの手を握ったのだ。名乗りもせずに。

もちろん、名乗られなくても彼が誰なのかは知っていた。王太子殿下は、この国の玉座に、いずれ座る人なのだから。

ヴィクトリオは、やわやわと、ドレスにおおわれていないモナの素肌の部分に触れてくる。

首筋や、二の腕だ。

そのさわり方には、性的ないやしさがあある。

あせったモナは、心の中で絶叫だ。

こんなさわり方で女性に触れてもいいのは、寝室でだけでしょ！
寝室でだって、同意がなかったら、犯罪だわよっ！

モナは深窓の姫君ではない。男女の営みについても、遊学先のアミテージで貧しい人々とともに働いているあいだに、実学として学んでしまった。

娼婦と客の喧嘩の仲裁をさせられたり、出産の手伝いをしたり。

庶民といっしょに、たくましく生きていたら、いくらでもそういう場面にぶつかったのだ。

モナの前では、兄のロワールが、こまりはてしている。可愛い妹のためなら決闘だって辞さない彼だが、相手が王太子ではどうにもならない。下手に問題を大きくすれば、父や他の兄弟たちにも迷惑をかけるだろうと。

「おはなしください、王太子殿下」

いつも下町で男どもをあしらっているのと同じ調子で怒るわけにもいかず、モナは弱々しく、言ってみた。

しかし、かよわい姫君ぶった演技は、ヴィクトリオを喜ばせるだけだった。

「そなたは、南三国の王家につながる高貴な血筋の姫と聞く。

どうだ、わたしの愛人にならぬか」

「おたわむれを。王太子殿下には、すでに妃殿下も、お子様もおいでになるではありませんか」

「最近、妃は病弱を理由に同衾を拒むのでな。

わたしは、男子の子供が欲しい。

将来の王子がな。

そなた、わたしに息子を授けてくれぬか？
そうなれば、そなたは未来の国母だぞ」

「ちよっ……、やめ……！」

酒臭い息が、首筋にかかる。

再度、心の叫びをあげるモナである。

だから、あんたは奥さんに嫌がられてるんじゃないの、このトウ
ヘンボク！

自慢の腕つぶしで、ぐいっと王太子の顔を自分の首から遠ざける。

しかし、こまった。

まさか、この場で王太子殿下を突き飛ばすわけにはいかないだろ
う。

やるうと思えば、できるけど。

いや、できる。こんな筋肉がない、ぶよぶよ男なら。

体術を使えば、投げ飛ばすのもできそう。

やらないけど。

だって、こいつは王太子殿下なのよ！ わたしに、どうしろって
いうのー！

モナは必死である。

「殿下、わたくし、約束が」

「ローザニアの王子を袖にして、守らなければならない約束とはなんだ」

ねちっこく、王子はモナの鎖骨のあたりをなでた。そのときだ。

「遊学先からおもどりになられたら、わたしと一曲踊ってくださいという約束です」

凜と通る男性の音が、突然、二人の会話のあいだに割りこんできた。

声の主は、モナの空いているほうの手を取った。

王子の耳元へ唇をよせ、静かに彼は言う。

「兄上にも、約束を思い出していただかなければなりませんね。臣下の未婚の令嬢には、けして手を出さないという、わたしとの約束を」

その声は、王子とモナにだけ聞こえる、小さな声だった。

「ローレリアン……！」

王子のほほは、緊張のために、ぴくぴくと痙攣している。

小声のローレリアンは、もう一言。

「酔いに免じて、一度だけは目こぼしたしまししょう。ですが、肝に銘じてください。今宵、一度限りです」

モナをとらえていた王太子の腕から、力が抜けていく。

つぎの瞬間、モナの体はローレリアンに引きよせられ、気がついた時には、しっかりと抱きとめられていた。

モナは激しく動揺していた。

どうしよう。胸が、ローレリアンの体にあたって。ドレスって、どうしてもっとちゃんと、体を包んでくれないのかしら。

やっぱり、わたしはまだ、ローレリアンのことが好きなんだ。ちよっと体が触れたくらいで、こんなにドキドキしたりして。

そう思ったところで、体が離れた。

体が離れたら、ローレリアンの顔が見えるようになる。

心配そうな顔で、彼は言う。

「大丈夫だった？ 兄が失礼をした。おわびする」

「ええ、だいじょうぶ。この程度、どうってことないわ」

明るく笑って返事をしたけれど、やっぱりまだ気持ちが悪い。

モナは手袋を外して、汚いとばかりに指先でつまんだ。ついさっきまで、この手袋ごしに、モナの手は王太子に握られていたのだ。

苦笑したローレリアンが、その手袋を受け取り、そばに控えていた式部官に渡す。

そのままモナの手を取り、ローレリアンは大広間を歩きはじめた。わなわなと震えている王太子の前から、モナをつれだしてくれるつもりなのだろう。

ああ、幸せ。こうして、もう一度、ローレリアンの手を握れるなんて。

その感動を感じた瞬間、モナは、しまったと思った。

なんで、手袋を取ってしまったんだろう。

モナの手は、かなり荒れていた。日焼けやそばかすは化粧でごまかせるけれど、荒れた手だけは、どうにもならない。

ローレリアンと再会するまでの3年間、モナはアミテージで悪戦苦闘していたのだ。

下町の子供たちの家を、なんとかかまともな孤児院にまで変え、貧しい人でも通える学校の経営を軌道に乗せ、その合間にはレオニシユ医師の手伝いもしていた。

この仕事をやりとげなくちゃ、アミテージからは離れられない。

その一心で、懸命に頑張ったのだ。

結果が、この手。

これは、貴婦人の手ではない。

ふと、ローレリアンが立ち止まった。

モナが気にしている荒れた手が、もちあげられる。

「きみは、ちつとも変わっていないね。

その素敵なドレスのせいで、最初はどこの御令嬢かと、思ったけれど」

どきまぎしながら、モナは答えた。

「あの、手を離して」

「どっぴして?」

「だって、荒れてるから」

「この手が、きみは変わっていないのだと、わたしに教えてくれた。この手は、世界で一番、美しい手だよ」

そつと手の甲に、口づけられた。

どっぴゃー、どっぴしゅじゅー!

そのモナの心の悲鳴とともに、舞踏会の会場からも歓声があがった。

いつのまにか、音楽もダンスも止まってしまっており、会場にいた人々はみな、ローレリアン王子とモナシェイラ姫に注目していたのである。

それはそうだろう。

いままで女性には見向きもしなかったローレリアン王子が、特定の女性のために怒って舞踏会の会場を突っ切って歩くなんて真似をしたうえ、王太子から女性を奪い取り、「彼女とは、遊学から帰ってきたら、いつしよに踊ると約束していた」などと宣言し、そのあげくに、手の甲へ口づけを贈ったのである。

しかも、その女性は、18歳の妙齡の美女。

ほっそりとした優美な肢体に、個性的な美しいドレスをまとい、黒髪に薔薇をかざっている、名門侯爵家のお姫さまだ。

その血筋は南三国の王家に連なり、王妃にだって立てる身分の女性。

ちょっとばかり変わり者だという噂もあるが、ローレリアン王子殿下も普通の育ちとは言い難い方なのだから、ちょうどつりあいがとれて、よろしいのではないか。

舞踏会の客は、全員が、そう思ったのである。

王子とモナのうしろに、ぞろぞろとついて歩いていた側近たちは、内緒話に余念がない。

「馬鹿だなあ、リアンのやつ。踊る神官なんて滑稽だとかいって、踊るの嫌がってたくせに」

「あの場を丸く収めるためにモナ様の言葉を受けて、約束がどうのと答えしてしまったようだがな。こういう経緯をして、みずから墓穴を掘るといふのだ」

アレンとアストウールの会話を聞いて、モナの兄、ロワールが苦笑する。

「殿下がモナと一曲踊らない限りは、この騒ぎに、収拾はつかないでしょうな」

勝手なことをいいやがつてと、王子がこちらをにらんでいるが、側近たちは面白がるばかりである。アレンやアストウール以外の者達も、言いたい放題だ。

「忍ぶれど色に出にけりとは、まさにこのことですな。切れ者で名高い王子殿下も、色恋沙汰には、うとかったか」

「いやいや、ほほえましいではないか。殿下にも若者らしいところがおありになるとわかって、わたしは、ほっとしましたがね」

「まったくです。このままでは、神々にお祈りするだけで枯れ切った若年寄りになってしまわれるのではないかと、心配しております」

側近たちには、苦境にある王子を救おうという気持ちは一切ない様子。

令嬢を助けるために、なりふりかまわず吹っ飛んで行ったのだし、あなたの手は世界一美しいなどと気障な台詞を吐くくらいだから、まちがいなく王子の側にも好意があるのだろう。がんばれ若者よ、といった態度である。

しかも、ローレリアンの目に前にいるモナは、男心をくすぐる可愛らしい目で、彼を見あげて言うのだ。

「あの……、あのね、ローレリアン」

「うん」

「その、迷惑でなければいいのだけれど、一曲だけ、わたしと踊ってもらえない？」

王子の整った顔が、苦慮にゆがむ。

愛しくてならない、すみれ色の瞳をもつ姫君の希望はかなえてやりたいが。

しかし、その望みが、ダンスとは。

人々の興味本位の視線を浴びながらダンスを踊ったりしては、神聖なる神官位をつつしんでいただき、朝と夕べに静かに祈ることを日課としている王子の自尊心は、著しく傷つくのである。

モナは自分のドレスを、優雅につまんで見せた。

「このドレス、とても素敵でしょう？」

「そうだね」

「一番上にかぶせた布が、砂漠渡りの東国の薄絹なの。その薄絹に、いちめんの刺繍を施したのよ。」

この布を、アミテージの新しい特産品にしたいの。

草原の中の街に、いままでにない仕事を生むのは、とても難しいわ。

この薄絹が国中で流行れば、国境の街の女の人たちへ、刺繍の仕事をあげられる」

「なるほど」

「わたし、べつにダンスをしたくて、ここへ来たわけじゃないの。」

ただね、建国節の王宮の舞踏会で注目を浴びた女性が着ていたドレスは、その年のローザニアの流行になるのよ。

すこしでもたくさんの人に、このドレスを見てもらいたいの」

「うーん……」

「それに、こっちのレースは、ローザニアの名産品にならないかしらと思っただけね」

「我が国の？」

「そうよ。ローザニアには、優れた織物技術を持つ工場が、いっぱいあるのはご存じでしょ」

「まあね。国の産業の発展については、政府にも重大な責任がある」

「ヴィダリア侯爵領にある織機を作る会社が、レースを編む機械を

開発したのよ。

いままでレースだけは人の手で編むものだと思われていたけれど、機械で早くたくさん編めるとなったら、お金持ちだけじゃなくて普通の市民もレースを買えるようになるわ。

そうなれば、市場規模って、ものすごいものになるんじゃないかしら？」「

きみはいつたい、何を考えているんだと、ローレリアンはあっけにとられる。

「市場規模、だって？」

「そうね、『相手は世界！』みたいな？」

こんなことを考えているお姫さまなんて、この世には一人しかない。

「モナ！」

「ねえ、ローレリアン。あなたには、どこかの役所から、産業奨励金みたいなお金を融通できる力はある？ それとも、どなたか投資家を紹介してもらえないかしら」

「は？」

「レースを編む機械は高価なのよ。実験的な工場をつくるためには、すこし大きな初期投資が必要かなー、なんて。

父には、こんなこと、おねだりできないの。女が男の仕事に手を出すなんて、とんでもないと、叱られてしまうわ」

「……………」

ついに王子殿下は黙りこんでしまった。

モナは、普通の貴族の令嬢ではない。それは、よくわかっていたつもりなのだが……。

ふたりの会話に聞き耳をたてていた側近たちも、あきれ顔だった。

「なんだよ、あの色気のない会話は」

「いや、あれも立派なおねだりだ。その証拠に、愛らしい令嬢に、ねえと迫られて、王子殿下はおこまりだ」

「ほら、こまってる、こまってる」

モナは、とどめとばかりに微笑んで、ローレリアンを見つめた。もちろん、両手は可愛らしく、お祈りの形にあわせられている。

「お願い。わたしと踊ってください。ローレリアン王子殿下」

王子を見あげてくる瞳は、美しいすみれ色だ。いつもローレリンが切なさに胸を痛めながら、懐かしく思っていた瞳である。

盛大なため息をつきながら、王子はモナにエスコートの腕をさしだした。

「お手をどうぞ、モナシェイラ殿」

ぱあっと、モナの顔が輝き、王子は苦笑する。嬉しそうな彼女を

見ると、ローレリアンも幸せなのだ。

舞踏会の会場は、割れんばかりの拍手で満たされている。

その中心にむかって、見目麗しい王子と令嬢のカップルが、楽しそうにしゃべりながら歩いていく。

「ねえ、ローレリアン。あなた、神官さまなのに、ダンスも踊れるの？」

「あたりまえだろう。王子と呼ばれるようになってからの、わたしの苦勞を察してほしいね。王族に必要とされる教養は、ひととおり身につけさせられたよ」

「あら、どうせ涼しい顔で、なんでもすぐにできるようになったんでしょっ？」

「いや、ダメだね。国王陛下に言わせると、わたしは芸術音痴であるらしい。

美しい絵画や彫刻で国民の腹は満たされないと申し上げたら、お叱りを受けたよ」

「あらあ、それって真理なのに。」

綺麗なものを綺麗だと思える心って、戦争がない平和な時代に、おなががいっぱいの状態でいて、はじめてもてるものだと思うわ」

「きみ、アミテージで、そつとう苦勞したんだね」

「そりゃあもう、山とさうぼうどー！」

「では、アミテージの貧しい人々のために、せいぜい華麗なダンスを踊るとしよう」

ふたりが大広間の中央にたどり着くやいなや、華やかな音楽が鳴り響く。

そつとモナの耳元に、ローレリアンはささやいた。

「左手で、ドレスの裾をつまんでごらん」

言われたとおりにモナがドレスをつまむと、ローレリアンは大胆に足を踏み出した。

モナは「ひゃあ！」と小さな悲鳴をあげる。

こんなに広い歩幅でステップをリードされたのは初めてだった。

まるで宙を飛んでいくみたいだ。

腰を支えられながらターンを切ると、モナの左手でもたげられたドレスの裾が、風をはらんで大輪の花のように開く。

その効果を見たローレリアンは、「ふむ。これはいい」とうなずいた。そして、モナに「ついてこられるね？」と笑いかけると、くるり、くるりと回転するステップをくりかえして、大広間をななめに横切っていく。

観衆から、どよめきと拍手が湧きあがる。

まさに、軽やかなドレスを見せびらかすためのダンスだった。

しかも、見ている者も、踊っている者も、最高に楽しい。

ローレリアンは、モナが俊敏な名剣士だと知っていて、こんなに大胆にふるまうのだ。普通の貴族の令嬢では、こんなリードには、とてもついていけない。

舞踏会に集まっていた貴族たちは大騒ぎだった。

とくに女性たちは、興奮しすぎて卒倒寸前の者まで出る始末である。

堅物だと思われていたローレリアン王子は、もとが美形なのでたいた貴公子ぶりだし、お相手の令嬢も、とても魅力的。

とにかく、老いも若きも流行に敏感な女性たちはみな、明日になったらただちに、あの薄絹のドレスを注文しようと思った。

その後、薄くて軽いドレスの裾をつまんでくるくる回るダンスは、貴族たちのあいだけだけでなく、ローザニア王国の国中で大流行となったのである。

ローザニアの王都プレブナンの王宮は、街の中心部を大きく蛇行して流れるレヴァ川のほとりの丘の上にある。

王宮の川側は建築物を建てるには傾斜が強すぎる斜面となっており、古い時代にはその斜面が城を守る天然の防御帯として利用されていた。この斜面を駆け登ろうとした敵は、上から石や煮えたぎった湯などをあびせかけられ、ことごとく撃退されたというわけである。

もつとも、ここ1000年のあいだ、ローザニアは首都へ他国の侵入を許していない。小競り合いの戦争は数限りなくあったが、国を疲弊させるほどの大きな戦がなかったおかげで、いまのローザニア王国は豊かな繁栄の中にあるのだ。

王宮がある丘を取り囲む城壁の内側には、壮麗な宮殿のほかに、さまざまな公官庁の建物と、いくつかの神殿、それに貴族の屋敷が建ちならんでいる。

古い時代の都市城壁の内部の広さは、中央集権化が進んだ今の時代の国家の首都としては、とうに手狭になっているのだ。なにしろ大国ローザニアの公官庁で働く人の数は、王都プレブナンだけでも50000人を超えている。

結果として、古い城壁の内側は国の政治中枢機能を維持するための街となり、城壁の外側には、商業地区や庶民の街が広がるようになったわけである。

現在の王都の人口は公称30万人だが、働き口を求めて下町へ流れ込んでくる貧しい人々の数は増加の一途をたどっている。城壁外の街は外へ外へと日ごとに成長しつづけており、街の外縁はこれからも、無限にふくらむのではないかとさえ言われていた。

6月の早朝、王宮の奥深くに位置する王族の居住区で小姓として働くラッティ少年は、夜明けの光に輝く窓からのながめを見て、感嘆のため息をついていた。

彼がこの王宮で、プレブナンが最も美しい季節とされる6月をむかえるのは、これで3度目となる。

何度見ても王都の6月はすばらしかった。

街のそこかしこに植えられたマイカの木の花には白い花がびっしりつついており、その光景を高い位置にある王宮の窓からながめおろすと、まるで街全体が白い霞でおおわれたように見えるのだ。

「さて、急がなくちゃ」

深呼吸で感動を胸におさめ、ラッティは先を急ぐ。

奥の廊下に人影はない。

やたらと高い天井からは、ラッティの足音だけがこだまとして返ってくる。

夜明けの直後なんて時間は、貴族たちにとっては、真夜中も同然なのだ。

王都が大きな街になったせいで、旧市街を守る城壁の門は、昔のように日暮れとともに閉じられることがなくなった。そんなことをしていたら官庁街と商業地区が分断されて、街全体の経済活動に支障をきたすからである。

城門が夜も開かれるようになると、帰宅の心配をしなくてもよくなった人々は、夜の街へくりだして長い一日を楽しむようになった。

太陽の動きとともに目覚めたり眠ったりしていた原始的な生活の時代は、都市の発展とともに終わったのだ。

夜の楽しみを覚えた人々は、昼間の仕事ですんでから、観劇や音楽会、居酒屋での会合などにでかけ、夜中まで忙しく過ごす。

とくに社交が生活の大切な部分をしめている貴族は、夜が遅くなりがちだ。いまでは貴族の昼食会は、午後4時ごろに開かれるのが常識。だから、早朝の王宮も、いまだ寝静まったままなのである。

静かな廊下を歩くラッティの手には、銀の盆がある。

盆の上ののっているのは、パンと、ゆで卵と、新鮮な野菜で作った料理がひと品。それに、熱いお茶と、バターが少々。

これはラッティがお仕えるローザニアの第二王子ローレリアンさまの朝食だ。

ラッティは王宮の使用人として召し抱えられてから、しばらくのあいだは国王陛下の寵妃エレーナ姫にお仕えしていた。エレーナさまはとても優しい方で、宮廷作法の何たるかは、すべてこの方に教えていただいた。

ラッティがやっと、だいたいの仕事や作法を覚えたころだったと思う。エレーナ姫のところへ、宮廷の奥向きを取り仕切る侍従長がやってきた。

彼は来るなり、エレーナ姫に訴えた。

「ローレリアン王子殿下は、侍従たちが懸命にお仕えるのに、すべてがお気に召さない様子です。

最近では怒りっぽくなられて、口をきいて下さらないこともしばしば。

なにをお怒りなのか、みなさっぱり心当たりがございませんので、こまりはてております」

侍従長の訴えを聞いたエレーナ姫は、笑って答えた。

「きつとそうになると、思っておりますわ。

侍従長、試しにこの子をつれていって、王子の身の回りの世話を任せてごらん下さい。

他の者は、この子がすることの邪魔をしてはいけませんよ」

かくしてラッティは、ローレリアン王子殿下のお気に入りの小姓として、お側へ仕えることになったのである。

真相は、なんとということもなかった。

王子はただ、侍従たちの過剰な仕事ぶりに、うんざりしていただけなのだ。

彼らは宮廷の慣例にしたがって、一生懸命王子殿下のお世話をしようとしたのである。

たとえば朝の御仕度などは、王子殿下が目を覚まされると、夜どろし部屋のすみに控えていた宿直の侍従が「殿下がお目覚めでございます」と触れてまわるところからはじまる。

すると、別室に控えていた御仕度係がぞろぞろと寝室へ入場してきて、まずは靴係の侍従がベッドの足元へ室内履きをそろえて置き、つぎに寝間着をお脱がせする係が前に進み出る。その次は、下着を着せかける係が、ガウンを着せかける係が、洗面道具をさしだす係が、おひげをあたる係が、髪を整えさせていただく係が……。

かなりの時間が経過したあと、上着を着せかけてもらって、時計係からネジを巻きおえた懐中時計を受け取るころには、王子殿下はすっかり不機嫌というわけである。

ローレリアン王子自身も、これでは居心地が悪すぎるので、何度となく侍従長を呼びつけては改善を要求した。すべてにおいて、無駄が多すぎると。

しかし、あわれなお育ちの王子殿下に誇りをとりもどしていただき、宮廷で快適にすごす方法を御伝授申し上げるのも自分の役目と真剣に思い込んでいた侍従長は、ただひたすら「すべて宮廷の習慣でございます。殿下には、慣れていただくしかございません」と答えただった。

賢いラッティは王子殿下にお仕えするようになると、殿下と侍従たちの間に横たわる、ありとあらゆる物事に対する認識の食い違いに驚くはめになった。

とにかく、毎日が苦難の連続だったのだ。「王子をよろしくたのみますね」とおっしゃるエレーナさまに、「どうぞお任せください」と約束してしまったことですら、後悔してしまっただほどである。

王子殿下に毎朝一個の卵と少々野菜を召し上がっていたために、ラッティは大粒の涙を、これでもかというほど流さなければならなかった。

ラッティがお側に仕えるようになったばかりのころ、毎食10人分の食事を目の前に出されて、王子殿下はたいそうお怒りだったのだ。

今日の食べ物にすら、こまっっている民が我が国には大勢いるというのに、この無駄と贅沢にまみれた食事の支度について、侍従たちはどう考えているのかと。

侍従たちには、侍従たちの言い分があった。

王子殿下に、お好みのものを御不自由なく召しあがっていただけ

るように、とどこおりなく仕度を整えるのが、我らの役目でございます。その時、なにを召しあがりたいかは、体調や御気分にもよります。それに、殿下がお召しあがりにならなかつた料理は、貧民を救う慈善事業の一環として街角でふるまわれております、粥の中へ入れられますので。けして無駄になど、しておりませんと。

しかし、庶民の暮らしをよく知るローレリアン王子は、それを聞いて、なお怒ってしまわれた。

救貧院で配る粥とは、ひどい代物なのだ。あちこちで回収された残飯を、元が何の食べ物だったのかわからないほどドロドロに煮込んで作る粥は、薄くて、臭くて、味もおかしい。

ところが、そんな粥でも命をつなぐ糧にはなるので、粥がふるまわれる時間帯の救貧院の周囲には、飢えた人々が群れ集うのだ。

あんなものを食べていて、明日のために働こうという意欲など起こるはずもない。

宮廷でまかなわれる、この豪華な食事をわざわざ無価値な粥に替えて、多額の金を空中にただよう泡のごとく消し去ってしまうくらいなら、最初から、その金で貧しい人々に仕事を与えればよいではないか。

無駄に大きくなった王都には、道端につもる馬糞をかたづけたり、下水道にたまる汚泥を掃除したりするような、行政主導でなすべき仕事がいくらでもあるだろう。

たとえ汚れる大変な仕事であろうとも、その仕事は人の尊厳を守る、大切な仕事なのだ。仕事で得た小銭で買うパンを食べるほうが、

ただで配られる粥を食べるより、生きる意味を実感させてくれる。

動物の餌と大差ない粥を道端で配り、自分はこんなものを食べてしか生きられないのかと貧しい人々を絶望させることは、慈善でもなんでもないのだ！

そのように叱られた侍従たちは、戸惑うだけだった。

毎日つつがなく、高貴な人のお世話をする。

それが侍従の仕事であり、変わらないことこそが、彼らの誇りだったのだ。

その後、びくびくしながらも古くからのしきたりを変えようとしてない侍従たちに怒った王子殿下は、とうとうお食事をなさらなくなってしまうわ。

パンと水だけでも人は生きていけることを、立派な教育を受けた馬鹿どもに、教えてやるうというのである。

しかし、ラッティには、精力的に働く大人の男の体が、パンと水だけの食事に長く耐えられるとは思えなかった。

そばで見ているとローレリアン王子は、朝から晩まで休むことなく、大変な集中力を持って仕事をつづけている。

休むべき時には休み、疲れを癒すために滋養のある食べ物召しあがっていただかなければ、いつかは倒れてしまわれるのではないかと、ラッティは本気で心配しつづけた。

殿下と呼ばれる身分になっても、ローレリアンはラッティにとつて、「大好きなリアン兄ちゃん」なのだ。辺境都市の下町で犯罪に手を染め、転落人生に陥る寸前だった自分に、新しい未来をくれた人である。

王子殿下と侍従たちの無言の戦いが3週間目に突入すると、ついに耐えきれなくなったラッティは、泣きながら王子に懇願した。

「お願いです、殿下。

ぼくが責任をもって、殿下のお食事の手配をさせていただきます。普段のお食事はなるべく質素にいたしますし、量にも気をつけます。ですから、どうか、もう少しだけ、ほんのちよつとでいいですから、まともなお食事をなさってください。

侍従の方々も、お願いです。

貧しい人々の暮らしぶりを憂える王子殿下の優しいお気持ちに、どうか、よりそってさしあげてください」

心から王子の健康を気遣う少年の涙は、かたくなな大人たちの心を動かした。

その日から、ローレリアン王子のお食事に関するすべての決定権は、お小姓のラッティが握ることになった。

もつとも、後日、泣かせてしまつて悪かつたと謝つてきた王子殿下にむかつて、ラッティはけろりと、言い放つたのだが。

「ほんと、大人のプライドって、めんどろくさいですよねっ！
まっ、いいじゃないですか。

これでまた一つ、リアンさまの身の回りの問題がかたづけましたから。

ぼくは、自分の仕事が《涙ぼろり》でやりやすくなるなら、いくらでも泣いて見せますよ。

涙なんて、タダです。お安いもんじゃありませんか」

したたかな詐欺師ラッティ少年の本質は、王宮に仕える優雅な小姓になっても変わっていないのである。舌先三寸で大人を手玉に取る彼の才覚は、その後もおおいに王子殿下の助けとなったのは言うまでもない。

「おはようございます」

「おはよう」

銀の盆を手にもって王子殿下の居室へ通じる廊下へ入るとき、ラッティはいつもその場で、殿下をお守りする近衛隊士に挨拶をする。廊下で宵晩に立つ隊士はかなりの下っ端だが、おのれの分をわきまえているラッティは、丁寧な態度を崩さない。

ローレリアン王子の居室は、王族が住まわれる区画の端のほうにある。

奥の宮の東翼と呼ばれるその一角は、本来ならば前々国王の嫁に行きそこねた娘という肩書をもつ老婆とか、病気がちで頭の弱い甥といったような、王宮外に宮をもてない王族が、ひっそりと暮らす場所である。

ローレリアン王子が王都へもどった当初、宮廷の官吏たちは王子のことを、宮廷外で育った庶出子としてあなどっていた。まさか、わずか3年で父国王から輔弼の王子として頼りにされ、兄王太子よりも玉座に近い男として国中から畏怖のこもったまなざしで仰ぎ見られる人になるとは、夢にも思っていなかったのである。

人々の王子を見る目が変わると、あわてたのは王子に東翼の部屋をあてがった侍従たちだった。

しかし、侍従長から何度となく、もっと中央に近い便利で格式の

ある部屋へ移るようにと勧められたにもかかわらず、ローレリアン王子は「奥まっついていて静かな今の部屋が好きだ」といって、まったく取りあおうともしなかった。

現在、宮廷の奥向きを預かる人々は、さまざまの意味で怯えている。

原因は、王子殿下だけではない。

王妃に先立たれてから20年ものあいだ独身をつらぬいてきた国王は、ローレリアン王子の母親である寵妃のエレーナ姫が手元にもどると、まるで長年連れそった夫婦のような態度で彼女を迎え入れた。もちろん、閨房の営みもあるという。

王子殿下と母君の御寵妃を軽くあつかったむくいだが、いつか我が身にかえってくるのではないかと、怯える官吏の数は年々増える一方なのである。

廊下の入り口で近衛隊士に挨拶をすませたラッティは、どんどん奥へと進んでいく。

さきほどとは打って変わって、この一帯には、すでに活動をはじめた人の気配が満ちていた。

執務室や接見室の窓は、王子の秘書官によって、すでにあけられている。あたりには六月のさわやかな風が、そよそよと吹いていた。

王子殿下の秘書官には、順番でまわってくる当直当番をこなす義務がある。王子殿下が夜遅くにされたお仕事の結果として、朝一番で各所へ配られる文書などは、夜の間には整えられるのだ。そのほか

にも、夜間の急使に備える意味もある。

昔は、よほどのことがない限り、王宮への夜の使者は国王や大臣が目覚める時間まで待たされるのが慣例だった。

その慣例がまた、王子殿下のお気に召さなかったのだ。

時代は変わり、人々は夜も起きて活動している。そういう時代の夜の急使には、夜を徹して走ってきただけの、重大な意味があるのだと。

先を急ぐラッティは、その夜の仕事を任されている秘書官とも廊下ですれちがった。

「おはようございます」

「おはよう、ラッティ」

相手は眠そうだった。きっと、夜通し、書類づくりにいそしんでいたのだろう。

奥の宮の東翼は、窓の下がレヴァ川をながめおろす急斜面という、正真正銘の奥まった一角である。そのため、このあたりのお部屋に住まわれている王族は、庭園の散歩を楽しもうと思うと、広大な王宮の建物の中を、かなり歩いて移動しなければならなかった。

奥の宮で、ひっそりと暮らす王族には、老人や体が不自由な方も多い。そうした方々の無聊をお慰めするために、奥の宮の廊下の内側には小さな中庭がしつらえてあった。

もともとその中庭には花壇やささやかな噴水などがあつたのだが、ローレリアン王子が東翼の主となってから、それらはすべて撤去され、地面はプレブナンの街の一般的な石畳と同じ素材の敷石で舗装されてしまった。

いま、その中庭では、王子殿下の護衛任務につく近衛連隊に所属する小隊の早朝訓練が行われている。

一定の距離をとって並んだ近衛隊士が、士官の号令に合わせて剣術の型の練習をしている姿は、じつに見事だ。

突きや払いなどの決め技がくりだされるたびに、「えい！」「やあ！」といった気合いの声が聞こえてくるのも勇ましい。

ラッティは、その光景を横目でながめながら、さらに先を急いだ。夜明けとともに、ローレリアン王子の住まわれる東翼は、活動を開始する。あと少ししたら大勢の事務官が出勤してきて、この廊下には忙しそうな人が、とぎれることなく行き交うようになるのだ。

この活気に満ちあふれた職場が、ラッティは大好きだった。

貴族の生活につきものの、頹廃しきつた気怠い雰囲気など、ここには微塵もない。

あるのはただ、国家のために働くこうと決意した男たちの気概が醸す、厳しい空気だけである。

東翼の主、ローレリアン王子の口癖は『王族は、国家の僕しもへとして国のために働くべく、運命づけられた人間であるにすぎない』だっ

た。

この言葉のせいで、王子のまわりには、王子を慕う人が集まる。

聖王と呼ばれた初代ローザニア国王パルシバルは、みずから『神々の御意志により選ばれし神聖なる統治者』と称した。国の頂点に立つ王を神格化し、人々の神々に対する恐れのお持ちまでも、国を支配するための力のひとつとして利用したのだ。

ある意味、ローレリアン王子の考え方は、初代聖王の宣言を全否定している。

自分は選ばれたわけではなく、たまたま王族に生まれたただけの、ただの人間だと宣言しているのだから。

王子に言わせると、『わたしが神官の法衣を脱がないのは、王族の一員として大きな力を手にしても、この身は万物の命をつかさどる大いなる神々の意志のもとに生かされている、一個の人間にすぎなことを忘れないため』なのだ。

それらの言葉のすべては、王子の行動によって、誠の心であると証明される。

勤勉な王子は夜明けとともに起きだして、一日の活動の前に静かに祈ってすすす時をもつ。その祈りには、ローザニア王国の民の末永い幸福への願いがこめられている。

今も昔も、王族の暮らしぶりに対する庶民の関心は高い。

噂は噂を呼び、近頃街の人々は、ローレリアン王子を、こうあだ

名する。

『ローザニアの聖王子』

このあだ名には、敬意と揶揄が入り混じっている。

王子殿下のお考えは立派だが、そこに若者特有の理想に溺れた甘さがあるのも事実だ。

国というよりは巨大な経済活動圏と化したローザニアは、まるで勝手に動きまわる怪物。富める者と貧しい者の格差は、もはや崩せない断崖絶壁そのものだ。虐げられた者達のなかには、暴力をもつてこの断崖絶壁を突き崩そうともくろむ、過激な行動に走る一派まで出てきている。

人間の欲望という名の混沌のなかで混乱しきっている現在の王国を、はたしてこの王子は、どのように導くのか。

口先だけでなく、本当に彼は、この国を変えられるのか。

聖王子という異名には、そんな国民の期待と不安が、こめられているのだ。

「おはようございますー！」

やっと王子殿下の私室にたどり着いたラッティは、背筋をぴんと

のばして、ドアをたたいた。

「入りなさい」

ドアのむこうからは、王子の声。

許可を得てドアを開けたラッティは、部屋の中へ入る。

そこにおいでになるのは、王子殿下お一人である。

王子と侍従たちの3年にわたる長い戦いは、ほぼ王子側の勝利で決着していた。いまでは「睡眠をとるという、もっとも人として無防備な行為の最中である王子殿下を、お一人にすることだけはできません」という侍従の主張のみが、生き残った過去の習慣だ。

夜通し寝室で王子殿下を見守る宿直役は、その場に刺客が入り込んだとき、自分の命を盾にしても眠る殿下に警告を発する役目を帯びている。

しかし、王子殿下の目が覚めれば、そのような役目の者も必要なくなる。今現在、宿直の侍従は、王子殿下がお目覚めになれば、うやうやしい一礼とともに寝室から退出することになっている。

ラッティは部屋の奥にすすみ、王子殿下がいつも簡単な朝食をめしあがるために使っているテーブルに、銀の盆を置いた。

すでにローレリアン王子は室内着へのお召し替えをすませられ、窓辺の椅子でくつろいでおいでだった。朝のお祈りもすんだ様子で、寝室の隅に置かれた小さな祭壇の扉は閉じられている。

ベッドの寝具は見苦しくない程度にかたづけられ、その上には軽くたたんだ夜着が置かれていた。

お目覚めになられた王子殿下は、そこまでの身支度を、お一人で済ませられるのだ。

どれもこれも、いつもと同じ光景だ。

それを見て、ラッティはほっとする。

昨夜はベッドで寝てくださったのだなと。

時々王子殿下は、徹夜仕事をなさるのだ。

お休みになった形跡のないベッドを見ると、ラッティは心配のあまり一日を憂鬱な気分ですごすはめになる。

とりあえず安堵したので、てきぱきと元気よく、ラッティは動きまわる。

まずは、鏡台に置かれた洗面道具を、寝室の奥にある衣装室へ運びこむ。

ここには殿下の身支度のお手伝いをする侍従がつねに控えていて、王子が使った道具を洗ったり、剃刀の手入れをしたりといった、裏方の用をはたしてくれる。

道具の受け渡しをしながら、ラッティは侍従と目で会話をする。

今日の御召し物は？

ちょっと、まっついていてください。

王子の寝室へもどったラッティは、熱いお茶をカップに注ぎながら、なにくわぬ顔でたずねた。

「リアンさま、本日のご予定は？」

もちろん、王子の日程は、ほとんどの場合事前に決まっている。

けれども、この王子は、普通の王子ではないのだ。日程はしばしば、王子の気まぐれで変更になった。

読んでいた小冊子から顔をあげたローレリアン王子は、ふふっと笑った。

「そうだな。昼ごろ、ちょっと街へでかけようかと思うんだが」

「では、法衣ではなく、地味めの上着をご用意いたしますね」

「そうしてくれ」

「どうぞ、朝食をお召しあがりください」

王子が席に着き無事に食事が始まったのをみとけると、ラッティはまた動きまわる。

衣装室の侍従に今日の御仕度の内容を伝え、近衛隊の待機所にも走っていく。

「おはようございますー！」

大きな声であいさつをしながら待機所へ入っていったら、そこにはアレン・デュカレット卿と数名の部下がいた。

王国一の剣の使い手の称号である桂冠騎士の名を得ると、その騎士には名誉だけでなく、地位まで授けられることになっている。

士官学校を卒業したばかりのアレンに与えられたのは、ローレリアン王子付き護衛小隊の隊長の地位だった。

王族の護衛任務には、通常、三の小隊が交代でつくことになっている。

一勤務は、二泊三日。一隊が王宮に泊まりこむときには、もう一隊が王宮の側にある近衛連隊の練兵場で訓練、最後の一隊が休暇となる。王宮へ詰めている72時間のあいだは、交代で仮眠を取りながらの勤務になるので、このような勤務体制になっているのだ。

「王子殿下はお昼ごろ、街へおでかけになるそうです」とラッティが告げると、濃緑色の軍服の襟元を広げて朝の鍛錬で吹き出た汗をぬぐっていたアレン・デュカレット卿は、チクシヨウとばかりに、手にもっていた布を投げ捨てた。

「あんにやろう！ 気まぐれで予定を変えられる、こっちの苦勞なんぞ、ちっともわかつちやいやがらねえ！」

まあまあと、部下たちが、アレンをなだめにかかる。

ラッティは、昔の旅の仲間の中かで一番変わったのは、アレン兄

ちゃんだよなあと思う。

陽気な少年の面影はなりをひそめ、外見は背が高くしてしなやかな筋肉をもつ、強そうで無愛想な武人になった。

そのうえ武芸一辺倒ではなく、頭の中には三年におよぶ士官学校生活のあいだに蓄えられた豊富な知識が詰まっているし、性格は冷静で、決断力も抜群だ。しかも静かな表情の奥には、ゆるぎない正義感と、まだ若さに滾る熱い血ももっている。

アレンが隊長に就任した当初、部下たちは年下の上司の存在に、かなり戸惑っていた。軍隊における階級は絶対だが、士官学校を卒業したばかりの青年に、上司面されるのも面白くなかったのである。

しかし、アレンは不言実行を信条とする、実直な人間だった。

小細工は一切なしで、部下には体当たりで接したのだ。

アレンが隊長に就任してから、わずか3か月の期間で、彼の小隊は王子付きの小隊のなかで、もっとも剣術の腕が優れている小隊となった。もともと近衛隊士は優れた資質を持つ選ばれた人間ばかりだし、その彼らに国一番の剣士が、もてるすべての力を注いで指導にあたったのだから、当然と言えば当然である。

厳しい鍛錬のなかで「おまえの持ち味は敏捷さだから、この手を覚えるといい」とか、「剣を返すときに肘を張る癖をぬけば、もっと素早くいい位置に剣を構えなおせる」などといった的確な助言をもらい、部下が己の成長を実感できるようになれば、自然と敬意も生まれる。

しかも、「挑戦なら、いつでも受けてやるぞ」と宣言され、「今日は俺が」と意気込んで毎日アレンにいどみ続けた部下たちは、いまだに連敗記録を更新中なのだ。

それにアレンが部下から尊敬を集める理由は、剣だけにあるわけではなかった。

「俺たちの使命は、命に代えても王子殿下をお守りすることだ。古臭い騎士道に固執する、くだらない矜持の持ち合わせなど、俺にはない。使える物は何でも使うから、おまえたちもそのつもりでいろ」

そう宣言した桂冠騎士は、射撃の名手でもあったのだ。

アレンは自分の小隊が練兵場での訓練勤務にあたっているときに、さまざまな態勢からの射撃の方法や、王子をお守りする際、小隊にどのような陣形を取らせるかなどを、熱心に研究した。

その過程においては部下にも忌憚のない意見を言わせたもので、アレンの小隊の隊員たちの結束力もまた、王子付きの部隊のなかでは一番だと言われるようになった。

「おい、短銃を出せ。朝のうちに殿下の外出先での担当部署の組み分けをするから、他の連中も集めろ」

無茶ばかり言う友人に対する怒りをおさめたアレンは、たちまち冷静な護衛隊長の顔にもどった。

部下たちは命令にしたがい、機敏に動きだす。

武器棚のカギが開けられ、テーブルの上に並べられるのは最新式

の短銃だ。この短銃の点火システムは軍事機密に類するあつかいになっているので、普段から護衛隊士達が持ち歩くことはない。

「うひゃあ、怖い!」

黒光りする危険な武器をまのあたりにしたラッティは、首を縮めて退散を決めこむことにした。

王子をお守りしたい気持ちは自分にだってあるけれど、お小姓の武器はあくまでも、たくましい生活力と如才ない人あしらいの能力だよなと思う、ラッティなのだった。

そんなわけで、ローレリアン王子とアレン・デユカレット卿は、その日のお昼すぎ、王都の繁華街を優雅に散歩していた。

彼らが歩いているフィールミンティア街の周辺は、商業地区の中でもひととき賑わっている区画である。道の両側には石造りの立派な建物が並び、その建物の一階や地下は、ほとんどが商店になっている。

「この界限は、まだ新しい街だね。

ほら、見てみたまえよ。

たとえば、あの建物の間口の広さだ。

あの広さが実現できるようになったのは、じつは、ここ10年ほどのことなのさ。

その秘密は、鉄の精錬技術の進歩にあるんだ。強さだけでなく、しなやかさまで合わせ持った鉄鋼を作る技術が開発されたおかげで、建物の天井には長い梁を入れられるようになった。だから、あれだけの間口を持った建物を、強度をそこねずに作れるようになったのさ。

鉄は、これからの技術の発展の可能性を、大きく膨らませる素材だよ」

アレンを相手に建築技術と製鉄法の話をはじめたローレリアンは、瞳を輝かせて、ご機嫌だった。

そういえば、こいつは昔から、ものつくりの話が好きだったなと、アレンは思った。有名な建築学の権威の私塾に出入りしながら、大

きな橋の設計図を引いたりして、喜んでいたっけと。

それなのに、いまじゃ王宮の中で報告書の山にうもれ、陰険な貴族たちとの陰謀合戦を主な仕事としているのだから、気の毒になっ
てしまう。

あたりを見まわしたあと、アレンは商店の窓に映る、自分とロー
レリアンの姿を見つめた。

アレンは、格子にはめこまれた板ガラスに映る、自分たちの姿を
確認するのが好きだ。そこには自分達だけでなく、自分たちの背後
にいる怪しげな人物の姿も映りこむからである。

もつとも、シヨウウインドウをのぞきこむアレンの姿は、あくま
でもウインドウの中身を検分する、ちょっとだけ裕福な若者といっ
た感じだ。街をお忍びで散歩するために、ローレリアンとアレンは、
貴族ではない街の金持ちの男たちがよく着ている、濃い色合いのフ
ロックコートを身につけていたのだ。

最近、王都の商業地区では、このフロックコートが、もつともス
タンダードな服装となっている。

一昔前までは、商売や工場経営などに成功した成金の平民は、み
なごぞつて貴族の生活や服装をまねようとしたものだった。けれど
も最近になって裕福な平民の数が増えてきたら、彼らは彼らでひと
つの社会階層をつくって、そのなかで人付き合いをするようになって
たのだ。

毎日を忙しく働いてすごす商業地区の住民にとって、裝飾過剰な
貴族の服装は、手入れが大変なだけで邪魔な存在なのだろう。勤勉

な彼らの生活様式には、上等な生地で丁寧に仕立てたシンプルな服こそが、日常生活にもっともふさわしい服装として受け入れられたのである。

ローレリアンが目指すのは、そういった裕福な平民が多く集まる、フィールミンティア街にあるカフェの一軒だった。

カフェはもともと東国渡りの珍しいスパイスを入れたお茶を飲ませる店だったが、いまでは裕福な平民の社交場となっている。おたがいを自分の屋敷へ招待し合って、お茶会や晩さん会で交友を温める貴族の社交界から完全に締め出されている彼らは、彼ら自身にふさわしい交友の場を求めて、街のカフェに集まるようになったのだ。

酒が入らない昼間のカフェに社交の場を求めたのも、いかにも彼らしい選択である。勤勉を美德とする働き者の彼らは、一杯のお茶とともにカフェで友人や同業者たちから情報を仕入れ、最近庶民のあいだでまで読まれるようになった新聞を読み、また仕事へともどっていく。

現在、王都には、200を超えるカフェがあるとされている。そこでは、毎日、この国の経済を動かしている人々が、お茶を飲み、情報を交換しあっているのだ。

なかでもフィールミンティア街にあるカフェの『ふくろう亭』は、活気あふれる店だった。

ローザニアの神教によると、ふくろうは知恵の女神サガスのお使いとされている。大きく見開いた両の目で、すべてを見透かす知恵を持つと。

その名を店名に掲げた『ふくろう亭』の主人は、哲学者としても有名な学者だった。その店主の人柄が表れたせいで、『ふくろう亭』は王都のカフェのなかでも、もっとも置いてある新聞や本の数が多くて、内容も吟味されたものばかりだという評判なのだ。自然と集まってくる客も、新進気鋭の学者、新聞の記事を書いている論客の名士、作家や出版会社の社員といった、情報を発信する側の人間が多いのである。

ローレリアンはためらうことなく、この店の中へ入っていった。

店のつくりは開放的で、おもての通りに面した部分には、ガラス窓がたくさん並んでいる。この店も、最新式の建築技術の恩恵を受けている建物なのだ。

外の気候がさわやかな今の時期は掃きだし窓がすべて解放されていて、店の内部には表の通りの賑わいが、そのまま入りこんできていた。

「やあ、リアン。しばらく顔を見なかったが、元気かい？」

奥のテーブルで談笑していたグループが、ローレリアンの姿を見つけて声をかけてきた。

アレンは緊張を顔に出さないように気をつけながら、その連中を観察した。

全員が同じような、地味な色合いのフロックコートを着ている。年のころは20代から、せいぜい30代の前半くらいまで。外見は、害のないインテリといったところか。

挨拶として片手をあげたローレリアンは、その連中へ近づいていた。

「ひさしぶりだね。ここしばらく、わたしは父の仕事の旅行につきあっていたもので、王都にはいなかったのさ。」

こっちの連れは、クローネくんだ。取引先の御子息で、いま我が家に滞在中なんだ」

「やあ、どうぞよろしく」

同じテーブルについていた青年たちが、つきつぎにアレンへ握手の手をさしだしてきた。

握手をする瞬間、なんとなく値踏みの目で見られているような感じがするのは、アレンの気のせいではない。

青年たちは、いかにも他人のお下がりをもらって着ているようなアレンの身に合わない上着を見て、心の中で「田舎者だな」という判定を下している。

アレンは、内心でほくそ笑んだ。

彼はもともと田舎出身だから、田舎者であるという演技は得意だ。というよりは、演技をする必要が、まったくないのだが。

やぼったくて大きすぎる上着も、腋の下のホルダーに短銃をかくし持つためには、かえって都合がいい。

だからアレンは、ローレリアンのお忍びの行動を護衛するときには、田舎商人の息子を演じることが一番多い。

ゆつたりとした動作で知り合いのとなりやすわるローレリアンも、やや鈍そうな雰囲気、そこかしこからにじませていた。

目立ちすぎる秀麗な容姿の印象を薄めるためにかけている眼鏡が微妙な位置へとずり落ちて、頭はいいが切れ者とは言い難い金持ちの息子という役柄が、ぴたりとはまりこんでいる。

仲間たちとローレリアンは、のんびりと会話する。

「へえ、リアンのお父上は、流通関係の会社を経営なさっておいでになるのだったな」

「そうだよ。いい加減に会社の後を継ぐ覚悟を決めると、父からは旅行のあいだじゅう、説教されてしまった」

「それは災難だったね」

「のんびり者のわたしには、会社の経営など向いていないと思うんだ。ところが父ときたら、せっかくここまで自分が大きくした会社を、息子のおまえは見捨てるのかと、大憤慨だ」

「とりあえず、後を継ぐようなふりをしておけばいいじゃないか。きみの代になったら、実際の経営は、社内の優秀な人間に任せてしまえばいい」

「腐った根性をたたき直してやるという父親から尻をたたかれてるわたしに、ついてくる人間など、いるだろうかね？」

「きみに必要なのは経営の知識より、社員にだまされて会社を乗っ

取られないようにする、法律の知識かもしれない」

彼らの会話を聞いて、アレンは思わず漏れそうになる苦笑を、こらえなければならなかった。

ローレリアンは、たいした役者だ。

一代で財を成した裕福な父親は、息子の教育には失敗したらしいと、誰もが信じてしまつ見事な演技である。

このカフェには、二種類のお客が集まるのだ。

表側の明るい場所に位置するテーブルにすわっているのは、本物のインテリ。

奥側の薄暗くて読書や勉強にあまりむいていない席にすわっているのは、有名人が集まる『ふくろう亭』の常連を気取りただけの、^{えせ}似非インテリである。

しばらくローレリアンと友人たちは、王都の最近の流行についての話題で盛り上がった。

王子のもとへ上がってくる報告書には、街の様子の報告もあつたから、この話題にローレリアンがついていくのは、苦もないことだった。

にぎやかに、ビヨレ公園の乗馬コースに出没する美女の話だの、つい最近市場に生まわりはじめたイストニア産の工業製品の話などがつづく。昔は海の向こうの遠い国だったイストニアは、今ではロザニアの重要な商売相手なのである。

「まさか、あの広大な内海を三日で渡れる日がこようとは、むかしの人々は、夢にも思わなかっただろうなあ」

「蒸気機関と自動織機の普及のおかげで、大きくて丈夫な帆布を、難なく織れるようになったからね。」

内海を渡る船は、いまじゃスピード合戦に夢中だ。ローザニアから今年最初の新茶をイストニアに一番に運び入れると、ご祝儀相場でもって、20倍の値がつくそうだから」

「それだけじゃない。その一番茶を運んだ快速艇を所有している船舶会社には、他の仕事も殺到するそうだし」

「なるほどねえ、宣伝効果か」

「ラカンの港にずらりと並ぶ、貿易船の船列は、それは見事なものさし」

「へえ、リアンは今回の旅行で、ラカンへ行ったのかい？」

「ああ。父の商売の話は、船とはまったく関係がないものだったけれどね」

「なんの商売をしいったんだ？」

「石炭の販路拡大だよ。ラカンでは最近、製鉄業が盛んなんだ。いろいろな加工製品のもとになる棒鉄を最新型の高炉で作りまくっている。その高炉に火を入れるためには、良質の石炭がたくさん必要なんだ。」

それにラカン公爵は、近年小型化が著しい蒸気機関を、鉄の荷車

に乗せて工場内で使っている」

「なんだ、それは？ よく意味がわからない」

「馬が必要ない馬車といえいいかな？

蒸気機関を動力にして、自走する荷車だよ。荷車自体が重たいから鉄のレールの上しか走れないんだが、ものすごい馬力を持っているから、重い棒鉄の運搬なんか威力を発揮している」

「へえ、そりゃあすごいなあ」

「将来は、内海を渡る船にも、蒸気機関が積まれるんじゃないかな？ ラカン公爵は、鋼鉄製の船を作ろうとしているらしいし」

「すごいなあ。ラカン公爵は、貴族にしては珍しい、先見性に富んだ企業家だね」

「公爵のように柔軟な思考を持った人物が、中央政界に打って出てくれればいいのに」

「思考停滞を起こした枢密院の議員連中には、問題山積みの今のロザニアを、どうこうする力はないからなあ」

「結局は御老体に鞭うった宰相カルミゲン公爵が、その場しのぎの政策をひねり出して、苦境をなんとかしたので、おしまいなんだ」

「我が国の将来は、これからどういう方向へ進むっていいのかね」

「低収入にあえいでいる末端の庶民は、ひどい暮らしぶりだし」

「農民は地主の貴族に搾取され、工場労働者は企業家に搾取される」

「なにをえらそうに。」

その搾取した金で遊び暮らしているのが、君じゃないか」

「いや、これはやられた！」

優雅な似非インテリ仲間が、どっと笑い声をあげる。

アレンは冷や冷やししながら、ローレリアンと友人たちの会話を聞いていた。

これは立派な政府批判だ。

宰相派の息がかかった憲兵などに聞かれたら、その場で逮捕されかねない会話である。

その会話の内容を聞きとがめたのか、笑い声がうるさかったのか。店の表側のテーブルで静かに話していたグループの中から、一人の男が抜けだして、こちらへやってきた。

アレンの背筋に、ぴんと何かが走る。

相手の男は、一見物静かな雰囲気だった。

古めのデザインの黒いフロックコートを着ており、痩せた体と、やや病的なうるんだ瞳の持ち主だ。年齢は30歳くらい。髪の色と瞳の色はローザニアで最も平凡な茶色で、大勢の人の中に紛れ込んだら、その中に溶け込んでしまっただけに見つけられなくなるだろうといった外見である。

けれど、この男は危険だ。

「国一番の剣士の警戒心が、びりびりとアレンの体中に、警戒せよと警告を発している。」

きつと今の自分の瞳には、鋭い光が宿ってしまった。だから、この男とは、目をあわせるわけにはいかない。

心のうちで、そう考えながら、なにくわぬ顔で視線をそらしたアレンは、自分の部下の配置を確かめた。

カウンターに二人。

掃きだし窓の外のテーブルに二人。

その二人を介して、すぐに連絡が取れて現場にかけつけられる位置には、最新型のライフル銃をもって完全武装している騎馬兵を、さらに二人ずつ二カ所に配置してある。

つまらなそうに、アレンは下をむく。

いまのアレンの役どころは、裕福な会社経営者であるリアンの父親のもとへ、修行としようして預けられた地方の商人の息子だ。有名な『ふくろう亭』へつれていってやるといわれてリアンについてきたものの、王都の青年たちの話題にはとてもついていけなくて、退屈しきっている田舎者。

この場にいる連中は、アレンがあたりの空気に神経を張り巡らせていることになど、まったく気づいていない。

じよじよに、筋肉へ緊張をためる。

相手に気づかれないうつ、極力静かに。

もし、近づいてくる男がローレリアンに何か害をなすようなら、アレンは迷いなく腋の下のホルダーから短銃を抜いて、撃つ覚悟だった。

「声が大きいよ、諸君」

痩せた男は苦笑しながら、ローレリアンと友人たちをたしなめた。

「これはどうも、失礼しました。リュミネさん」

仲間たちのうちで一番声が大きかった青年が、丁寧に謝る。

他の者達も、同意の意思表示として軽く目礼する。どうやら、このリュミネという男は、このカフェでは尊敬される立場にいる人間らしい。

リュミネは、いいんだと手で示しながら、落ち着いた口調で言った。

「きみたちの心配もわかるがね。さっきのような話は、公共の場所でおっぴらにやるべきではない。万が一のことがあれば、我々に交流の場所を提供してくれている『ふくろう亭』の主人にも、迷惑がかかりかねないのだから」

「そのとおりですね」

「配慮がたりませんでした。おわびいたします」

口々に仲間が謝るのを聞きながら、ローレリアンがアレンに言う。

「クローネくん。こちらは有名なサンエツト紙の論説委員、ジャン・リュミネ氏だよ。リュミネ氏がお書きになった社説には、いくつも有名な名文がある」

なんてやつだと、アレンは思った。

ローレリアンの演技力は、どんな名優も真つ青になるほどのものすごい。

いまの彼は、どこから見ても、有名新聞の論説委員を知り合いとして田舎者の取引先の息子に紹介できて、大喜びしている社長のバカ息子である。ほほがかすかに赤くなっており、さぞや彼の小さなプライドは、満足で満たされているのだろうなという風に見える。

リュミネの表情にも、苦いものが浮かぶ。

彼は人間を、尊敬できる人物と、そうでない人物とで、分類するタイプであるようだ。

「はじめまして、ローリイ・クローネと申します。高名なリュミネ氏にお目にかかれて光栄です」

おそらくリュミネの記憶には、自分の偽名は欠片も残るまいなと思いつながら、アレンは握手を交わした。

ちなみに、ローリイ・クローネとは、古語で『月桂樹の冠』という意味の言葉である。桂冠騎士の称号をもじっただけの、じつにくだらな偽名だ。

アレンの予測は正しく、握手の手を離した瞬間にはもう、リュミネはアレンへの興味を失っていた。

そして、ローレリアンに話しかける。

「ところで、リアンくん。

大きな声だったから聞こえてしまったが、ラカンへ行っていたんだって？ むこうは、どうだったかね」

嬉々としたローレリアンは、尊敬する文筆家に、ご報告だ。

「なにをお知りになりたいですか？ なんなりと、おたずねください」

「うーん、そうだね。

ラカン公爵が鉄の増産をためらわない理由について、なにか知っていることはないかね。普通、物を作るときには、需要と供給のバランスを考えて生産量を決めるものだろう。

きみのお父上も、ラカンはまだまだ石炭を買うと判断されているようだし。

建国節の直前に、国王の密命をおびて、ローレリアン王子がラカンへ行幸しただろう。あのあとラカン公爵は、王子へ急接近したように見受けられるし。

なにか、国家としての介入があったのではないかと、識者はみんな思っている」

「国家としての、介入ですか？」

「たとえばその……」

リュミネは声をひそめた。

「どこかの国と、戦争とか」

ローレリアンは、眼を見開く。

「まさか！ この大国ローザニアに、戦争をしかける国が、どこにあるというのです？」

「声が大きいよ、リアンくん」

「すみません、リュミネさん。」

あんまり、びっくりしたもので。

でも、それはありませんから、安心なさってください。

王子はね、ラカン公爵の馬がいらぬ鋼鉄の荷車を、国中に走らせたいという構想を、おもちなんですよ。

ラカンの技師たちは、鉄道とか、いつていしましたが。

技術的には、もう十分、実用可能なだそつです。あとは、資金と、国中にレールを敷いていく仕事を推進する、なにがしかの強力な意志さえあればいい。

王子はその『意志』とは、国の『意志』であるべきだと、考えているらしいですよ。10年、20年先の国の在り方を考えるのが、国政ということでしょうか。

国中に計画的に鉄道を建設すれば、建設のおかげで経済も潤うし、国民に仕事も与えられる。できあがった鉄道は、物資の流通の速度と量を劇的に変えるでしょうね。

そうなれば、ますますローザニアの経済は発展し、国際競争力も

増すでしょう。国民の仕事も増える。仕事が増えれば、限りある人的な資源の奪い合いが起こりますから、国民の生活も今より良くなるはずですよね」

おおと、ローレリアンの友人たちが、うなり声をあげた。

「そうか!」

「我がローザニアには、まだローレリアン王子がいたのか」

「いまに、あの若い王子が、この国を導くようになるのか?」

「ローザニアの聖王子が」

「ラカン公爵が8歳の娘を、王子の妃にしたがった理由がわかったぞ」

口角から泡を飛ばす勢いでしゃべる青年たちの姿を見ながら、アレンは震撼した。

店の表側に集まっていた知識人たちは、それとなく、こちらの話を聞いている様子だ。

きつと、今日のこの話は『さるすじからの情報によれば』な
どといった表現で、新聞の記事になったりするのだろうか。

貧富の差が爆発的に拡大し、貧しい国民の苦悩が澱おりとなって世間によんでいるいまのローザニアにおいて、国民の不満を他にそらすためには、もう他国へ戦争をしかけるしかあるまい。

そういう決断を、国王が下すのではないかと、識者の間では危惧されていたのだ。

ローザニア王国はローレリアンが言うとおり、大国である。今の段階では、他国から戦争をしかけられることはまずない。あるとしたら、戦争によって他国を植民地化し、その富によって現在の苦境から脱出しようとする、大国ローザニア側からの身勝手な宣戦布告だけだろう。

しかし、ローレリアン王子は、そんな人として恥ずかしい方法で問題解決をするつもりはないのだ。

しかも、大方の予想とはまったく違った展望で国の未来を思い描き、その方向性を国民に示そうとしている。

俺は、なんて男に、仕えることになったのだろうか……！

アレンは、ぼうせんと、にこやかに笑うローレリアンを見つめてしまった。

文筆家のリュミネは、また苦々しい顔をして、興奮する青年たちを見ている。

「諸君は、甘いよ」

高まった熱気を、いつきに醒めさせる一言を、リュミネは発する。

「たった一人の英雄の力にたよるようになったら、その国の命運はもう終わりだ。」

その英雄がどんなに優れた人間でも、人間であることには変わり

がない。

判断を誤ることだってあるだろうし、病気で倒れたり、事故にあつたりすることだってあるだろう。

現代の国家が、たった一人の人間の意志によって動くなんてことは、あつてはならないことなんだ」

ローレリアンは、おっとりと言う。

「そうですねえ。これから、この国がどういう方向に進むにしても、議会の制度は改革されるべきですよねえ」

むっとしたリュミネは、ローレリアンをにらんだ。

「きみ、それがどれだけ大変なことか、わかっていて言っているのか」

「あはは、すみません。我々にも選挙権をよこせというのは、ローレリアン王国の国民の宿願ですよねえ」

青年の一人が、口をはさむ。

「ちよつとすみません。」

ローレリアン王子は、第二王子として王都へもどつた直後から、いずれは貴族ばかりが優遇されている税制度や議会制度を改革するべきだと明言していたと聞きます。

そのせいで、彼は『王子殿下の影』としようされる、すご腕の護衛騎士を、片時もそばから離せない生活を強いられるはめになった。公式な発表はないが、彼に襲いかかった刺客の数は、片手じやたりないという噂ですよ」

アレンは心の中でつぶやいた。

片手で足りないどころではない。両手両足でも足りねえよと。

青年たちは言いつのる。

「それでも信念を曲げない王子に、いくばくかの期待をかけてしま
うのは、われわれの甘えでしょうか？」

「王子を指導者として仰ぎながら、国民もともに頑張るといふ姿勢
では、ダメなのでしょうが」

リュミネは一瞬鼻白んだあと、皮肉っぽい笑みを唇に浮かべた。

「人間というのは、楽なほうへ、楽なほうへと、流されたがる生き
物だな。」

いまのローザニア王国が、荒療治ぬきに、まともな方向へ進める
とは思えない。

王子も、ただの人の子だ。

彼自身も、それを認めている。

そうだ、おもしろいものがあるから、諸君に進呈しよう」

懐から小さな冊子を出すと、リュミネはそれを青年たちのテーブ
ルの上に投げ置いた。

なんだなんだと青年たちが冊子を見ると、それは出版元すらわか
らない、パンフレットと呼ばれる庶民向けの読み物だった。街角で
パンフレット売りが、ひとつ20カペくらいで売り歩いているもの
だ。内容はきわめて低俗で、社会風刺や艶聞が多く、小銭を払って
手にした客が、浮世の憂さをはらすための読み物である。

10ページほどのパンフレットには、銅版印刷のイラストが、いっぱい入っていた。パンフレットを買うような客は、読み書きがやっと程度の教養レベルであることが多いので、絵が多いほうが喜ばれるのだ。

パンフレットを手に取った青年が、タイトルを読みあげる。

「『踊る神官』？ これは、ローレリアン王子のことだろうか？」

アレンは、頭が痛むような気がした。

そのパンフレットには、建国節の最後におこなわれた舞踏会でのローレリアン王子とヴィダリア侯爵令嬢のダンスの様子が、おもしろおかしく書かれていたのだ。

愛らしい白いドレスの令嬢をうばいあう王太子と第二王子。

神官の法衣姿で、大胆なダンスを披露するローレリアン王子。

初めて王子殿下のダンスを拝見して、失神しまくる貴族の令嬢と奥方。

最後に王子と侯爵令嬢は、接吻をかわして別れを惜しんだことになっている。

事実が三割、勝手にくつつけた大げさなエピソードが七割といった内容だ。

それを読んだ青年たちは、声をあげて笑った。ご婦人方の連続失

神の様子など、まるっきり喜劇そのものだったのだ。

やっべー、ローレリアンが怒りだしたら、王子殿下の正体がばれちまう！

あわてたアレンは、パンフレットから目をはなして、ローレリアンを見た。

しかし、当のローレリアンは、かくしきれなかった厳しい色を少しだけ宿した目で、カフェの出口のほうを見ていた。

視線の先には、ジャン・リュミネの後ろ姿がある。

その後ろ姿は、すぐにカフェの外の通りの喧騒にまぎれて、見えなくなってしまうた。

5分後、ローレリアンとアレンは、ふたたびフィールミンティア街の路上にいた。

アレンはローレリアンがパンフレットの件で怒りだすのではないかと思っていたのだが、王子はあくまでも冷静だった。

「まあ、あのイラストが下手で助かったな。ちつともわたしに、似ていなかった」

アレンは笑った。

「似ていないどころか。あのイラストに『ローレリアン王子は絶世の美男子である』なんて文章がついているんだから、笑っちゃうよ。どう見ても、あのイラストの王子殿下は、ソラマメに目鼻を描いたような不細工顔だ」

「地下出版物の発行元に銅版画を作っておろす印刷屋なんて、腕が悪くてつぶれかかったような印刷屋ばかりだ。当然といえば、当然だな」

「地下出版物だあ？」

「そうだ。じつは、あのジャン・リュミネという男は、反政府系の宣伝パンフレットを世間にはらましている組織の幹部ではないかと思ってる」

このところ、また反政府的な内容のパンフレットの発行数が増えているので、直接様子を見てやろうと思って、来てみたんだが。な

「かなか尻尾は、つかませてくれないな」

「今回のことは、証拠にならないのか？ サンエツト紙みたいな格調高い新聞の論説委員が、『踊る神官』なんて低俗読み物を、懐にもってたんだけ？」

「証拠にはならないが、疑いの灰色が、かなり黒へ近づいたことはまちがいない。彼が書くのは過激な論調の改革論だけかと思っていたが、個人攻撃の中傷物も書くとは意外だった」

「庶民のあいだでも、おまえの人气が上がっているから、焦ってんじゃないねえのか？」

「過激な改革論って、民衆をあおって革命を起こそうとか、そういうやつのことだろう？」

「だけど、ローレリアン王子は、そんな乱暴な方法を使わずに、世界を変えることを目指している」

「わたしは将来のこの国に、王も貴族も必要ないというのなら、それでいいと思っっている。

だが、暴力的な方法による急激な変化は、膨大な犠牲を生むだけだ。」

「こつちが必死になって犠牲が最小限ですむ落としどころを探っているというのに、革命など起こされたのではたまらない。」

「不穏分子には、早々に消えてもらう」

「うひー、怖いねえ」

「こつちだって、殺されそうになったのは、一度や二度じゃないんだ。わたしにむけて刺客を送りこんできたのは、既得権を守ろうとする貴族だけではない。王朝の継続を望んでいない過激な革命主義

者とか、いろいろさ。

覇権を望むなら、おたがいに犠牲は覚悟のうえだろう。リュミネのような男に、遠慮する気など毛頭ない」

「おまえ、性格がすさんだなあ」

「受け入れざるを得ない変化というやつだ」

やれやれ、可愛そうにと、アレンは隣りを歩くローレリアンの肩を抱いた。

ローレリアンは、驚いて目を見開いた。

アレンに肩を抱かれた瞬間、憂鬱な気分が晴れたのだ。

だれかに、こんな打ち明け話できたのは初めてだった。

心から信頼しているアレンが相手だから、ローレリアンは愚痴を言える。

けらけらと笑っているアレンは、自分の存在によって、どれだけローレリアンが救われたかになど、まったく気がついていないが。

アレンは、色とりどりの看板がならぶ、フィールミンティア街の華やかな街並みを見あげて言った。

「せっかくここまで出てきたから、気分転換に、もう一軒よっていこうぜ。『ふくろう亭』のお茶はうまいという評判なのに、俺はちっとも味がわからなかった」

「そうだな。どこか、うまいお茶を飲ませる店を知っているか？」

「うまいかどうかは知らないが、知り合いの店がすぐ近くだ」

そう言ってアレンがローレリアンをつれていったのは、まだ新しく見えるのに、たいそう繁盛している店だった。

氣候がよい6月らしく、カフェの椅子は石畳の路上にまであふれだし、満席のお客のなかを店員が忙しそうに動き回っている。

「こんにちは」

アレンは挨拶をしながら、店の奥へ入っていく。知り合いの店だというから、それも当然かと思いつながら、ローレリアンも後につづいた。

すると、店の奥で忙しそうに立ち働いていた若い女が、声に気づいてやってくる。

「あら、アレン。忙しいと言ってたくせに、きてくれたのね」

「ええ、きましたよ。開店のお祝いには、ちょっと遅いけれど、贈り物つきでね」

「そんな気を使う必要は、ないのに……！」

明るくにぎやかにしゃべっていた女は、こちらを見て絶句した。

「ロー」

「うわ、ちょっと、たんま！」

「むが、ふがあー！」

思わず王子の名を大声で呼びそうになった女は、アレンに口をふさがれる。

ローレリアンは、笑顔をかすかにひきつらせた。

この二人が主従だったのはむかしのことで、いまでは手紙のやり取りをするほど、親しい友人なのだ。それくらいはローレリアンにだって、わかっている。

しかし、侯爵家の姫君を後ろから羽交い絞めにして、口をふさぐとは、なんたる無礼。

そもそも、騎士にとって、姫君の唇とは神聖なものであるはずだ。古いバラードに出てくる騎士たちは、姫君から頂戴する口づけひとつのために、命を懸けた戦いへおもむくではないか。

それなのに、この能天気な男は、気安く姫君の唇にふれて……。

そこまで考えて、ローレリアンは、はたと我にかえる。

何を怒っているのだ、わたしは？

そう思った瞬間である。

ローレリアンの懐へ、女性の華奢な体が、体当たりの勢いで飛びこんできた。

はしゃいだ声が言う。

「リアン！ おひさしぶり！ 会えて嬉しいわ！ アレンたら、なんて素敵なプレゼントを、考えてくれたのかしら！」

ぎゅっと、胸のあたりを抱きしめられた。彼女の背は、ローレリアンの肩を少し超えるくらいしかないもので。

名門侯爵家の姫君だというのに、この令嬢には、つつしみとか、恥じらいとか、そういったたぐいの感情の持ち合わせは、あまりないのだ。

でも、そのおかげでローレリアンは、ためらうことなく彼女を抱きしめかえせる。

それが、こんなに嬉しいのだから、我ながらあきれってしまう。

「こんにちは、モナ」

「お忙しいのに、わざわざきてくださったの？」

「近くに用事があったので」

「あら、わたしのところは、ついでのね。

でもいいわ。会えて嬉しいから、なんでも許しちゃうー！」

そういった侯爵令嬢モナシェイラは、めいっぱい背伸びをするよ、ローレリアンの頬にかすめるようなキスをした。

それは単なる挨拶がわりの口づけだった。

なのに、ローレリアンの胸は躍る。

王子と名乗らなければならなくなってから、ローレリアンに挨拶のキスを贈るのは、母親のエレーナ姫くらいしかいなくなってしまうっていたのだ。

しかも王族などというものは、肉親の情には恵まれないものだ。国務の輔弼をするようになって父の国王とは毎日のように顔をあわせているが、母とは月に一、二度、他人も同席している堅苦しい晩餐会の席で会うだけである。

親しい人と気軽に肌をあわせる感覚が、こんなにも幸せな感覚だったとは。

しかも、物怖じしないモナは、ローレリアンを見あげていつてくる。

「やだ、リアン。」

その伊達眼鏡、すごく似合ってるわよ。

頭がちよつと弱そうな美青年って感じに見えるわ。とても、すてき

自分の腕のなかで、モナにけらけらと笑われて、ローレリアンはいいかえす。

「そういうきみだって、とても侯爵令嬢には見えないが。きみは、ここでいったい、何をしているんだい？」

モナは型押し染色で花模様を染め付けた明るい色のドレスを着たうえに、大きな白いエプロンをつけていた。髪も娘らしい形に結んで、小さなレースのキャップで後れ毛がでないように鬘をおおっている。外見は、可愛らしい町娘といったところか。

軽い身のこなしで、モナはローレリンの腕のなかから、すり抜けていく。

うふふと笑う様子は、とても得意そうだ。

「このお店は、わたしのお店なの！」

驚いて、ローレリアンは、あたりを見まわした。

先ほどまでローレリアンとアレンがいた『ふくろう亭』ほど大きな店ではないが、この店もそここの広さだし、それになにより繁盛している。路上に出したテーブルも店内のテーブルも、ほぼ満席状態だ。

「さあさあ、どうぞ。おすわりになって！」

そう言いながら、モナは、空席を探す。

アレンがわきから、口をはさむ。

「路上の席は、やめてくださいよ。どこかの建物の窓から、狙撃される危険がある」

「まあ、護衛隊長さんて、大変なのねえ」

「リアンが、えらくなりすぎたんですよ。おかげで俺は、苦労がたえません」

アレンと王子殿下を、遠目に見守っていた部下たちは驚いていた。怒るとき以外は、めったに感情を見せない無愛想な隊長殿が、笑っていたので。

国一番の剣士にふさわしい立派な武人の体つきをしているくせに、彼らの鬼の隊長殿は笑うと、どこことなく可愛いかった。

そんな笑顔を見せられて、部下たちは、ほっとしてしまったのである。

「ふう！　なんか、いいねえ」

「隊長殿は俺たちより、年下なんだよなあ」

「普段は俺たち、忘れてるけど」

「たいちよー、こえーもん」

「それにさあ、王子殿下も、ちよいと幸せそうに見えないか？」

「うん。俺、王子殿下の目が本気で笑っているところを見たのは、初めてかもしれん」

護衛隊士の前では、ローレリアンはいつでも、完璧な王子だった。

聖職者でもある王子は、決して他人に不機嫌な顔を見せない。い

つも口元には、気品と優しさに満ちた微笑を浮かべている。

側近たちの前では気をゆるめて普通の顔も見せるが、その顔はいつも、憂鬱そうな顔だったり、疲れた顔だったりするのだ。

アレンの部下たちは、ローレリアン王子の護衛任務につけたことを、心から誇りに思っている。自分たちが守るのは、ローザニア王国の未来であると。

だから、彼らは上機嫌で、王子殿下と隊長と姫君の姿を見守った。尊敬してやまない王子殿下がお幸せそうなので、彼らはとにかく、嬉しかったのである。

結局、混雑した店の中に適当な空き席は見つけられず、アレンとローレリアンは従業員の休憩用の椅子にすわって、カウンターのそばで忙しそうに働くモナと会話をしながらお茶を飲んだ。

モナは、くるくると、よく動く。

彼女は侯爵令嬢らしからぬ才能をいろいろともった女性だったが、どうやら飲食店の切り盛りの才能も持ち合わせていたらしい。焼き菓子やお茶のよい匂いがただよう店の内部は小奇麗に整えられ、掃除もゆきとどいていて、居心地はとてもよかった。

そのうえ、彼女は調理係や接客係の動きまでをしつかりと見守り、お客が気持ちよくすごせるように、細やかな指示をだしながら働いている。

わかれてすごした三年の月日の間、彼女は彼女なりに一生懸命、いろいろなることを身に付けてきたのだなと、ローレリアンは思った。そのひたむきさに、ひきつけられる。

「はい、どうぞ。これがうちのお店の看板商品なの。これのおかげで、連日満員御礼なのよ。召し上がってみてね」

モナが頃合いをみてカウンターの上に出してきたのは、チョコレートケーキだった。そえられたクリームが、こんもりとした固まりになっており、白と黒のコントラストが、とても綺麗な一品だ。

「このクリームは、どうやって固めたんだい？」

スプーンでクリームの塊をつつきながら、ローレリアンはたずねた。

モナは悪戯っぽく笑う。

「食べてみれば、わかるわよ」

そう言われてクリームのかげにスプーンをさしてみるが、ムースやゼリーとはちがう硬さだ。このところローレリアンは、否応なく美食にもくわしくなったが、こんな感触の食べ物には初めて遭遇した。

なんだか怪しいなと思いつつ、クリームを口に入れてみる。

「冷たい!？」

驚いて声をあげると、モナはしてやったりといった顔をした。

「砂糖と泡立てた卵白をクリームにまぜて凍らせたの。香りづけには、シャデラ酒をすこし」

「凍らせたって、どうやって?」

「レオニシユ先生の機械を使ってよ」

「先生の!？」

懐かしい人の名前を聞いて、ローレリアンは目を細めて笑った。

レオニシュは、かつてローレリアンに医術の手ほどきをした学者である。研究費を稼ぐためにアミテージの下町で開業医をしながら、薬の研究や、その薬を作るための技術開発などにいそしんでいる。

教師としてだけでなく、まるで父親のような態度でローレリアンに接し、いろいろなことを教えてくれた人でもある。親の存在を知らずに神殿で育ったローレリアンが、肉親の情とはこんなものだろうかと想像できる人間に育ったのは、この師匠のおかげだった。

「先生は、お元気だろうか？」

「とてもお元気よ。時々、診療所のお手伝いもしていたの。先生からは、よくあなたの思い出話を聞かされたわ」

「そうか」

モナは手を止めて、カウンターのほうへ身を乗り出した。

「ねえ、どうしてレオニシュ先生へ、手紙のひとつも書いてあげないの？」

先生は、いまだにあなたのことを、心配していらっしやるのに」

ローレリアンは目を伏せた。

「先生には、嘘をつきたくない。だから、いまの状況を、どう説明したらいいのか、わからないんだ」

一瞬、言葉を失ったあと、モナも目を伏せた。

「そう。そうよね……」

レオニシュは現実主義者で、彼の頭の中は、目の前の問題だけでいっぱいなのだ。

国境の街では、市長夫人の社交サロンか、王都で発行されたあと10日遅れでアミテージへ届く新聞を共同購入して読む知識人のクラブにでも出入りしていなければ、中央政界の最新の話題を知ることとはできない。かつての愛弟子が『ローザニアの聖王子』とあだ名される国民期待の王子になっているなどは、レオニシュは夢にも思っていないはずだ。

その現実には自分にだって、いまだに受け入れられない出来事だとモナは思う。

目の前にいるローレリアンは、昔とちっとも変わらない、おだやかな青年なのに。

わたしだって、あなたを好きだと思っ気持ちを押し殺すのに、こんなに切ない思いをしているんだもの。

きっと、先生にも、お知らせしないほうがいいのよね。先生は、とてもローレリアンのことを大切に思っいらっしやるから。事実を知らせたら、きっとローレリアンのことを心配なさっつて、夜も眠れなくなっつてしまっうちにちがいないわ。

東の果ての草原のなかにある街に思いをはせながら、モナは言った。

「先生の珍発明っつて、あまり現実には役に立たないものが多かつたけれど」

「そうだね」

遠い目をして、ローレリアンが、ふたたび笑う。

その笑顔を見ると、モナの胸は、きゅっとしめつけられた。

きっと彼の心は、楽しかった少年時代へ飛んでいるのだ。どこにでも自由に行けた、夢のような時代へと。

カウンターの奥に置いてあるビール樽ほどの大きさの機械を、モナは「ほら、これよ」と、たたいて見せる。

「このクリームを凍らせる機械だけは、大発明だと思うのよ。本当は、物質の融点のちがいを利用して、混合物を分離するための機械らしいんだけど」

「へえ、なるほど。薬の研究に使うつもりだったんだね」

「なんでも、氷に硝石をまぜると、マイナス20度まで温度が下がるらしいの。硝石はまた氷が溶けた水から回収できるから、便利な薬品だよ」

「ちょっと、まった!」

ローレリアンの秀麗な顔が曇った。

眉間には、難しい考え事をするときに見られる縦じわがよる。

あら、この顔は、久しぶりに見るわ。

モナは喜んで、唇をほころばせた。

恋の病に侵されたモナの心臓は、ローレリアンのどんな顔を見ても、ときどきと脈打ってしまうのだ。

難しい顔で、ローレリアンは言う。

「モナ、硝石は火薬の原料だ。国家が流通を規制している禁制品じゃないか」

ふたたびカウンターから身を乗り出したモナは、ぱちんと、ローレリアンの額を指先ではじいた。

「固いこと、言わないでちょうだい！」

研究目的の申請を出せば、少量なら買えるのよ！

「だいたい、あなたが黙っていてくれれば、お役所にだってばれやしないわ！」

「痛いなあ。きみはあいかわらず、手が早いんだ」

「ふふんだ！ この機を見て俊敏に動く頭脳のおかげで、わたしはいろいろと、やりたいことを実現してきたのよ！」

「半分は、感情で動いているくせに……」

「よく聞こえなかったわ。もう一度、大きな声で言って」

「どうして、この店を持つことにしたのかなと、言ったんだ」

「うそつきね。まあいいわ」

手にしたポットから茶碗にお茶を注ぎ、まっていた店員に「これ、7番のテーブルね」と渡してから、モナはカウンターのなかから出ていった。

そして、ローレリアンの隣りへすわり、真剣な顔で話しはじめる。

「このお店の売り上げで、プレブナンの下町にも、診療所を開こうと思うの。」

プレブナンの下町も、アミテージの下町に負けず劣らずの貧しさだわ。きつと、患者さんの半分は、薬代を払えないと思う。だから、診療所の運転資金を、どこかで稼がないと。

お金がなくちゃ、せつかく診療所を作っても、ひと月で潰れてしまうでしょ?」

ローレリアンの表情も、たちまち真剣になった。

「本来、それは、国がするべきことなんだが……」

「いまのローザニアに、そこまでの余裕がないことくらい、知ってるわ。」

「いつけん、この国は豊かに見えるけれど、富はほんの一握りの人間に独占されているものね。」

「国の財政だって、積みり積もった過去の債務で、大変な状態なんでしょ?」

「恥ずかしながら、そのとおりだ。」

三代前のステラス王が、王宮の増改築をくりかえすような浪費家だったもので、困窮しきった国庫の状態に、とどめを刺した。

国民はみな、宰相のカルミゲン公爵を悪く言うがね。わたしは、彼を高く評価している。

彼が前国王と現国王のもとで優秀な国家官僚として辣腕をふるってきたからこそ、ローザニアは、まだなんとか、国王を頂点としてあおぐ中央集権国家としての形態を保ってこられたのだ。

彼が国家権力を維持するためにおこなってきた改革は、すばらしいものだよ。

地方ごとの慣例で進められていた行政を中央主導で一つの法律をもとに動くように統一したり、神殿を動かして国民に文字を教える寺子屋を全国で開かせたり、高度な学問を教える学問所の創設を援助したりね。

技術がいくら進歩しても、それを使いこなす人材がいなければ、経済発展にはつながらない。それに最も早く気づいていたのが、カルミゲン公爵だと思う。

軍の再編と近代化だって、御老体に鞭うって、頑張ってやっている。

国庫がいよいよ厳しくなれば、国家を破たんさせないために戦争をしなければならなくなるかもしれないとまで、彼は未来を予測していたんだ。

すごい男だと思うよ。

ただね。彼の欠点は、既存の価値観から抜け出せなかったところにある。国家を動かすのは選ばれた人間の仕事だと考えて、人材登

用はすべて貴族階級からおこなった。

急進的な改革を押し進めるためには、信頼できる優秀な人材が、たくさん必要だ。だが、慎重に人材を吟味している時間がなかったから、彼はその仕事をつぎつぎに、ある程度人柄を知っていて、自分に逆らう心配がない親族へ任せていった。

その閉鎖的な人事のせいで、彼はいま、社会からの批判にさらされていくわけだ。

わたしは、そのどさくさに紛れて彼の手柄を横からかすめとり、救国の英雄を気どろうとしている、ずるい男なのさ」

モナはうつとりと、ローレリアンを見つめた。

「でも、それは、だれかがやらなければならないことなのよ」

「そうだね。やらなければ。」

王朝が倒れたら、この国は、未曾有の混乱の中で崩壊してしまう」

「あなたは、あなたにしかできないことをやって。」

わたしは、わたしにできることを精一杯やるわ。

そうそう。このあいだ、レース工場の話聞かせてくれて人が、わたしをたずねてきてくれたわ。

工場の建設に、資金を出してもらえそうなの。

どなたのご紹介ですかとうかがったら、クレール商会の若旦那さんだと、おっしゃっていらしたけれど」

こぶしで口元をかくしながら、くつと、ローレリアンが笑う。

「それは、わたしの偽名だ。この眼鏡をかけて街をうろついているときには、わたしはクレール商会の社長のバカ息子ということになっている」

「やっぱり?」

ふたりはひとしきり、楽しげに笑った。

その楽しい笑い声に自分も参加しながら、アレンは思った。

この二人は、出会うべくして出会った、運命の恋人同士ではないだろうか。

気難しいローレリアンがくりだす政治論を、きちんと理解したうえで、うっとり聞ける貴族の令嬢なんて、モナさまをおいて他にはいない。

ちょっとした気晴らしにでもなればと思って、王子をお茶に誘ってみたが。

こんなに楽しそうなら、また連れてきてやらなければなるまい。

護衛の手配は大変だが、ローレリアンの笑顔が見られるなら、その苦勞も報われるというもの。

アレンは、いつも憂鬱そうな親友のことが、心配でならなかったのである。

ローレリアン王子の主席秘書官は、カール・メルケンという平民出身の男だった。

年齢は、ちょうど王子と10歳ちがいの32歳だったが、くすんだ灰色の髪と鳶色の瞳の持ち主で、鼻の下に富裕層の平民のあいだで流行りだしている髭を蓄えているもので、年齢よりもかなり落ち着いた印象を他人に与える人物である。

彼はもともと、王国の金庫と呼ばれるグリーンワルド王立銀行の優秀な行員だった。

優れた頭脳と行動力を認められ、若くして王立銀行の幹部の一員に名をつらねるようになった彼は、王国の経済について講義をしてもらいたいと依頼されて、王子のもとへ出向いた。王子の教育係として王宮に招かれることは平民の彼にとって大変な名誉だったし、聖王パルシバルの生まれ変わりと呼ばれる、王子の美貌にも興味があったのだ。

まだほんの赤子のころに刺客に襲われたせいで、死んだものときれ密かに守り育てられていた王子が王都へ帰還した時、人々はまず王子の容姿に驚いた。

秀麗なる容姿とは、彼のためにある言葉だと、王子に接見を許された者達は口をそろえて言った。

そのうえ、神官の位を持つローレリアン王子は、自身の虚栄の心

を戒めるためとして肖像画をいっさい描かせなかったから、噂ばかりが肥大して、ますます人々の興味をかきたてていたのである。

求めに応じて王子のもとへおもむいたメルケンも、かなり驚くはめになった。

金色の髪と水色の瞳をもつ、ローレリアン王子の噂通りの外見にはもちろんのこと、王子の博識ぶりとは、知らないことに対する知識欲の旺盛さ、疑問に対してさまざまな方向から回答を求めようとする深慮の姿勢、正論や先入観にとらわれない発想の豊かさ、物事の本質や将来を幾通りにも予測する洞察力といった、すべてのことに

それに何より、この王子は、ローザニア王国の未来について深く憂えていた。

メルケンは王子から、王国が抱える政治経済に関するありとあらゆる問題についての論議をふっかけられてしまい、いつも決められた時間から大幅にはみ出して、意見を戦わせつづけた。その論議は、ひどく疲れるものであったが、充実したものでもあった。

王子との三度目の接見が、またもや大幅な時間オーバーのすえに終わろうとしたとき、メルケンは王子から「あなたの卓越した知識をもって、わたしを助けてもらえないだろうか」と問われた。

その求めを口にしたときの王子は、もの柔らかかに笑っており、とても率直な態度だった。

メルケンは、あくまでも対等な人間として、自分はローレリアン王子から協力を求められているのだと感じた。

平民の自分である。

みずからが貴族であるか、あるいは貴族につながる血縁でももっていない限り、ローザニア王国の官僚の世界では、出世できないのがあたりまえだった。

だからメルケンは才能ある男だったが、国の政治を動かせる官僚になるのはあきらめて、王立銀行の実務家になったのだ。

突然、目の前に大きな道が開けたような、爽快感を感じた。

気がついた時には深く首を垂れ、「わたくしのような下賤の身で、殿下のお役に立ちますものなれば」と、メルケンは答えていた。

その返答に対して、王子は眉をひそめ、静かにいった。

「メルケン殿。人は生まれながらにして、その価値を決められるものではないと思いませんか。

その人の業績とは、いかに生きたか、なにを成したかで、後世の人が判断するものだ」とわたしは思っている。

わたしを手伝ってくれるつもりがあるのなら、わたしの前では二度と、身分がどうのという話はしないでほしい」と

その時からカール・メルケンは、ローレリアン王子に対して、絶対の忠誠を誓っている。

ローレリアン王子が住まわれる王宮の奥の宮の東翼は、午後になると大勢の人が行きかう、騒がしい場所であった。

それもかなり、うっとうしい雰囲気だ。

東翼にはローレリアン王子との接見の順番をまつ控室に出入りする人、広い秘書官室で書類のやり取りをする人、国王の執務室や、さまざまな公官庁舎へ連絡におもむく人など、さまざまな人が集まっていたが、どの人も申し合わせたように黒っぽい服装をしていたからである。

王子は自分の側近に登用する人物を、身分にこだわることなく、どのような専門性を発揮できるか、交渉力や統率力をもった人物かどうかといった、人としての本質で見極めて採用しようとした。

重要な役割をはたす人物には必ず何度も自身で接見したし、身内を雇ってもらえまいかというような安直な推薦は、ことごとくはねのけた。

自分は何ができるかを客観的に書いた身上書を準備して、出直してこいど。

結果として、王子の側近には、高等教育を受けた平民や、才能はあるが没落した家系の出身で中央官庁に入職するコネをもたない貧

乏貴族などが多くなった。

彼らには、絢爛豪華な宮廷服を何着ももつような経済力はない。

第一、そのような華美な服装を、東翼の主であるローレリアン王子自身が、なによりも嫌った。

お仕えする主人が、いつも同じ質素な黒の法衣を、身にまとっておいでになるのである。

王子の側近は自分たちも大喜びで、黒や濃紺のフロックコートを着て、仕事にいそしむようになった。

いまでは、ローレリアン王子がお住まいになる一帯は、そこで働く人々の服装の特徴のせいで、『黒の宮』という俗称で呼ばれている。

『奥の宮の東翼』という名称には、王族のなかでも日陰の身である人々が住まわれる場所というイメージが定着してしまっているため、ローレリアン王子のお住まいの名としてはふさわしくないと、みなが思っているのである。

その『黒の宮』のなかを、ローレリアン王子のお気に入りの小姓であるラッティ少年は、小走りで移動していた。

彼はお仕着せの水色の宮廷服を身にまとっている。

本来、王宮に仕えるお小姓の制服は赤と決まっているが、赤と金の派手派手しい宮廷服を見たローレリアン王子が、「その服は、どうしても赤でなければならぬのか？」と、ため息をつきながらお

っしやられたからである。

それに対する侍従たちの返事は、あながち的外れでもなかった。

「王子殿下のお気持ちもお察し申し上げますが、おそらくこの少年は、国王陛下や御寵妃さまのもとにも、お使いなどに行かねばなりませんでしょう。」

その際、この者に粗末な服をあてがっておきますと、この者が軽んじられて、辛い思いをいたしかねません。

「宮廷の格式とは、そういうものでございます」

そのあと、「殿下の小姓のお仕着せに関しましては、どうぞ、わたくしめにお任せを」と王子に申し上げた侍従長は、ラッティに淡い水色の宮廷服をあつらえてくれた。

カフスと前立てに銀糸で刺繍が施されてはいるが、見た目はそれほど華美ではない。

けれども、ブラウスの袖のレースは一級品だし、ポニーの尻尾のようにラッティの髪を可愛らしくまとめている紺色のリボンは、幅広の絹で厚みもある立派なものだ。

この服のおかげで、ラッティは王宮のどこへ行っても、王子殿下のお気に入りのお小姓として大切に扱われてもらえる。いつの間にか水色の制服は、ローレリアン王子つきのお小姓のトレードマークになってしまったのである。

王子の私生活の手足となることを、無上の喜びとしてるラッティにとっては、それはとてもありがたいことだった。

王子殿下は、いつだってお忙しいのだ。

つまらない理由で伝言の返事が遅れたりするのは、自分の不名誉であると、ラッティは思っている。

その特製の小姓のお仕着せのおかげで、ラッティは『黒の宮』のなかに何か所がある警備上の関門で呼び止められることもなく、軽い挨拶をくりかえしただけで王子の執務室へたどりついた。

まずは秘書官の部屋のドアから中へ入り、王子の執務室に大切な客がないことを確認する。

「いま、殿下のおそばにいるのは、メルケン主席秘書官だけだよ」

仲のいい若手秘書官に、そう教えてもらい、礼を言ったあと、王子の執務室へ通じる内扉をたたく。

「どうぞ」と低い声で返事してきたのは、メルケン主席秘書官だ。

ラッティは「失礼いたします」とかしこまりながら、室内へ入っていった。

「殿下あてにエレーナ姫さまから、お手紙がまいりました」

執務室の中央窓寄りには、大きくて立派な執務机が置かれている。そのうえで書類の山に埋ずもれかかっていたローレリアン王子は、顔もあげずに答えた。声には心底嫌そうな響きがこもっている。

「どうせまた、お茶会に来ている見栄っ張り伯爵夫人が王子に会いたがっていますか、どう言い訳してお断りしておきましょうか、な

んていった内容なんだ。

カール、かまわないから、きみが読んでくれ」

「はい、それでは失礼いたしました」

王子の机のそばに立っていたカール・メルケン主席秘書官は、ラッティが差し出した手紙を受け取り、丁寧に開いた。

王子は目の前の書類にサインをしながら、ぶつぶつと言う。

「まったく、国王陛下は何を考えておいでになるんだ。

母上を寵妃の身分に甘んじさせておきながら、宮廷のご婦人方のつきあいには参加させて、王妃の義務の真似事をさせられる。

母上は物静かな方なのだ。

本当は、手ずから花を育てたり、菓子を焼いたりといった、ささやかな日々の生活に心の慰めを得るような女性だというのに」

メルケンは、読み終わった手紙をたたみながら答える。

「母君さまがお忙しい件につきましては、殿下にも責がございません。宮廷のご婦人方は『ローレリアン王子殿下の母君』であらせられるエレーナさまと、御懇意になりたいのでございます。

あわよくば夫や息子が、人材をお求めになられる、殿下のお目に留まるようにと。

それに、エレーナさまは前王弟の姫君。

現在の我が国において、王太子妃殿下につぐ高貴なご身分となる女性であらせられます。

茶会や晩さん会をお開きになられて、要人をもてなされるのも、王族の女性の大切な義務でございます」

「ふん！ なんでもかんでも、わたしのせいにするな！」

兄上の妻が、病弱だのなんだのといわれて、王太子妃の義務を果たそうとなさらないからな！

先週なんぞ、まわりがやいのやいの言っつて、やっと動いた王太子妃が、直前で主催の茶会をすっぽかし、急きよ母上が代理を務めたそうではないか！」

「王太子妃殿下は御病気だということですから、いた仕方ございませんな」

「夫婦そろって、なまけ病か！」

「殿下……」

メルケンは、やれやれと嘆息する。

勤勉なローレリアン王子は、兄の王太子とそりが合わないのだ。

なにしろ王太子は、気がむいた時にしか仕事をしない。彼に与えられている仕事といえは、論功行賞の決定書類や官僚の辞令にサインをしたりといった、簡単な仕事だけだというのに。

今にも舌打ちしそうな様子で、王子は書類の山から、つぎの紙ばさみを取りあげた。

それを広げて、声を荒げる。

「これは、なんだ！ プレブナン商業地区、自警消防団団長、勤続20年表彰状だと?!」

メルケンは、しまったと、額をおさえた。これは王子の機嫌がよ
いときをねらって、さりげなく出す予定の書類だったのに。

しかし、説明しないわけにはいかない。

「申し訳ございません。その表彰状は、申請が来てより、もう3か
月も放置されておりますもので。

式部長官より泣きつかれまして、仕方なく殿下のもとへ、おもち
いたしました。

なんでも、表彰式は明日だそうでございます」

王子は手にしたペンで、インク壺を何度もたたいた。

ちんちんちんと、耳障りな音が執務室の内部へ響く。

「つまり、その表彰式へまにあうように、わたしにサインをしろと
いうのだな？」

本来、国王陛下のお膝元にあたる王都の治安を守るのは、王太子
の責務ということになっているだろう？

王都の治安維持に協力してくれた臣民を慰労するべく、王族とし
て表彰状に自分の名を書きこみ、この紙切れに名誉と権威の価値を
こめるのは、兄上の仕事ではないのか？」

「そうなのですが……」

椅子をけって、王子は立ちあがった。

書類の山が、机からなだれ落ちる。

メルケンとラッティは、あわててそれに飛びつき、大惨事を回避

しようとした。

床に飛び散った書類の上に、何かをこぼしたりしたら大変だ。ローレリアン王子の執務室へ集まる書類には、替えがきかない重要書類も多いのだ。

「もう我慢がならないぞ！」

兄上をとっつかまえて、首根っこを押さえつけてでも、たまった仕事をやらせてやる！」

書類の山を元にもどしながら、メルケンは必死で王子に訴えた。

「仕事は、そんなにたまっております！」

ローレリアンさまが本気を出してお取り組みになれば、2、3時間程度で終わる量です！」

ですが、それが王太子殿下の、3か月分のお仕事なのです！」

怒っていたはずの王子の表情から、力がぬけていく。

「なんだった？」

「ですから、申し上げている通りです」

「いったい兄上は、その程度の仕事を相手に、なにをてこずっておいでになるのだ？」

「てこずるもなにも王太子殿下は、御公務がお嫌いなのです。」

そもそも、王太子殿下のもとへ、その程度の簡単な仕事しか回らなくなつた理由は、王太子殿下御自身が、酒に酔ったり寝すごしたりされて、大切な公務に何度も穴をあけてしまわれた結果なのだと

「いづことですよ」

崩れるようにして、王子は椅子にすわりなおす。

「なんだ、それは？ それこそ、国王陛下は、なにをなさっておいでになるのだ？」

父親として、息子に説教のひとつでも……」

そこで、王子は首をふった。

国王と王太子の関係は、冷え切っている。最近では、公式の席でしか顔をあわせていない様子だ。

だいたいにおいて、まだ長男に対する情が残っているならば、国王はここまで次男のローレリアン王子を重用したりはしなかったはずだ。

国王は父親である前に、一国の王なのだろうと思う。

22年前、ローレリアンと母親を王宮から遠ざけた時と同じ無情さで、今度はできる悪い長男を見捨てようとしているのだ。

ローレリアンは、さきほど机のはしに投げ捨てた紙ばさみを取りあげ、なかに挟んであった表彰状に、ゆっくりと美しい文字を書き入れていった。

ローザニア王国第18代国王バリオス三世の王子ローレリアン

王子という肩書が、今日ほどむなしく感じられたことはない。

もっと平凡な家庭に生まれていれば、兄も、ここまで無気力な人間になったりはしなかったのだろうか。

黒々とした文字の上に、メルケンが吸い取り紙をあて、丁寧に余分なインクを取りのぞいていく。

ため息をつきながら、ローレリアンは首席秘書官の横顔をながめた。

この男はとても優秀な男で、王子の公務にだけでなく、感情の起伏の波にまで、何食わぬ顔でつきあってくれるのだ。

自分も、いまのこの男の歳に追いつくころには、もう少し落ち着いて人間になれていればよいのだが。四六時中忙しくしていないと不安になってしまうおのれの余裕のなさには、すっかり嫌気がさしてしまっている。

そう思いながら、ローレリアンは小姓を呼んだ。

「ラッティ、わたしは疲れた。お茶を一杯、くれないか」

すると、できあがった表彰状を紙ばさみにもどしながら、メルケンが言う。

「お茶をご所望でしたら、母君さまのお茶会へおいでになればいか

がですか。今日のお茶会の会場は『夏風の間』だそうです。きっと、さわやかな夏の風を楽しみながら、お茶を召し上がれますよ」

「よしてくれ。なにが、さわやかだ。疲れているときに、ご婦人方のキンキンした声を聴くのは、拷問みたいなものだ」

「そうですか。母君さまからのお手紙には、今日のお茶会にはヴィダリア侯爵令嬢がおいでになるので、お仕事にご都合がつくようでしたら殿下もどうぞと、書かれておりましたが」

王子が一瞬言葉につまるのを見て、メルケンは、してやったりと笑う。

笑われたのは悔しいが、ローレリアンは、すでに仕事をする気もなくしていた。

「カール。どのくらいなら、席を空けてもいい？」

メルケンは手にした紙ばさみを、指先でたたいた。

「どうしても今日中という仕事は、これで終わりです。次の接見の予定は2時間後ですから、それまでにおもどりいただければ、あとのお仕事は何とでもなりますよ」

ポケットから時計を出して、二時間だなとつぶやく王子を目の端で見ながら、メルケンは呼び鈴を鳴らし、メッセンジャーを護衛隊の詰所へ走らせた。

ほどなく、護衛隊長のアレン・デュカレット卿が執務室へやって来る。

「アレン隊長、殿下は母君さまのお茶会へおいでになるそうだ。お供をしてくれ」

「へえ、珍しいですね。おばさんたちの井戸端会議とかいって、普段はお茶会なんか、毛嫌いしているくせに」

「グイダリア侯爵令嬢が、おいでになるのさ」

「ああ、なるほど」

うるさいなと、ローレリアンは顔をしかめた。

「例のクリームを凍らせる機械に、国王陛下から特許状をいただけるように、母へ口添えを頼んだんだ。国王陛下からの特許状があれば、禁制品の硝石だって、堂々と買うことができるようになるだろう。そうすれば、彼女はあの機械をつかう店の数を増やすこともできる。」

貧しい人のために診療所を開くという、本来国がするべきことを、彼女は代わってやってくれるというんだ。王子のわたしだって、なにか手伝えることがあれば」

「はいはい、御託ごたくはいいから、さっさと行きましょう。よかつたな。モナ様と会うのは、ひと月ぶりくらいか？」

「御託とはなんだ！ 法律とはそもそも」

わあわあしゃべりながら、王子と親友の護衛隊長は執務室からでていった。

いってらっしゃいませと慇懃に腰を折りながら、ラッティとメルケンは、こっそり笑いあう。

素直ではない王子殿下にお仕えするものとして、首席秘書官とお小姓は、おたがいの苦勞を思いやりあう仲だったのである。

国王陛下の寵妃エレナ姫の茶会は、いまではローザニア王国で、一番格式の高い女性たちの集まりだった。

本来ならば王妃不在のいま、国の跡継ぎである王太子の妻の妃殿下が開催されるお茶会が一番格式の高いお茶会ということになるのだが、王太子妃は最近、病気を理由にあまり人前へは出ようとしない。

王太子と妃の間には、まもなく5歳になる姫がいたが、皇太子妃はこの姫をたいしてかわいがりもせず、一人で部屋にこもっていることが多いという。

貴族たちの間に広まっている噂によると、王太子妃は夫と容姿が似通っている幼い姫をうとんじており、養育係には、そばに近づけるなどまでいつているのだという。

また、この姫が大変な癩癩持ちで、何か気に入らないことがあると火がついたかのように泣きわめき、手が付けられなくなるという噂だった。

口さがない者たちは、姫が普通の子供でないのは、父親からの遺伝に違いないと言いついていた。

その噂がまた王太子妃を苦しめるのだらうと、無責任な者たちは、さらに噂しあつのである。

エレナ姫は、そうした無責任な噂が大嫌いだった。

そもそも彼女は、ローレリアン王子を身ごもったとき、王宮に入りする貴族たちの噂にさんざん苦しめられた過去を持つ。何度も不審な事故にあったり、食べ物に虫の死骸や汚物を入れられたりしたのも辛かったが、なによりも精神的に彼女を追い詰めたのは、無責任な噂だったのだ。

そうした過去の経験から、エレーナ姫は自分のお茶会で、貴婦人たちが他人の噂話をすることを禁じてしまった。

女性の口から出る他人の噂を封じるのは困難だと思われがちだが、意外にもそれは簡単であった。

エレーナ姫は「どこそこの子爵が、また使用人の女に子供を産ませて捨てた」などといった無責任な噂話を始めた名門伯爵家の夫人にむかって、ほんの少しだけ怒った顔で「わたくし、人の噂は、あまり信じないようにはしているのです。けれども、今のお話は聞き流せませんわ。その子爵が捨てたという、何人もの女性や子供の、不幸を思いますとね。噂が真実かどうかを調べてほしいと、息子に頼んでみることにいたします。ですから、いま、その噂の内容について、わたくしに返答を求めないでくださいませね」と、言ったのだ。

言われた伯爵夫人は震えあがった。

エレーナ姫の息子、つまりローレリアン王子殿下に、自分のことを無責任な噂話に興じる愚か者だなどと報告されては大変だ。

その伯爵夫人は、お茶会のあいだじゅう、どうか噂の出どころが自分だと王子殿下には言わないでほしいと、エレーナ姫に懇願しつづけた。しまいには哀れになるほど、憔悴しきっていたという。

以来、エレーナ姫のお茶会では、他人の噂話はご法度となつてい
る。変な噂などを話題にすれば、すべてローレリアン王子へ報告が
いつてしまうと、招待客たちは思っているのである。

だから、エレーナ姫のお茶会は、とても優雅な雰囲気で行進する。
詩の朗読があつたり、新作歌劇の感想を論じあつたり、流行のファ
ッションについて語りあつたり。

まさに、国一番の格式を誇る女性の集まりにふさわしい格調の高
さである。

そんな高貴な雰囲気の中かで、今日のお茶会の話題を一手にさら
つたのは、内務省長官ヴィダリア侯爵の令嬢モナシェイラだった。

彼女はローレリアン王子の妃筆頭候補として、いままさに噂の渦
中の人である。

しかし、エレーナ姫のお茶会で、噂話は禁じられている。そのル
ールのなかで、モナが本日のお茶会の主役になれたのは、やはり彼
女が普通の貴族の令嬢ではなかったからだった。

まず、お茶会に招待されていた貴婦人たちはみな、モナのファッ
ションに驚いた。

夏の午後のお茶会には淡い色のドレスを着て参加するのが貴婦人
たちのあいだの暗黙の了解だというのに、彼女は紫がかった紺色の
乗馬服を着ていたのだ。さすがに上着の下にはズボンではなく、ス
カートをあわせていたが。

ヴィダリア侯爵令嬢モナシェイラは、そんな目立つスタイルでお茶会の会場になっている。『夏風の間』へ入室してくると、あつけにとられている招待客の前を颯爽と通りすぎ、エレーナ姫のまえで優雅にひざを折って、あいさつの口上をのべた。

「このような姿で御前にうかがいましたご無礼を、どうぞお許しくださいませ。

わたくし、診療所の建物を建てている現場へ、毎日馬で通っているんです。下町の狭い道には、馬車では入れないので」

侯爵令嬢とエレーナ姫の様子をうかがっていた貴婦人たちは、驚きのあまり言葉を失った。

国王陛下の御寵妃さまからの招待を受けておきながら、この令嬢は出先から直行で、王宮へ上がったというのだ。自分たちは、朝から支度に、かかりつきりだったというのに。

しかもエレーナ姫は、王家を軽んじているともとられかねない侯爵令嬢の行動のことなど、まったく気に留めていらっしやらならぬ様子で、にこやかに笑っておいでになる。

「ええ、お噂は、息子から聞いておりますよ。いよいよ下町に、診療所を開かれますのね」

「はい。ようやく、開設のめどが立ちました。これからもいろいろと問題はあるでしょうけれど、なんとか頑張ってやっていくつもりです。

エレーナさまには、クリームを凍らせる機械へ勅許状がいただけますよう、国王陛下へのお口添えをちょうだいしまして、心より感謝申し上げます」

「そのくらい、お安いご用ですわ。
崇高な目的のためですもの。」

おいしいお菓子をおつくりになって、お店を繁盛させてください
ね」

「はい、ありがとうございます」

「わたくしも、直接お手伝いができたらいいのにと、思いますわ」

国王の寵妃と侯爵令嬢は、手を取り合い、微笑みをかわした。

貧しい人々の暮らしを、二人はよく知っている。そつと握りあつた手から、エレーナ姫とモナは、おたがいに相通じるものを感じ取つたのだ。

エレーナ姫は侯爵令嬢の手を握つたまま、お茶会の客に宣言した。

「みなさま、モナシエイラ嬢は、プレブナンの下町に住む貧しい人々と共に働き、助けの手をさしのべようとなさっておいでです。」

その素晴らしい行動に対して、いらぬ批判は、ご無用に願いますよ。」

人の上に立つべく生まれついた者には、高貴なる義務がございます。何をおいても、まず臣民を守らなければなりません。そのことについては、皆様も同意してくださいませね？

ときどき、思い出したように孤児院への慰問をおこなったり、こまっている人にやさしい言葉をかけてあげたりするだけでは、その義務は果たされませんのよ」

その場にいあわせた者たちはみな、深く首を垂れて、エレーナ姫

のお言葉を拝聴した。

そして、ヴィダリア侯爵令嬢は、やはりローレリアン王子殿下の妃筆頭候補だったのかと、心の中でうなずいたのだった。

**

**

**

そんなわけで、エレーナ姫のとなりという最上の席に案内されたモナは、お茶会がはじまるやいなや、お客の全員から本日の主役あつかいをつけることになったのだ。

実際、彼女は主役にふさわしい目立ち方をしていた。

女同士の集まりで美しい衣装を見せあうのは、貴族の女性たちにとっては最高の楽しみだ。今日も、それぞれの夫人や令嬢たちは、自慢の衣装を身にまとっていた。

けれど、夏用の淡い色のドレスは、どんなに工夫を凝らしても、どれも同じような印象におちいりがちだ。そのなかで、きつぱりとした濃い色の乗馬服を着ているモナは、誰よりも目立ったのだ。

しかも、モナが着ていた乗馬服は、一風変わったデザインだった。

上着の丈は短く、前のボタンをすべて開けて、上着の下に着たブラウスの美しさを、わざと出して見せるようになっていた。スカート
トの布の断ち方を工夫して、すつきりとした形につくりあげてある
のも、もちろんブラウスの柔らかさを見せつけるための演出だ。

問題のブラウスには、12段にもおよぶレースの前立てが重ねて
縫い付けてあった。實用本位の上着とスカートの味気なさを、その
華やかなレースのブラウスが、帳消しにしてしまうほどの美しさだ。

すみれ色の瞳に黒髪というモナの個性的な容貌を、紺色のドレス
と純白のブラウスは、これ以上ない組み合わせで引き立てているの
である。

エレナ姫に満足していただける無難な話題を求めていた貴族の
女性たちが、この美しい衣装のことを話題にしないわけがなかった。

「まあ、モナシェイラさま！　なんて素敵な御衣裳なんでしょう！」

甘え上手そうなどこかの御令嬢が、真っ先にそう誉めそやすと、
ご婦人方はいつせいに衣装の話題へ飛びついた。

「その上着のデザインは、やはりブラウスを見せたいがためのもの
ですか？」

「ブラウスが美しすぎますわ」

「贅沢なレース使いですこと。さすがはヴィダリア侯爵家。ご令嬢
の御衣裳に、物惜しみはなさいませぬのね」

モナは、にっこりと笑って答えた。

「このレースは、機械で編んだものですから、それほど高価ではありませんのよ。」

いろいろ試作品を作ってみて楽しかったものですから、だれかに見てもらいたくなってしまって、このブラウスを作ってみましたの」

「機械で、ですって？」

「よく見せていただいて、よろしいかしら？」

「まあっ、12段のレースすべてが、ちがう花の意匠だわ！ 近くによらなければ、わかりませんでしたけれど」

夢中になったご婦人方は、とうとう自分の席を離れて、モナのまわりに集まった。

モナは、何食わぬ顔で説明をつづけた。

「12の月の誕生花を、図案化してみましたの。わたくしが考えた図案を、技師たちが機械編みのパターンに起こしますのよ。」

機械の性能を考えながら、花の模様をデザインするのは、とても面白いですわ。」

たとえば

30分後には、ご婦人方はたつぷりと美しいレースについての情報を仕入れ終わり、ご満悦だった。

この国でもっとも権威のある女性の集まりとされるエレナ姫のお茶会に招待され、話題の人物であるヴィダリア侯爵令嬢と親しく

話せただけでなく、最新流行のファッションの話題をいち早く聞けたなんて、なんと幸運だったのだろうか。

社交界のだれよりも早く、あの美しいレースを自分のスタイルに取り入れれば、さぞかし注目を浴びることになるだろう。

ご婦人方の顔には、そんなはやる気持ちだが、露骨に表れていた。

招待客の話を微笑みながら聞いていたエレーナ姫は、ゆったりとおおぐ扇の影で、安堵の笑みをもらしていた。

このお茶会が、こういう雰囲気になるように計算して、おしゃれ好きで有名な夫人や令嬢たちばかりを選んで集めたのは、じつはエレーナ姫の計略だった。

息子からヴィダリア侯爵令嬢は面白いお姫様なのだという話を聞いていた彼女は、自分も侯爵令嬢の壮大な計画に、協力してやりたくなっていたのである。

人を集めて、その場で駆け引きをするなど、本当は、あまり得意ではないエレーナ姫だ。

けれど、ヴィダリア侯爵令嬢のことを話しているときの息子は、とても楽しそうに見えた。彼女は、とにかく息子のために、何かをしてやりたかったのだ。

愛するひとに抱きしめてもらう幸せに溺れて、エレーナ姫は国王バリオス3世へ、求められるまま、その身を任せてしまった。

男と女が愛し合えば、いつかはその愛の結晶が新しい命となって

芽生えることなど、若すぎる深窓の姫君だったエレーナ姫には、想像すらできなかったのだ。

自分は、あまりにも重すぎる宿命を背負わせて、息子をこの世に産み落としてしまった。

彼女がその事実気付いた時には、すべてが後の祭りだった。

いまでも、まざまざと思い出せる。

愛しくてならない幼いわが子が、みずから流した血の海のなかに虫の息の状態で転がっているのを、見つけたときの恐怖。

わが身を切り裂かれるよりひどい痛みを感じて、エレーナ姫は絶叫した。

世界のすべてが終わってしまう絶望を、彼女は、そのとき、まざまざと感じたのだ。

あの恐ろしい事件と気が遠くなるほど長い別離の時をへて、ローリアン王子との再会を果たした瞬間には、よくぞ無事に育ってくれたと喜びもしたけれど。

いままた、エレーナ姫は、得体のしれない不安にとらわれている。

親の愛を知らずに育った息子は、身の内に、なにか空虚な思いを抱えているようなのだ。

彼は、その空虚さを埋めるためとでもいつかのように、国を背負う王子としての責務に、のめりこんでいく。

人々は口をそろえて、ローレリアン王子はこの国の将来をまかせ
るに足る、立派な王子であるという。

その期待を裏切ることなく、次々に成すべきことを成していく息
子を見ていると、エレーナ姫は悲壮感のようなものを感じてしまっ
のだ。

「エレーナさま、エレーナさま」

そつと腕をゆすられて、エレーナ姫は我にかえった。

彼女のすぐそばには、ヴィダリア侯爵令嬢の心配そうな顔があっ
た。

「お疲れなのでは？ このところ、午後になると暑いですから」

令嬢の瞳には、心からエレーナ姫を心配してくれている、思いや
りに満ちた人柄がうつつしだされている。

不思議な色の、瞳だった。

ローザニアの大地に、春を告げる花の色。

陽だまりに群れて咲く、すみれの花と同じ色の瞳だ。

「大丈夫よ。ごめんなさいね。ちょっとだけ、ぼつっとしてしまっ
たの」

「あまり、お洋服の話は、面白くなかったのですね」

「そんなことは、ありませんよ。皆さんが満足してくだされば、お茶会を主催したわたくしも、嬉しいのですから」

「毎回、どんな話題で進むお茶会にするのか、気を使っておいでになるのですね。」

御苦勞は大変なものだと思います」

「わたくしが、国王陛下やお国のためにできることなど、本当に限られておりますからね。微力とはわかっておりますけれど、出来ることは精一杯やらなければ」

令嬢は、真摯な瞳でエレーナ姫を見ている。

「ご立派ですわ。わたしも、見習わなければ」

思わずエレーナ姫は、令嬢の手を握ってしまった。

「見習うだなんて。あなたは、あなたにしかできないことを、もうすでに一生懸命やっておいでになるじゃありませんか」

愛する人といっしょにいたいと、それだけしか考えていなかった若いころの自分の姿を振り返れば、エレーナ姫には令嬢がたのもしくさえ見えるのだ。

じつとエレーナ姫に見つめられた令嬢は、恥ずかしそうに答えた。

「そんな、たいそうなことではないんです。」

わたしは、いつも思いつきで行動を起こすものですから、周囲の者達は振り回されて、こまっただけです」

「きつと、そのくらいの勢いで、よいのだと思いますよ。この国で女性がなにか行動を起こそうとすると、考えこんだら最後、身動きがとれなくなりますからね」

「そういつてくださるのは、エレーナさまだけですわ。父や兄たちからは、しょっちゅう怒られます。もう少し、おとなしくしていただけないのかと」

エレーナ姫は笑った。ちょっとすねた表情になった令嬢は、とても可愛らしかったもので。

「おとなしいモナシエイラさまなんて、想像もできませんわ。建国節の舞踏会で、空に舞い上がってしまいそうな勢いで楽しそうに踊っていたあなた、本来のあなたなのでしょう？」

席を離れて令嬢のまわりに集まっていたご婦人方が、どっと笑った。

そして、口々に、また美しいドレスのことについての話をはじめ、お茶会の話題は最高の盛りあがりを見せたのだった。

ローレリアン王子がお茶会の会場へ姿を現したのは、それから、ほんの少しあとのことである。

王宮の『夏風の間』は、窓を開放して木漏れ日があふれる庭と室内を一体化し、さわやかなローザニアの夏の風を楽しむための部屋だった。

風にそよぐ葉擦れの音が満ちた室内に、淡い色のドレスを着て群れてさざめき笑う貴婦人たちの姿は、とても涼しげで美しく見えた。なにしろ女性たちは、エレナ姫とヴィダリア侯爵令嬢がすわるソファーを中心に、床にすわったり、後ろからのぞきこんだりといった、思い思いの姿で集まっていたのだから。

「これはこれは、みなさん」

王子は『夏風の間』に入室してくるなり、感心した様子で言った。

「いや、どうぞ、お立ちにならないでください。どうぞ、そのままです」

王子殿下がいらしたというので、あわてて立ちあがって王族への礼を取ろうとした貴婦人たちを、王子はしぐさでおしとどめる。

「美しいみなさんが笑みを浮かべて集う姿は、まるで一幅の絵のようですよ。」

いましばらく、わたしにも、その様子を楽しませてください」

侯爵令嬢のまわりに集まっていた女性たちは、老いも若きもいつせいに頬をそめた。この場の雰囲気を楽しんでいる様子の笑顔を見せた国一番の貴公子から、「美しい」とほめられて、嬉しくならぬ女性はいない。

王子はそのまま彼女たちのもとまでやってきて、一人一人と、ひとことずつ挨拶をかわした。

女性たちは、うつとりと、王子殿下を見あげた。

ローレリアン王子は、今日も飾り気のない黒い法衣姿である。そのすっきりとした衣装のせいで、王子の若さと美貌は、際立って見える。

それに、王子の三歩後ろに、つねに控えている若い将校が、また麗しいのである。

かっちりとした濃緑色の近衛士官の装束に身を包み、無愛想な顔をした強そうな青年。

立派な体格ではあるけれど、彼はいわゆるむくつけき男ではない。それに、しなやかですらりとした彼の立ち姿の背後から立ちのぼるピリツとした気配は、女性たちの心を、ひどく騒がせるのだ。

王子との挨拶がすむまで、貴婦人たちは興奮したままだった。全員がほほを赤らめている様子は、まるで『夏風の間』の気温が、急激に上がったかのようにであった。

挨拶をすませた王子は、侯爵令嬢のななめ前に席をしめ、お茶を

一杯飲むあいだ、女性たちの話をおもしろそうに聞いていた。

貴婦人たちはすっかり、ヴィダリア侯爵令嬢に夢中だったのだ。

節度をもつて着飾り、世界の流行をリードしていくことも、ローザニアの貴族に生まれた女性にとっては、国のための大切な仕事ですという侯爵令嬢の主張は、貴婦人たちのプライドを心地よく刺激したのだ。

すでに全員が、ファッションに関する事なら、どんなことでも相談に乗りますよという約束を、侯爵令嬢に与えていた。

その約束を受けて、大喜びの侯爵令嬢は、つぎつぎに質問をくりだすのだ。

「柔らかい羊毛のフェルトで、なにか気の利いた小物を作るアイデアはありませんか？」などと。

質問に対して、答えはいくつも返ってくる。

お茶会に集まった貴婦人たちは、エレーナ姫の思惑通り、ヴィダリア侯爵令嬢のよきアドバイザーと化していた。

お茶を一杯飲んだあと、ローレリアン王子はヴィダリア侯爵令嬢を誘って、『夏風の間』の外につくられた、森の木立を模した植え込みがみごとな庭へむかった。

もちろん、お茶会の招待客の手前、二人だけで姿を消してしまうわけにはいかないので、王子と侯爵令嬢は部屋から見える場所にとどまっている。

腕こそ組んではないが、仲良くよりそっているように見える二人の姿を遠目に拝見して、貴婦人たちは、こっそり言いあった。

エレーナ姫のお茶会で噂話のご法度だけでも、こつこつ噂ならよいではないかと。

「なんておにあいの、お二人なのでしょうね」

「賢くて行動力もあるモナシェイラさまのことは、王子殿下も憎からず思っておいでになるように見受けられますし」

「実際、お二人は恋仲ですか？」

たずねられたエレーナ姫は、あいまいに笑った。

ローレリアン王子は、自分には結婚など必要ないと、何度も公言している。今の王子の立場を思えば、その選択も確かにありかと、理解もできるのだ。

けれど、たった一人の息子には、愛のある結婚をして幸せな家庭を築いてもらいたいと思うのも、親心である。

エレーナ姫は、ため息を押し殺しながら、おだやかに言った。

「わたくしにも、あの二人のことは、よくわからないんですの。

でも、これからもモナシエイラ嬢のお手伝いをする茶会は、時々開きたいと思えますわ。

みなさん、その時はまたいらして、彼女を助けてあげてくださいましね」

「ええ、それはもちろんですわ」

「わたくしたちも微力ながら、ローザニアの経済発展には、つくしたいと思えますもの」

「モナシエイラさまが、わたくしたち女にもできることがあると、その方法を示してくださるのだとしたら、とてもありがたいですわ」

貴婦人たちは口々に、そう答えたのだった。

野次馬たちからは、『夏風の間』の前庭にある木立のしたで、恋人同士の会話を交わしていると思われるローレリアンとモナであったが。

しかし、この二人、実際のところは、あまり色恋沙汰とは関係がないことを話していたのである。

モナは、さつきからさかんに、商売へのアドバイスをローレリアンに求めていた。王子と呼ばれるようになってから三年の間、政治や経済だけでなく、国民の心理にまで探究心をもってかかわってきたローレリアンは、モナの絶好の相談相手だったのだ。

王子の後ろに立って周囲に警戒の神経を張り巡らせながら、アレンは、この二人、どうしようもねえなど、あきれていた。

モナの口調は、あいかわらず可愛いおねだり口調なのだが、会話の内容には色気がかけらも感じられない。

「ねえ、リアン。

クリームを凍らせる機械に国王陛下からの特許状をいただけたら、わたしはお店を、もう何軒か持とうかと、考えているのだけけれど」

王子は、ふむと答える。

「自分で店を持つためには、かなりの資金がいるんじゃないのかい？ いまは最初の店のもうけを、投資に回せる余裕だってないだろ

う？ 経営そのものも、手間がかかるし。

だから、店を作ったり経営したりするのは他人にまかせて、きみは機械をその連中に貸し出して、売り上げの上前をはねればいい」

「それって、なんだか、ずるくない？」

「ずるくなんかないさ。機械は特許状を持った者にしか作れないんだ。その機械を借りてもうけようとする者達が、お礼をよこすのはあたりまえの義務だろう」

「そうねえ。」

お店をやってみないかと誘えそうな人には、何人か心当たりがあるし。

冷たいクリームを売りにする店だから、店主はお菓子にくわしい女性がいいと思うのよね。

それに、店の付加価値を高めるためには、王都ではなく、他の大きな街でお店を持つほうがいいわよね。たとえば、すごく景気がいいらしい、ラカンとか。

どこの街でも、このお菓子をあつかっているのはこの店だけで、ここでしか食べられないって状態にしておくのよ」

王子は目を丸くする。

「きみみたいに元気な女性が、まだほかに、何人もいるって言うのかい？ しかも、よその街へ行って商売を始めてもいいというほどの、勇ましい女性が」

モナは得意げに答えた。

「あら、リアンは女性ってみんな、か弱いものだと思っているの？」

男性に頼らずに自立して生きていきたいと望んでいる女の人って、
けっこういるわよ」

「ふーん」

「この素敵なブラウスも、そんな女友達にデザインしてもらったの」

「今までにない、変わったデザインだね」

「わかる？」

12段も重ねてあるブラウスのひだを、モナは嬉しそうになでる。

「こつこつ、今までにない発想をする人って、普通の人じゃないのよね」

「普通じゃないって、どういう女性のことをさして言うんだい？」

「花街の女性よ。」

花街の女性は、男の人をその気にさせるのが商売でしょう？

売れっ子になるためには、他と同じじゃ、目立たないし。

だから、彼女たちは綺麗なものに目がきくし、それをどう使うかも、普通の発想じゃなくて、あつと驚くような方法を思いつくの」

「花街の女性って……!!」

ローレリアンの顔色が変わったことなど気にも留めずに、モナは話しつづけた。

「今日はエレーナさまのおかげで、貴族の女性から、一般的な価値

観の意見を集められたわ。

花街の女性からは、時代の最先端の意見を集めるの。

商売を考えるためには、情報集めが、なによりも大切だと思うのよ」

「モナ、モナ！ たのむから、ちょっと黙っていてくれ」

放っておいたら、いくらでもしゃべりそうなモナを、ローレリアンはしぐさで黙らせた。

つまり、彼女の二の腕を、両手でつかんだのだ。

遠くの『夏風の間』から、その様子をながめていた貴婦人たちが悲鳴をあげる。

なにしろ、王子殿下が、侯爵令嬢を捕らえてはなさないという態勢に入ったのだ。つぎは抱擁か、それとも接吻かと、誰もが思った。

真剣な色の瞳で、ローレリアンはモナを見つめた。

「嘘をつかずに、わたしの質問に答えてもらいたい」

「ええ、いいわ」

「花街の女性とは、どこで知り合った？」

「花街でに、決まってるじゃない」

「花街へ行ったのか？」

「もちろん」

「モナ！」

ああとばかりに、ローレリアンは空を仰ぎ見た。木立の向こうに見える夏空は、青くて、まぶしい。眩暈がしそうなほどに。

「わたしは、このあいだ、きみの兄上に、たずねたんだ。

あなたの妹君は、ずいぶんといういろいろ活動的にやっておいでのなるようだけれども、彼女の身の安全には、もちろん侯爵家で注意を払っておいでのなるのだろうねと。

彼は苦笑しながら、護衛は何人もつけておりますと答えた。

わたしは、どうにも、そのときの彼の苦笑が気になって……」

ローレリアンは、モナをゆすった。

「正直に言いたまえ！ どうやって、花街へいったのか」

「さつきから、正直に話してるわ。

花街には、自分の足で歩いていきました。

護衛は、途中で巻いてやったわよ。

足手まといだから」

「足手まとい！？」

「そうよ。姫君がこんな場所へ出入りしてはいけませんとか、うるさいことを言いそうですもの。

だいたいね、リアン。

花街の女性は、たまたま貧しい家に生まれたとか、赤ん坊のころに親から花街へ売られてしまったとか、みんなやむにやまれぬ理由

で、春を売っているのよ。

まさかあなた、花街の女性は人として劣るとか、けがらわしいとか、言いだすんじゃないでしょうね!」

「いや、わたしが言いたいのは」

「そうね。どんな境遇に生まれても、人の命の価値だけは、神々の前に平等ですものね。

命はひとりに、ひとつだけ。

替えはない。

そうでしょう? 神官の、ローレリアン王子殿下」

「そのとおり。人の命の価値に、貴賤はない」

「そうおっしゃるなら、ほうっておいてちょうだい!」

「ほうっておけるわけがないだろう。

きみは、わたしの大切な友人だ。

危険にみずから飛びこんでいくようなまねは、してもらいたくない。

それに、きみがひとりで花街へ出かけていったなんて話が、他人に知られてみる。嫁のもらい手が、なくなってしまうじゃないか! わたしは花街の女性に偏見など持たないけれど、世間一般の常識とは、そんなものだろう!」

ローレリアンはモナから、突き飛ばされた。彼女のすみれ色の瞳は、怒りで煌めいている。

「心配ご無用よ!」

お嫁になんか、いかないもの!

だいたい、どこに嫁に行けっというのよ！

リアン、あなた、知ってる？

世間では、わたしはあなたの、お妃さま最有力候補なんですよ！

プレブナンの庶民の間では、『踊る神官』なんてパンフレットが、回し読みされているくらいなんだから」

「あれは！」

「あなたと恋仲だつて噂されるなんて、光栄よ。

望むところだよ。

おかげで、アミテージの布地仲買人のところには、刺しゅう入りの薄絹の注文が殺到しているんですって。

意図したとおりになって、わたしは最高に満足よ」

王子の勢いは落ちていく。

「わたしと恋仲だと噂されれば、きみの縁談にも、差し障りが出るということか。

将来有望な青年ほど、王家に対して遠慮してしまうだろうから。

浅はかだった。考えが足りなかったよ。舞踏会で、きみと踊ったりして」

うなだれた王子の前で、逆にモナは怒ってしまったている。興奮のあまり、眼に涙が浮かんでしまうほどに。

好きでたまらないローレリアンから、嫁入り先の心配をされたうえ、いっしょに踊ったのはまちが이었다と、謝罪されてしまったのだ。モナの恋心は、行き場を失ったようなものである。

それに、女心を理解しない堅物の王子にも、腹が立つ。

「お嫁になんか行かないから、関係ないって言ってるでしょ！
余計な心配は、ご無用よ！」

わたしは、今までだって、これからだって、自分が正しいと信じ
ることをするの。

花街へ行くのだって、やめないわよ。

花街の女の人たちの情報網は、すごいんだから。

こんなパンフレットが出まわっているわよと、『踊る神官』を見
せて教えてくれたのも、花街の友達よ。

彼女が働いている店で時々、その手のパンフレットの編集打ち合
わせがあるらしいわ。

どんな男性が入りしても、けして怪しまれることなんかない。

花街って、そういうところですね」

ローレリアンは思わず、自分の後ろに控えているアレンのほうへ
視線を投げた。

アレンの表情にも、緊張が走っている。

「モナ」

真剣きわまりない様子で、ローレリアンは言った。

「その女友達とのつきあいは、金輪際やめてほしい」

「あなたに、わたしの交友関係を、どうこう言われたくないわ」

「そのパンフレットを作っている男たちは、現在の王朝を倒して、
革命を起こそうともくろんでいる危険な連中だ」

モナの瞳から、興奮の気配が消える。

「なんですって？」

それじゃあ、ますます、彼女からは情報をとらないといけないうちやないの」

「だめだ」

「リアン！」

「みずから危険に飛びこんでいくようなまねは、許さない」

モナは一步、あとずさった。

ローレリアンの瞳には、強い光がある。

その光は、過去に何度となく、モナを立ちすくませた光だった。

女のくせに、これ以上、男の世界へ立ち入ろうとするなとモナを拒否するときに、男たちの目に宿る光である。

ふたたびふつつと、モナの感情は、熱く沸きあがりだす。

「それは、命令なの？」

ローレリアンは冷たく答えた。

「ああ、命令だとも。」

わたしの命令がきけないというのなら、きみの兄上なり父上なり

に、命令する。

「きみを侯爵家の屋敷から出すなとね」

「横暴だわ!」

「なんとも言いたまえ。王子としてのわたしに、どの程度の力があるか、試してみたいのなら試してみるがいい」

かっとなったモナは、ローレリアンにむかって手を振りあげた。

最終的には、理屈より、感性を信じる彼女なのである。権力で自分をさせたがわせようとする王子を、許せはしなかった。

しかし、彼女の手はあっけなく、ちがう男に捕まえられる。

冷静な表情の近衛士官は、モナの手をつかんで言った。

「モナ様。

人目のある場所で王子殿下の横面を張ったりなされては、こまります。

王子殿下には、王子殿下のお立場というものがあるのです」

「はなしなさいよ!」

力いっぱいもがいてモナは自分の手の自由をとりもどし、最初に近衛士官を、つぎに王子をにらみつけてから、踵かかとを返した。

立ち去る彼女の後ろ姿を見送りながら、アレンは小さくひゅっと、口笛を吹いた。

「あいかわらず、すごいお姫さまだ」

ローレリアンは、何も答えない。

だが、王子殿下の影となったアレンには、このまま悶々と悩むだろ王子を、放置しておく気はなかった。

叱られることなど百も承知で、ずけずけと言い放つ。

「あのなあ、リアン。この場では、いちおう、モナ様の手をとめたけどな。人目がなかったら、とめやしなかったぞ。

一度、殴られてもしたほうがいいんだ。大馬鹿王子殿下は。

おまえ、モナ様にひどいことを言ったって、自覚はあるのか？

モナ様が好きなのは、おまえなんだぜ？

そのおまえから、将来有望な青年をつかまえて嫁に行けなんて言われたら、傷つくだろ。

おまえだって、モナ様のこと、好きなくせして。

いざとなれば自分の命をさしだせるほどだって、俺は知ってるんだからな。

それなのになんで、モナ様の想いを受けとめてやらないんだよ？

周囲だって、おまえとモナ様は、お似合いだって認めてる。

おまえさえ、その気になれば、国中が祝福してくれる恋人同士になれるのに」

ローレリアンは皮肉一杯の笑みを唇の端に浮かべながら、アレンに言った。

「それで？

彼女を、このどうしようもない義務だらけの、自由など欠片もない生活に縛りつけるのか？ 彼女は大空を飛ぶ鳥のように、自由に

生きている女性だというのに。

だいたい、彼女のためなら死んでもいいと思えたのは、わたしが何も持たない神学生だったからだ。

いまは、ちがう。

彼女が国が、どちらかを選ばなければならなくなったら、わたしはまちがいなく、国を選ぶ。

ローザニアの500万を超える民の命運と、一人の女性の幸福を、同じ天秤に、かけられるわけがないだろう。

わたしはモナに、何もしてやれない。

何の約束もできない。

だから彼女に、愛を乞うことはできない」

「リアン……」

アレンは親友の名を呼んだきり、黙りこんでしまった。

王子へかけてやるなくさめの言葉など、なにも思いつけない。

いまの告白をモナに聞かせてやれば、モナは喜んでローレリアンへ、終生の愛を誓うだろう。彼女は人を愛することに、代償を求めような女性ではない。

けれど、ローレリアンは、自分だけが幸せを得るような関係を望んではいない。

彼の願いは、ただ一つだ。

愛する女性には、幸せになってもらいたい。

ただ、それだけなのだ。

ローレリアンは執務へもどるべく、王宮の建物のほうへ歩きはじめた。

固い声が、アレンを呼ぶ。

「アレン」

「はい」

「モナが出入りしている娼館の名をつきとめる。街中に潜ませているわたしの間諜を、すべて使っていていい。必要なら、おまえも街にでる。」

一刻も早く、ジャン・リュミネを捕らえるんだ。

多少脅したくらいで、モナがおとなしくしているとは思えない。彼女を危険にさらすな。

これは、わたしの唯一のわがままだ。

聞き届けてくれ」

「しょうちしました」

彼らが『夏風の間』を通り抜けるとき、その場に集まっていた貴婦人たちは、恐れおののいて王子殿下に臣従の礼を取った。

もうローレリアン王子の横顔には、やわらかな笑みなどなかった。

その後ろにしたがう桂冠騎士の横顔は、もつと硬質で冷たい。『氷鉄のアレン』とあだ名され、王子に絶対の忠誠を誓う廉正剛直な性質が、そのまま表れた横顔である。

青ざめたエレナ姫が、ローレリアンのあとを廊下まで追ってきた。人目のないところで、彼女は真実を知ろうとしたのだ。つまりない噂の種を、無責任な貴族たちの間に、ばらまきたくなかったのだ。

「ローレリアン、モナシエイラ嬢と喧嘩でもなさったの？」

彼女は、わたくしに暇乞いいとまごをするとき、涙ぐんでいましたよ」

母親らしく問いかけながら息子に追いつがろうとしたエレナ姫は、行く手をアレンにはばまれた。

「どうか、エレナさま。」

我が王国の未来を担う、王子殿下の苦しい御胸中を、お察しくださう」

「ローレリアン！」

その場に立ちすくみ、廊下に一人取り残されたエレナ姫は、悲しげに息子を呼んだ。

あわれな息子を不憫がる響きを母の声から感じとったローレリアンは、感情を押し殺すために拳を固くにぎり、王子の義務をはたしにもどるべく、さらに歩く速度を速めた。

王子の親友でもある護衛隊長は、黙ってそのあとに従った。

そのまま夏の午後の時間は過ぎてゆき、王宮は政務にいそしむ人々が仕事を終える時刻を迎えた。

ローザニア王国の王都プレブナンは四季の変化がはっきりとしており、時のうつろいが、しみじみと感じられる街だ。8月の日没は午後7時をすぎたころなので、王宮の窓から見えている夏の雲は、いまだ、まぶしい陽光のなかにある。

夏特有の湧き立つような形の雲は、まるで収穫されたばかりの綿花の山のようなだと、ローザニア王国の宰相であるカルミゲン公爵は思っていた。

精力的に国のあちこちを巡って歩いていた若いころ、王国の南の平原で見た光景は、いまだに忘れられない。

茶色く枯れはじめた綿花の畑には、一面に綿の実りがあった。

そのなかを、大勢の老若男女が笑いながら歩きまわっており、農道に停めた荷車のうえに、摘み取った綿花の山を築いていくのだ。

我がローザニアは美しく豊かな国だと、宰相は思う。

その国を守りたい一心で、彼は自分の身体が枯れて朽ち果てそうになる今日まで、片時も休むことなく働いてきた。

いま、彼の目の前の夏雲の輪郭は琥珀色にかすみ、本来の色を失

っている。

最近ではめっきり視力が弱り、眼鏡をかけても何もかもがかすんで、そのうえ色の変調して見えるのだ。

医者は、老眼のほかに『白そこひ』という病が進行してきており、いずれは視力が失われるだろうと言っていた。この病は年齢に関係する病で、長生きをした人間は誰しもが侵される病なのだという。

人の命数には限りがある。

おそらくこの病は、神々が戦い疲れて老いた男に引導を渡そうとなさる、御神託なのだ。

目が見えなくなる前に、もう一度、あの豊かな綿花の畑を見ておきたかった。

もっとも、それはもう、叶わない夢だが。

老いた今の自分の身体は、馬車に何日もゆられるような長旅には、とても耐えられないだろうと思うのだ。

「何を見ておる、わが宰相よ」

公爵が立つ窓のそばに置かれた執務机にすわっている男が、仕事の手を止め、たずねてきた。

ふりむいたカルミゲン公爵は、相手の顔を見て、ふと笑った。

相手は、むっつとして言う。

「なんなのだ、人の顔を見るなり、いきなり笑うとは」

公爵は、軽く首をたれる。

「申し訳ございませんぬ。」

おのれの老いについて考えておりましたもので、陛下の御尊顔を拝しました瞬間、なるほど、わたくしめだけでなく陛下も御年を召しておいでだと、しみじみ思ってしまったのでございます」

相手の男、ローザニア王国第18代国王バリオス3世は、手にしたペンをペン立てにもどし、自分の宰相へ笑い返した。

「あたりまえであろう。」

余の長男はすでに三十路にあり、次男は二十二歳。余も歳を取った。

十八歳で、この国の王位についてより、早くも32年であるぞ」

「御年、おんとし五十であらせられますな」

「うむ」

「御年を召されたなどは思いますが、とてもよわい齢五十には見えませぬ。世辞ぬきに申し上げますが、陛下はお若いころより、男前でございましたゆえ。」

「次男のローレリアン王子殿下の御姿を拝見いたしますと、わたくしは昔が懐かしくなりました。往時の陛下のお姿に、王子殿下は、とてもよく似ておいでになります」

「子の世代を見て、往時を懐かしむようになれば、それこそが老い

た証なのであろうな。

先代の王の時代につづいて、余の治世をも支えてきてくれたそなたにしてみれば、余とて、子供のようなものであろう？

よくぞ、ここまで長く、王国に仕えてきてくれた。感謝しておる」

「もつたいないお言葉をちょうだいし、きょうえつしごく恐悦至極に存じます」

国王は、最近、考え事をするとき目じりのふちに浮かぶようになったしわを寄せ、深いため息をついた。

「そなた、身体が辛いのか？」

すこし前までは、余が老いについての話題に触れようものなら、自分はまだまだ壮健であると機嫌をそこね、しばらく怒っていたではないか」

じつと立っていたせいで動きだすときに軋きしむ身体をなだめながら、カルミゲン公爵は国王へ歩みよった。

「気がゆるんだのかもしれませぬ。

わたくしは、ただ王国の未来を憂えて、あと十年、あと五年、あと三年と、みずから限度と決めた年月をすぎるたびに、引退を先延ばしにしています。

先のが、心配で、心配で、なりませなんだ」

「すまなかつたな。

余が、力のない王であったがゆえであらう。

許せ、宰相よ」

老宰相は首をふる。

「陛下のせいなどではございません。民衆が巨大な経済活動力を得た我が国は、もはや一人の人間の手には負えない怪物でございます。その怪物を御す新しい仕組みを生み出すのは、並大抵のことではなく。」

わたくしも努力はいたしました。が、力およばず、今では老醜をさらすのみ身。

このままでは、けして一枚岩ではない貴族たちは派閥争いに終始するのみとなり、わたくしが死んだ後には、野放しにされた怪物が暴れるまま、国が乱れていくのではないかと、忸怩たる思いでありましたが。

しかし、あと5年もすれば、ローレリアン王子殿下が、若さにあふれる力でしっかりと、バリオス三世陛下の治世をお守り下さる方に、おなりあそばすことでございます。」

国王は無言で、かすかに眉のみをあげ、じつと宰相を見た。

「そなたは20年前、国が乱れるもとなるゆえ、余にエレナとの再婚はあきらめると、言ったではないか。」

それなのに今は、エレナの息子を、自分の跡取りになる男だと言いつ出すのか。」

「あのときは、それが最良と思ったのです。」

宰相のわたくしの力に衰えなど見せれば、次の権力者の地位を狙う者たちに、いらぬ野心を抱かせてしまったことでございます。20年前の我が国には、内紛を抱える余裕などありませんだ。

それに、壮年期に入られた陛下は当時、少々わたくしを煙たがっておいででしたな。

エレナ姫との再婚を望まれたのも、わたくしとの姻戚関係を、解消したいとお考えだったからではございませんのか」

「それは、確かにそのとおりだ。

そなたは、我が治世になくはならない男であったが、あまりに一人の者に権力が集まりすぎるのは、よくないことであろう」

「20年前の我が国には、独裁的な力で国政を動かせる者が必要でした。

すべては、王国のためでございます。

わたくしは、王国のためとあらば、なんでもいたします。

その覚悟は、今でも変わりませぬ」

国王の眉はますますあがり、瞳には険しい色が宿った。

「今の今まで、この疑いだけは口にすまいと、思ってきたが……。

まさか、赤子のローレリアンに刃をむけたのは……、そなたではあるまいな。

王宮の奥深くに、とがめられることなく入りこめる人間は、ごくわずかであろう。

当時、いくら調べても、凶刃を放った犯人が誰なのかは、わからなかったが」

「わたくしは、ローザニア王国を守るために、すべてをささげてまいました。

その忠誠心にかけて申し上げます。

赤子のローレリアン王子殿下に刃をむけたのは、わたくしではございません。

成人なされたローレリアン王子殿下が、中央へお戻りになるうと

されたとき、妨害しようとはいたしましたが。

三年前、王子殿下は、貴族の派閥の領袖に担ぎ出されそんな雰囲気でございましたので。

しかし、王子殿下御自身に、貴族たちの派閥争いに加担するおつもりはないと確認できてからは、中立の立場を守って、王子殿下のご成長を見守ってまいりました。毎年、王子殿下がお望みになられるとおり、神官位を得られるように、取り計らってもまいりましたし。

正直なところ、今では神々の御意志に感謝しております。

やっと、我がローザニア王国の未来を託せるだけの人物が、あらわれてくれたかと。

王宮から離れてお育ちになられたローレリアン王子殿下の広い見識と聡明さは、まさに神々からの、お恵みでございましょう。いまの時代の指導者に求められる資質を、ローレリアン王子殿下は、いくつも持つておいでです。

神々は我がローザニア王国をお救いくださるために、ローレリアン王子殿下にそれらの資質をえとくさせようと、王宮から隔離なされたのではないかとさえ、思うほどです。

王宮で育つておいでになれば、はたしてローレリアン王子殿下も、今ほどの人物となられていたかどうか。

その答えは、おそらく否ではないかと存じます。

苦労知らずで育った者が、苦難を乗り越えようとする忍耐を養えるでしょうか

「それは、王太子をさしての皮肉か」

「王太子殿下は、いわば王家の宿命の犠牲者でしょうな。我が孫としては、不憫でなりません。」

ヴィクトリオさまは、おのれの能力の限界を、幼少期から早々と自覚しておられた。それでも周囲は、ヴィクトリオさまに次代の王としての聡明さを期待し、帝王学をつめこもうと躍起になりました。

どんなに頑張っても能力がないのですから、ヴィクトリオさまは、周囲の者達からの期待に応えることはできません。どうしても心は、卑屈になりましょう。

くりかえされる失敗の体験から人がなにかを学ぶためには、落胆した心を慰めて支えてくれる者から、愛情を受け取っている必要がございます。

しかし、王家に生まれ、母親の王妃殿下と幼少期に死別なされたヴィクトリオさまには、そのような愛情を与えてくれる存在はおりませなんだ」

「父親の余も、祖父のそなたも、国政に夢中であつたからな」

「まことに。当時は、必死でございましたな」

「いまも、わが国の国政に難問が山積みである状態は変わらないが。不思議と、当時ほどは動じぬな」

「それが、年齢を重ねるといふことなのでございましょう」

「王子には、すまなかつたという気持ちがある。そのせいで、余はローレリアンに、余計な苦勞を強いることになる」

長い年月を戦いぬいてきた老宰相は、口元に薄い微笑を浮かべた。

「ローレリアン王子殿下は、聡い方でございます。きっと、バリオス三世陛下の御心中にも、お気づきになられておいでと、臣は確信しております」

微笑しながら、老宰相は考えていた。

この男が、こんな風に頼りないから、自分は権力に固執して老醜をさらしているなどと世間からののしられても、宰相の地位から退くことができなかつたのだ。

バリオス三世自身が、カルミゲン公爵の身体の衰えを追求し、宰相の地位をはく奪しようとするくらいの気概を見せてくれれば、自分は安心して引退できた。

情に流され、必要な決断の基準が鈍る。

それが、バリオス三世の最大の欠点だと、公爵は思っている。

凡庸とまではいわないが、現在の難しい情勢下にある王国を統治していくには、頼りないといしか言いようがない王だ。

長年仕えてきた国王を、このように評するカルミゲン公爵は、やはり独力で王国のかじ取り役をはたしてきた、深慮遠謀に長けた宿老と称される人物なのである。

その宰相から見ると、ローレリアン王子もまた、甘い男に見える。国家の役にたたない愚兄など、さっさと暗殺でもなんでもしてしま

えばよいのにと、老宰相は思っているのである。

王太子を精神異常者あつかいして廃嫡にされるのは、血がつながっているカルミゲン公爵家にとっても不名誉だ。ならば、いっそ殺してくれたほうが、すっきりする。

狩猟と女遊びにうつつをぬかす次代の国王など、それこそ、革命をもくろむ輩にとっては、王朝を非難する格好の材料だ。

ヴィクトリオ王子が王太子になれたのは、他に王家の血を引く成人男子がいなかったからにすぎない。バリオス三世には男の兄弟がおらず、妾腹の妹が三人いるだけ。この妹たちはいずれも母親の身分が低かったために、国内の貴族のもとへ降嫁した。

その妹たちの生んだ男子が王位を争う表舞台に出てくるようなことになれば、これもまた、ローザニア王国が傾国の危機におちいる事態の原因となるだろう。

八方塞がりだと悩みながら、カルミゲン公爵は、すこしでも王太子にまともな生活をしてもらうために、必死で「あなたが王位につくことは、この老臣の夢なのです」などと吹き込んできた。しかし、あの孫が王たる器でないことくらいは、公爵にもわかつていたのである。

その能無し王太子を将来の王と定め、自分は摂政の立場で国政にかかわろうと、ローレリアン王子は考えている。王子の側近も、そのつもりで動いている様子。

しかし、そのあとは、どうするつもりなのだと、公爵は思う。

王太子の子供は、精神発達異常の疑いをかけられている五歳の姫が一人だけ。

その姫に王位が継げるとは、とても思えない。血統を理由に、そんな娘を女王に立たせれば、経済を動かす力を持つようになった国民たちは、絶対に王家を許さないだろう。

ローレリアン王子は、兄を排することで、篡奪者の汚名を着ることを恐れているのだろうか。

王国のかじ取り役を自分から引き継ごうという男が、そのような甘い考えでいること自体、公爵には許し難く思える。

公爵の胸の奥深くに、ざわめきが湧く。

ならば、その甘さ、わたしの引退の土産に、叩き潰してやるのではないか。

嫌でも王位につかなければならないように、ローレリアン王子を追いかけてやる。

この大国ローザニアを背負って立つということは、おのれの人生のすべてを捧げるといふことなのだ。

わたしは、国のためなら卑怯なことも残酷なことも、躊躇せず、ひしひし躊躇せず、やってきた。

同じだけの覚悟がない男に、わたしの跡目は務まらぬ！

逃げの気持ちは、欠片も許さぬぞ！

信念をもって、老宰相は国王に奏上した。

「国王陛下。ひとつ、ご提案を申し上げたいのですが」

「申してみよ、宰相」

「この秋、陛下は御年五十才のお祝いをなさいますな。その際に、エレーナ姫を王妃としてお迎えになられてはいかがかと」

国王は、いまでも十分に美男子で通る顔を驚きでゆがめた。

「いまさら、なにを言いだす？」

「いまだからでございます。」

国民の間におけるローレリアン王子殿下の人気は、いまや大変なものでございます。

我が国の次代を担う王子として、ローレリアンさまに欠けておいでになるのは、正統なる結婚から生まれた正嫡の王子ではないという問題だけ。

血筋自体は、この国で誰よりも濃い、王家の血をもっておいでになるというのにです。

もし、いま、王太子殿下に万一のことがあれば、この国の王位継承権第一位を持つのは、王太子殿下の姫ということになります。

しかし、国王陛下とエレーナ姫が正式にご結婚なされば、王太子殿下につぐ王位継承権の所持者は、ローレリアン王子殿下となりましよう。

この国の将来を思えば、いざとなればローレリアン王子殿下が王位にお着きになれるよう、準備怠りなくしておく必要性も、お分かりになっていただけるかと存じますが」

「しかし……」

国王はうなづいた。

「ローレリアンは聖職に未練を残しておる。本来の望みを捨てて、おのれの義務のために生きようと、困難を承知で王家に戻ってきてくれたのだ。王になれというのは……」

そこで国王は、口をつぐんだ。

国王も宰相も、この話は将来、ローレリアン王子を王位につけるための相談だと、はっきり認識している。

愚昧ぐまいな兄王太子を排して、聡明な弟王子を王にしようと。

再度、国王の口から深いため息が漏れた。

そのまま机に肘をつき、手で額を支えながら国王は言った。

「しばらく、考える時間が欲しい」

「御意のままに」

沈黙の中にたたずみながら、これもまたバリオス3世の甘さだと、宰相は思った。

真実、国のためを思うなら、息子の未練など、断ち切ってやればいい。追い込まれたローレリアン王子には恨まれるかもしれないが、大義のためには、親子の情など切り捨てるべきだろう。いま王朝が倒れば、ローザニアは未曾有の混乱におちいり崩壊してしまう。

国が亡びるのだ。

500万を超える国の民が、見えない明日に怯えて、野をさまよっことになる。

そんな事態は、絶対に起してはならないのだ。

老宰相は、沈思に沈む国王の執務機のうえから書類をとりあげ、退出の支度をはじめた。

今日は、ひどく疲れた。早めに屋敷へ帰り、身体を休めようと思いながら。

扉をたたく音があり、控えていた侍従が、前室の誰かとやり取りをする。

話を終えた侍従は扉を閉めて、おそれながらと、国王のもとへ近づいた。

「国王陛下。火急の用件にて、お目通りを願いたいと、ローレリアン王子殿下が先触れあふせをよこしておいでですが」

うつむいていた国王が、顔をあげた。

「先触れなどよこす必要はないと、つねづね申しておるのに。」

まあよい。すぐに会つと返答せよ」

国王は宰相を見る。

「帰ろうとしていたところをすまぬが、そこにふたたびすわるがよい。余とともに王子の用件を聞くのだ。

このところ王子が持つてくる用件は、余の独断では即答できぬ内容が多くてな」

こまつた顔をしているくせに、国王は嬉しそつでもあつた。

たよりになる息子がいるということは、心強いものなのであろうなど、宰相は思った。

ほんの数分待つたところで、ふたたび扉がたたかれる。

侍従が扉を開き、「ローレリアン王子殿下でございます」と、入室の宣言をする。

ローレリアン王子は秘書官をしたがえて、国王のもとへと歩みよつてきた。

その足取りは、じつに若々しく、憎らしくなるほど颯爽さつそうとしていた。

いちおう立ちあがって王子殿下へ臣下の礼を取ろうとした宰相は、そのまますわっていないさいと、王子からしぐさで制された。お年寄りが無理をしてはいけませんよという意味のこもつた、聖職者らしい、優しげなしぐさで。

その王子の優しさが、宰相には苦々しくもあり、ありがたくもあった。

一度すわってしまったと、宰相の身体は、あちこちが固まってしま
うのだ。歳をとるとは、本当に難儀なことである。

国王の執務机の前に立ち、王子は深く首をたれ、「ご機嫌麗しく
……」などといった通りいっぺんの挨拶の口上をのべる。

父親の国王は苦笑した。

ローレリアン王子は、自分は庶出子にすぎないからとして、いつ
も国王に対して臣下の礼を取る。

それは、三年前に国王と王子が親子の再会を果たしたときから、
ずっと変わらずにくりかえされてきた習慣だった。

きっと、自分はローレリアンから憎まれているのだらうと、国王は思っている。

憎まれても、しかたがないとも思う。

この王子には、自身の出生の秘密をなにも知らせずに、孤独な子供時代を過ごさせてしまった。ひねくれることもなく、まっすぐ育ててくれただけでも、ありがたいと思わなければならない。このうえ王子に、何を求めるものがあるうか。

そう思うと国王は王子に対して、父親めいた愛情表現を、やたらと示せなくなるのだ。

自然と、王子に語りかける口調も固くなる。

「火急の用件とはなんであるか。

このとおり、帰ろうとしていた宰相にも同席を命じた。手短に説明するように」

きわめて事務的な態度で、紙をとじあわせた報告書をさしだし、王子は答えた。

「かねてより探索を命じておりました、反政府系宣伝パンフレットの発行組織の拠点をつきとめました。

内偵者によりますと、今夜も会合があるということです。

できることなら早々に摘発をと思い、憲兵隊を動かす許可を頂戴

いたしたく、御前にうかがいました」

モナがもたらした情報をもとに、プレブナンの花街にある高級娼館を中心に調べさせたところ、ジャン・リュミネや彼と親交が深い文筆家が多く出入りしている店は、すぐに特定できたのである。

まさか、命じて半日もしないうちに報告があがってくるとは思っていなかったので、王子自身も驚いた。

しかし、そのあとは、なし崩しだった。

その道の専門家が買収をしかけると、店主はいとも簡単に情報をもたらした。おそらく不穏な様子の客が、そろそろ鬱陶しくなり始めていたのだろう。

何事もタイミングかと思った王子は、すぐに行動を起こすことにしたのだ。

その一連の出来事が記された報告書をめぐりながら、国王は王子に問いかけた。

「早々にとは、今夜にもという意味か？」

王子はうなずく。

「はい。今年の秋には、国王陛下御生誕50年の式典が予定されており、憂いごとには、早めに決着をつけておくべきかと」

「なるほど、王都に人が集まる機会があれば、不埒な輩ふいぢの活動も活発になるな。

今夜とはいかにも急なことであるが、摘発のチャンスを逃すのも惜しいか。

では、すぐに命令書を作らせよう。今すぐに動かせるのは、どの隊か」

国王の問いかけは、執務室のすみに控えていた事務官へむけられたものだったが、答えたのはローレリアン王子であった。

「こちらへうかがう前に調べてまいりました。リドリー・ブロンフ卿配下の第三機動部隊に、現在待機を命じてあります」

自分の息子の素早い判断と緻密な仕事ぶりに感心しつつ、国王は命令を発する。

「高等書記官を呼び、我が勅命を記録させよ」

事務官が執務室から急いで出ていき、にわかにあたりの空気が活気づく。

しかし、その空気は、椅子からゆっくりと立ちあがったカルミゲン公爵によって、急激に冷やされた。

「勅命の宣下は、いましばらくお待ちくださいますように」

老いて枯れ、わずかに残された命脈にしがみついているような姿の老宰相は、毅然と顔をあげていた。

いつのまにか、その枯れ木のような体には、気力の炎が枝葉となって燃え立っていたのである。

深いしわの中にある濁った色の瞳は爛々と輝き、曲がった背中からは恐ろしい気配が立ち登っている。低くかすれた声は、まるで地獄からの使者、ウラウノスのつぶやきのように聞こえた。

「その任務は、憲兵隊総監リンフェンダウル男爵と、第一機動部隊にお命じ下さい。

国家体制の転覆を謀るような輩に対抗する難しい判断は、一介の実働部隊の隊長に任せられるものではございません」

ローレリアン王子が、静かに答える。

「被疑者を拘束し、後の判断は司法にゆだねる。そこに、現場の指揮官の判断が入りこむ余地は、ないと思いますが」

宰相は、声もなく笑った。

「相手は民衆を煽り『革命』を起こさんと目論む、過激な集団でございますしょう？

国王陛下のお膝元、王都プレブナの街中で、銃撃戦になる可能性も考慮せねば」

王子は表情を険しくし、国王のほうへ向きなおった。

「そこまで事態を重くお考えならば、いっそ、その作戦の指揮権は、王子のわたくしへお預けください」

「いやはや、これはなんとも」

愉快そうに、宰相は笑いつづけていた。

その場に居合わせた者は、みな寒気を覚えた。

宰相の口から声はまったく出しておらず、空気だけが、くつくつとゆれている。その気配が余計に老人の様子を、恐ろしげに見せているのである。

一歩、宰相は前に出た。

「王子殿下、御心配めされる必要はございません。

我が国の軍隊は、聖職者の王子殿下に指揮をお頼み申し上げねばならぬほど、ふぬけた集団ではありません。

ここは御心安く、リンフェンダウル男爵めに、すべてお任せあれ」

「しかし……」

「王子殿下、どうぞ」

宰相がローレリアン王子にむかって最後に発した「どうぞ」の言葉は、「あちらへどうぞ」の意味であった。慇懃な態度で最上級の臣下の礼を取った宰相の右手は、出口の扉の方向をさし示している。

まだ、実権は、我が手にあるのだ。見習いの若造は、とつとつ、ここから出ていけと。

ローレリアン王子は、再度、父国王を見る。

国王は眉をひそめ、王子をいさめた。

「ローレリアン。そなたは何でも器用にこなすが、軍の指揮は、さすがに未経験の門外漢であろう。」

それに、そなたはこれから我が王国を背負って立つ身。みずから危険を冒すような行動は、慎むべきである」

反論を飲みこんで、王子は深い一礼とともに答えた。

「出すぎたことを申し上げました。お許しください。

それでは、わたくしは明朝の報告を、おとなしく待つことにいたします」

国王の執務室から退出したあと、しばらくのあいだローレリアン王子は無言だった。

国務関係の執行部署が集まっている王宮の西翼は、歴代の王が増改築をくりかえした壮麗な建物だ。

柱は前世紀に流行したコワルド様式。天井のレリーフは年月にすすけて重々しい輝きを放つようになった薔薇紋の透かし彫り。階段の手すりは滑らかな白大理石で、足音をしつとり吸い取るのはバクスタ産の絨毯だ。

その絢爛豪華な建造物の内部を、王子は無言で歩いていく。

あとにつづく筆頭秘書官のカール・メルケンも黙りこんでいるので、ローレリアン王子つき近衛護衛隊第三小隊長の副官であるシムスは、非常に気まずい思いをしていた。

心の中で、自分の上司をののしってしまう。

たいちよーっ！ いつも王子殿下のお側にはべる隊長のお役目に、代役を立てなくちゃならない野暮用って、いったいなんなんですか！

俺に『氷鉄のアレン』の代役は、無理ですってば！

黙りこんだ王子殿下が、こんなに怖いなんて、知らなかったです！ ついでに、メルケン首席秘書官も、おっかないですよ！

なんですかあ、この二人は！

階段を降りきり、長い廊下を通りぬけ、一行はやがて奥の宮へつづく通路へさしかかった。

その通路からは、王宮の花壇がながめられる。美しい幾何学模様を描くように配された夏の花は、夕方の光のなかでも鮮やかな色を放っていた。

風に乗って漂ってくるのは、かすかなラベンダーの香りだ。

その香りのおかげで勘気をゆるめたのか、王子が立ち止まる。

シムスは王子殿下の三步後ろに立ち、周囲を見回した。

お守りする王子殿下に公共の場所で立ち止まられると、護衛官たちはみな、とても緊張する。

銃や大砲は戦の方法を大幅に変えてしまった武器だが、要人の身の危険を増させた武器でもあるのだ。離れた場所から飛んでくる小さな弾丸を、止めるすべはない。

ローレリアン王子には敵が多い。

王宮のなかでさえ、完全に安全とは言い切れないから恐ろしい。

訓練された目で危険が潜みそうな場所のチェックを終えて、シムスはほんの少しだけ警戒を解き、王子殿下のほうを見た。

殿下の御尊顔は、いつ拝見しても美しい。

男性を相手に美しいという形容を使うのも失礼なような気がするのだが、武骨な武人のシムスには、あまり美をたたえる言葉の持ち合わせがないのだ。

しかし、今日の王子殿下のお顔には、美しさだけではない何かがあった。

広大な庭の花壇をながめる王子の横顔には、苦い後悔の気配が漂っていたのだ。

夏の風を建物の中に取りこむように、広く開けられた窓に、王子は手をかけた。

その手が、強く窓枠を握りしめる。

「殿下」

メルケン首席秘書官が、気づかうような口調で王子に話しかけた。

答える王子の声はかすれていた。

「しくじった！」

まさか、あの時間まで宰相が国王のもとへいるとは。わたしの失態だ。

事態の收拾を急ぎすぎて、いつもならこの時間帯には、もう国王はひとりになっているはずと、つい確認を怠って推測で行動にでてしまった」

「しかたがございません。

時には、そのようなこともあるでしょう」

「しかたがないでは済まされない。

いいか、カール。

反政府運動の活動家にも、人権はあるんだ。

彼らは犯した罪について裁かれなければならないが、法による公正な裁きは、犯した罪と同等でなければならぬ。

だが、宰相は、そうは思っていない。

彼は苦勞して長年国を守ってきたがゆえに、国家権力に反発する者を憎悪している。

とくに、革命派の活動家などには、宿怨の敵と言わんばかりの反応だ。

宰相の、あの激高ぶりを見たか？

彼はリンフェンダウルに、活動家たちを皆殺しにしろと命じるだろう。

今回の摘発は、相手が撃ちかえしてきたとして、まちがいなく銃撃戦になる。

現実には、一方的な殺戮だろうがな。

下手をしたら、無関係な市民も巻き込まれるだろう。

リンフェンダウルは、宰相の敵を排除することで、今の地位までのぼりつめた男だ。しかも、証拠がない疑いの段階で被疑者を痛めつけて、自白を強要するような卑劣なやつ。花街の住人など、虫けらのように思っている。

いったい、どれだけの犠牲が出るか、考えただけで恐ろしくなる。しかも、そんな事態におちいる道筋をつけたのは、愚かな、このわたしなのだ！」

王子の拳が、勢いよく窓枠をたたいた。

開かれた窓のガラスが、音を立てて振動する。

メルケン首席秘書官は、また振りあげられそうな王子の手をおさえた。

「拳を痛めます、殿下」

「はなせ、カール」

「はなしませんよ。明日、この手にペンを握れなくなつては、こまりますから」

「王子の責務を果たせと？」

では聞くが、王子の責務とは、いったいなんだ？

わたしは、自分が恐ろしい！

わたしが、ほんの少ししくじっただけで、死ななくてもよい人間が死んだりするんだぞ。

わたしは、ただの愚かな男なのに。

人の運命を変えるような、大それた存在ではないのに」

涙こそ出ていないが、王子は泣いているのだとシムスは思った。その証拠に、王子の背中は激しく震えている。

メルケン首席秘書官は、その震える背中に自分の手をそえた。

「では、同じ失敗をくりかえさないために、反省と検討をいたしましょうか。

ものごとを分析して、新たに方策を考える。

そついつのが、殿下はお好きでしょう？」

弟に忠告する兄のような態度で、彼は言う。

「今度また、国王陛下の御前で宰相と対立なさったときには、『父上』、わたしの意見を聞いてくださいと、申し上げればよろしい」

『父上』という呼びかけの言葉には、わざと強い響きがこめられていた。

王子の孤独は、他人では癒せない。

彼の苦悩を同じ痛みとして理解できるのは、唯一、同じ立場で生きてきた肉親だけだろう。

メルケン首席秘書官は、そう確信しているのだ。

「ほんの少しで、よいのですよ。」

お父上に、甘えなさい。

そうすれば陛下は喜んで、殿下の意見を最後まで聞いて下さるでしょう。

聞いてさえいただければ、理にかなうは殿下の言であると、陛下にもご納得いただけるはずなのです。

「ちがいますか？」

王子の返答は、いまにも消え入りそうだった。

「……あなたは、正しい」

王子の背中から手をはなし、秘書官は、そつとうなずいた。

「情を軽んじてはなりません。」

なにもかも、お一人で背負われることはないのです。

殿下と心を打ち解けあい、お支え申し上げたいと願っている者は、いくらでもおります。

遠慮なく、たよればよいのです」

「わたしは……、人にたよるのが苦手なんだ。

自分は天涯孤独だと思って、育ったから。

自分が与える側にならなければ、誰からも愛されないと思っ
た。

だから、必死に、なんでも学ぼうとした。

学んでいなければ不安だった。

神官として、さんざん隣人を愛せ、世界は愛に満ちていると説
いてきたくせに、私自身は、愛を信じきれないでいる」

顔をあげた王子は、窓の外の花園に目を向けた。

優雅な香気をふくんだ夏の風が、渡り廊下を吹きぬけていく。

王子の金色の髪は風になぶられてそよぎ、王家に生まれた者の証
である水色の瞳には、透明で寂しげな光がたたえられていた。

メルケンとシムスは、王子の側に控えながら、たがいの様子を盗
み見た。

見たら、わかった。

自分たちはいま、同じことを考えていると。

傷ついている王子に、どうすれば自分たちの愛を伝えられるだろ
うか。

おのれを殺し、ローザニア王国のすべての民を愛する人間になろ
うと、必死に努力しておいでになるあなたを、わたしたちは心から

敬愛していると、どうすれば伝えられる……？

メルケンは王子の背中に話しかけた。

「殿下、今夜は眠れない夜になるのかもしれませんが」

「ああ」

「眠れなくとも、横にはおなり下さい。それだけでも、身体は休まります」

「そうだな」

「口約束ではなりませんよ。真夜中に、ラッティ坊やを確認にやりますからね。」

「一晩中、犠牲となる人が一人でも少なくて済むようにと、お祈りをなさったりはしないでください」

「それは、こまっとな」

ふりむいた王子は苦笑していた。

かわいがっている小姓の少年に泣かれるのは、かなり苦手な王子なのである。

「さあ、まいりましょう」と先をうながしながら、首席秘書官は通路の奥を見た。

見て、眉をひそめる。

奥の宮の方向から、一人の男が足早にやってくるのだ。

シムスがつぶやく。

「うちの隊長ですね。何を急いでいるのでしょうか」

変装用のフロックコートを着ていても、任務に意識を集中している時のローレリアン王子の護衛隊長アレン・デュカレット卿は、目立つ男であった。軍人らしい鍛えた体は、きびきびと動いているし、癖のある茶色の髪の下には、鋭い眼光を放つ瞳がある。

「王子殿下」

素早く彼らのもとへたどりついたアレンは、軽い一礼だけで挨拶を終え、用件を切り出した。

「モナさまが、やらかしてくれましたよ！」

殿下にモナさまを守れと命じられていましたから、俺は念のためと思って、気配を消すのがうまい部下を王宮から下がられるモナさまの後ろに、くっつけておいたんです。

案の定、モナ様は侯爵家の護衛を街の中でまいちまって、花街へ直行です。殿下の本気は怖いって知っておいでのなるから、屋敷へ閉じ込められる前に、花街へおいでになったんだろうと思います。

いまは、例の『ポワンの宵の花亭』という高級娼館へいらっしやいます。

俺は、その報告を聞いて、あわてて街からもどってきたんです」

「なんだって!?!」

みるまに王子の顔色が青ざめる。

「その店は、今夜、憲兵隊に襲撃されるぞ！
しかも、その部隊を指揮するのは、リンフェンダウルだ！」

「あの、嗜虐趣味があるんじゃないかと噂されてる、宰相の番犬野郎か！」

アレンの驚愕の言葉を聞きながら、王子は険しい視線を窓の外へむけた。

夏の夕暮れは、訪れると足が速い。

窓の外の花壇に降り注いでいた陽光はすでに弱くなっており、空には茜色に染まる雲があつた。

あたりに吹く風は、涼しい夕風である。

日が暮れるまでの時間は、あと30分といったところだ。

ぎりつと、噛みしめた歯の鳴る音が、王子の口元から漏れた。

王子が強い葛藤に苦しんでいる様子が、そばに控えている者達には、手に取るように理解できる。

これから王国の未来を担っている王子が、危険に身をさらしてはならないということくらい、国王に忠告などされなくても、よくわかっている。

けれど、理性と感情は別のものだ。

最愛の女性が命の危険さえある状況に置かれてるとわかって、冷静でいられる男などいるわけがない。

おもてを伏せ、王子はしばらく、黙りこんでいた。

そして、ふたたび顔をあげたとき、その表情には固い決意があった。

「アレン、街へ行くぞ」

「はい、お供します」

途中ですれちがうであろう王宮の人間に不信感を抱かせないように走るとはせず、優雅な歩みで、王子は先へ進みだす。あとにつづくのは『王子殿下の影』。行き先は『黒の宮』。目立たずに街へ出るために、王子はまず、服装を改めるのだらう。

その後ろ姿を呆然と見送りながら、シムスはメルケン首席秘書官へたずねた。

「王子殿下を、おとめしなくてよろしいんですか、メルケン殿」

メルケン首席秘書官は、苦笑しながら首をふった。

「殿下に、情を軽んじてはならないと申し上げたのは、このわたしだ。

それに、こういう状況で、ヴィダリア侯爵令嬢をお見捨てにならないお方だから、わたしはローレリアンさまに、お仕えしているわけだね」

「しかし、殿下の身に、万が一のことがあれば……」

「王国の未来は、また暗雲に包まれるし、殿下の行動をお諫めしな

かったわたしの首は、確実に吹っ飛ぶだろうな。下手をしたら、銃殺刑かもしれない」

「すごいことを、さらりとおっしゃるんですね、秘書官は」

メルケンは静かな顔で、シムスを見た。

「ローレリアン王子にお仕えすると決心した時に、わたしの命運は殿下と一蓮托生だと、覚悟は決めたのでね。

あの方は、我が身命をかけてお仕えする価値のある方だ。

あの方にお仕えして、わたしも国のために働く。

そう決めたのは自分自身で、ほかの誰でもない」

カール・メルケンはあくまでも実務家で、人を威圧するような迫力や、華やかなカリスマ性を持った男ではない。

けれどもシムスは、このとき、この男は凄いと思った。男としての格で負けたような、そんな気もする。

「失礼ですが、メルケン殿は、おいくつですか？」

「32だが？」

「ええっ！？ もっと、うんと歳がいつてるのかと思いましたよ！」

むっとしたメルケンが、たずねかえす。

「どっという意味だ」

「王子殿下をお諫めになったときも、それに今も、めっちゃかつこ

いいですよ！

これからは、敬意をこめて親父殿とお呼びします！」

「なんだと！」

「では、自分も王子殿下のお供をいたしますんで！」

「シムス！」

呼び止められて、走り出していた若き護衛官はふりむいた。

「わかってますよ、親父殿。

我が命運は、王子殿下と共にあります！

自分も、覚悟は決めていますから！」

敬礼をしながら気持ちいいくらいの鮮やかな笑顔を見せると、シムスは踵を返し、遠ざかっていくローレリアン王子と護衛隊長の後を追っていった。

渡り廊下に一人残ったメルケンはやく。

「あいつ、確か自分は殿下と同じ年だと、このあいだ言ってなかったか？ その年齢と屈託のない性格のおかげで、若いアレン・デュカレット卿と組ませても、それほど齟齬は生じないだろうと判断されて、副官に任命されたのだと。

ならば、わたしとは10歳違いだ。なにが親父殿だ。失礼な！」

あたりには、夕闇が迫っていた。

王宮の中央の方向から、照明のランプに火をともし下働きの一団

がやって来る。

彼らは風で火が消えてしまわないよう、ランプの明かりをひとつ灯すたびに、大きく開かれた窓をひとつづつ閉めていく。

夏の夕風は、心地よい。

しかし、もう夏風を楽しむみやび雅な午後は終わった。

今宵、闇のとばりがプレブナンの街をおおうとき、悪霊があたりを跋扈はくごする。

老境へ入り、あとは後進へ道を譲るばかりとなった宰相が、50年もの長きにわたって育て続けた、『積年の恨み』という名をもつ醜悪な姿の悪霊が。

メルケン首席秘書官は、胸元へ手をやった。

彼はそれほど信心深い男ではなかったが、最近、お仕えする王子に影響されて、服の下に護符を身につけて持ち歩いている。

「天と地にあらせられる神々よ。どうか我らの王子に、最大のご加護を」

いつもの祈りの文言を口の中で唱え終えた瞬間、すぐそばの柱に取り付けられたランプに火がともされ、目の前の窓が閉められた。

下働きの者たちは秘書官に一礼し、次のランプに火をともすべく場所を移動する。

夕風はとだえ、あたりには暗闇が近づきつつあった。

王都プレブナンの花街は、王宮がそびえる高台から離れた商業地区の外れあたりにあった。

そのあたりは王都の不夜城と呼ばれる歓楽街で、広場や表通りには、大きな劇場や深夜まで営業している飲食店が建ち並んでいる。夜の客を自分の店へ招きよせるために、それぞれの店が軒先に煌々とランプの明かりを並べており、その輝きはガラスに反射して虹色にきらめき、目が眩みそうになるほどだった。

歓楽街をいきかう人々は、それぞれに粋な夜の装いを凝らしている。

まばゆい明りの中をゆつたりとそぞろ歩く人々には、明りがない夜など想像もつかないのだろうなとモナは思う。

同じプレブナンに住んでいても、下町の住人はランプの油を買うことすらままならず、夜の闇に怯えながら暮らしているというのに。

モナが窓から見下ろしているのは、歓楽街の表通りだ。道行く人々の服装は、どれも贅沢なものである。

金回りのよい男たちが利用する娼館は目抜き通りであって、建物の外観はまるで高級旅館のように見える。金持ちの男たちには、対面というものがあるからだ。

本当の意味での花街は、表通りから幾筋も別れている細い路地や裏道に存在する。

そのような道は、入り口から中をのぞいただけで見分けられる。

いわゆる春を売る女たちが路上で客引きをしていたり、酔った男たちが徒党を組んで騒いでいたりするからだ。

さすがのモナにも、その本物の花街へ入っていく勇氣はなかった。

それに、彼女が知りたかったのは高嶺の花として男たちから奉られ、妍けんを競う美姫たちのファッションセンスだ。

普段から金持ちの男の相手しかない高級娼婦たちは、男たちに貢がせた金で身を飾り、ときにはそれらの男たちの要望に応えて、いっしょに劇場へ出かけたり、高級レストランで食事を共にしたりする。

貴族や平民でも裕福な階級に所属する女性は、そんな高級娼婦を軽蔑しきった目で見ていたが、彼女たちの装いには、いつも注目している。

男を夢中にさせる高級娼婦たちの装いは、大胆で斬新なのだ。貴婦人たちの間の流行が、高級娼婦の装いの真似から始まるのは、よくあることだった。

だからモナは、高級娼婦と懇意になりたいと願ったとき、迷うことなく歓楽街で一番立派な旅館に見える『ポワンの宵の花亭』に突撃をかけたのだ。

もちろん、昼間にだったが。

高級娼館に出入りしている男たちに恥などかかせたら、どんな報

復をされるか、わかったものではない。

高級娼館のロビーにいるところを一般の女性に見られただけで、侮辱を受けたと感じる男もいる。金や権力を持った男のプライドは、山のごとく高く、岩のごとく硬いのみだから。

そんなわけで、昼過ぎをねらって「この店で一番の人気をほこるご婦人と、お話しをさせていただきたいの」と、いかにも空気が読めていないとぼけた発言をしながら『ポワンの宵の花亭』に初めて訪ねて行った日、モナは店の用心棒によって外へつまみ出されそうになった。

しかし、用心棒はモナをつまむことすらできなかつた。

彼女は、ひらり、ひらりと、用心棒の手をかわしつつげ、ひざの裏にちよいと蹴りを入れて大の男を転がして見せたり、かけのぼつた階段を、手すり伝いに滑り降りて見せたりしたのである。

初対面の相手に失礼があつてはならないと、きちんとしたドレス姿で身を飾っていたにもかかわらずだ。

その雄姿を見た娼館の女たちは大喜びした。

彼女たちにとっては、男を手玉に取る女こそが、いい女の条件である。

何の騒ぎだとロビーへ集まってきた女たちは、モナにやんやの喝采を贈った。

そして、モナは望み通り、プレブナンの花街で一番の美女として

名高いフィオーラと友達になったのだ。

「それで？ あなたは王宮からご自宅へ帰る道の途中で、ここへよつたと、おっしゃるの？」

そのフィオーラに話しかけられて、モナは部屋の中のほうへ体の向きを変えた。

目抜き通りに面した二階にあるこの部屋は、『ポワンの宵の花亭』で、もつとも豪華な部屋である。

金と赤に彩られた部屋の中で、部屋の主のフィオーラは純白のドレスに身を包み、優雅なしぐさで茶器をあつかっている。

その色の落差が、じつに美しいのだ。

男女の駆け引きについては百戦錬磨の手管を持つはずのフィオーラが、可憐で清楚なお姫様のように見えるから恐れ入る。

茶碗に注いだお茶をフィオーラから受け取って、モナは言った。

「そうよ。それに、このブラウスの出来栄も、フィオーラに見せたかったし。

やっぱりレースを引き立てて見せる方法を、あなたに相談したのは大正解だったわ。

それはともかくとして、なにしろいろいろ悔しかったから、今夜のここの花代は、兄のロワールのつけにやってたわ。

兄様ったら、ひどい。

リアンに、わたしの行動をばらすなんて！」

「あのね、モナ」

フィオーラは苦笑する。

「あなたのお兄様も、王子殿下も、純粹にあなたのことを心配しておいでになるのではなくて？」

モナは、つんと、そっぱをむく。

「余計なお世話だわ。」

人身売買なんかに手を染めた悪い街の顔役が幅をきかせている花街の奥まで行くならともかく、『ポワンの宵の花亭』で、お友達の貴方とお茶を飲むことの、どこが危ないっていうの？」

「危なくはないけれど、ここに出入りしていることが世間に知れたら、あなたの評判に傷がつくでしょう。」

まして、夜になってからも、ここにいるなんて駄目よ」

「あなたまで、リアンと同じことを言うの？ 嫁のもらい手がなくなるのか」

「殿下がおっしゃることは、正しいわよ。」

街中のあらゆる場所へ着飾って出かけて行って、お高くとまった貴婦人たちを悔しがらせてみたところで、わたくしが金銭を代償に男たちへ春を貢ぐ女である事実は変わらないの。

いい機会だから、これを最後に、もうここには来ないことね」

「フィオーラ、それは、もうわたしと友達でいるのは、いやだったこと？」

「そんなわけないでしょ。あなたは、とても楽しいお友達だわよ」

「なら、もうここに来るななんて、言わないでちょうだい。」

リアンがお父さまに命令を出したら、しばらくはここに来られなくなるかもしれないけれど、ほとぼりが冷めたら、また一緒にお茶を飲みましょよ」

「王子殿下から、お許しをいただけるかしら？」

「あの人は、とても厳しい人だけれど、理不尽なことにはしないの。今度のことだって、反政府活動家がどうのという問題にけりがつけば、もういいよと言ってくれるはずなのよ。」

わたしの女としての評判なんて、元から大したものじゃないし」

フィオーラは笑った。

「モナ、あなたはとても、王子殿下を信頼していらっしやるのね」

モナは赤くなって答える。

「わたし、男の人って、じつは苦手だったの。高いところから、わたしを見下ろしてくるし、声が大きいし、話し方や動作も乱暴だし」

「あらあら、うちの店の用心棒を軽くあしらった、あなたの口から出たとは思えない発言ね」

「だって、本当に、そう思っていたんですもの。」

剣術を習ったりしたのだって、そういう男の人たちに負けないよ
うになれば、苦手意識を克服できるかしらと思ったからなのよ」

「強くなったら、気持ちは変わったの？」

苦笑しながら、モナは首をふった。

「変わらないわ。でも、大人になったら、苦手の理由はわかったの。男の人たちは、わたしたち女を、対等な相手だとは思っていないから。」

いつだって、男より劣る存在だと思ってるのよね。

それこそ、恋の駆け引きをしているときでさえよ。

きみはぼくの女神だ、とか言いながら、男の人たちは、その言葉を言っている自分に酔っているんだわ」

性に関する知識はあるけれど、実際の経験はないだろうモナに、この感覚は理解できないかもしれないなと思いつつ、フィオーラは説明を試みた。

「それはモナ。男は征服する側の性を持つ生き物だからよ。」

女を征服しないと男は子孫を残せないのだから、そういう思考になるのは自然の摂理だと思うわ」

「征服……かあ。」

きつと、リアンは男と女の間を、そういう風にはとらえていないと思うわ」

遠くへ夢見るような視線を投げて、モナはつぶやく。

「あの人、ちがうの。」

どんな人と向き合うときも、相手を一人の人間として見ている。

だから、ローザニア王国の国民のすべてが幸せになれたらいいのになんて、壮大な夢を見てしまうんだわ」

フィオーラは椅子にすわっているモナの背中に、背後から抱きついた。

「ローレリアン王子殿下のことを語っているときのあなたときたら、本当に幸せそうよね。」

うらやましくて、憎らしくなるわ。

わたくしのように夜の世界で生きている女には、もうそんな純粹な恋はできないもの」

自分の首にからまるフィオーラの赤味がかった金色の髪をいじりながら、モナはため息をつく。

「これはこれで、けっこう辛いのよ？」

リアンは国家のために、生涯独身をつらぬく決心をしているみたいだし。

大好きな人に、将来有望な男を捕まえて、さっさと嫁に行けなんて、言われてごらんなさいよ。

本気で泣けるから」

「それでも、うらやましいのよ。」

わたくしたち夜の女の望みなんて、年季が明ける時に、それなりに性格がよくて、それなりにお金持ちの、よいパトロンが見つければいいな、程度ですもの」

紅で彩られた艶やかな唇から、フィオーラは細くて長いため息をつく。

「本物の……、恋がしたいわ。」

あなたが無理をして、今夜こうして、わたくしをたずねてきてく

れたのも、本物の恋をしているからでしょう?」

「そうね……」

よせあったおたがいの身体からは、心地よいぬくもりが伝わってくる。そのぬくもりは立場がまったく違う二人の心を、わけへだてなく、優しくなだめてくれた。

いつのまにか夏の日とはとっぷりと暮れ、あたりは暗くなっていた。フィオーラに与えられている部屋は、男女が枕を並べて睦言をかわすための寝室なのだ。照明のランプは、それほど大きなものではない。

フィオーラは暗がりのなかで、自分が抱きしめているモナのうなじを見つめた。

なめらかで健康そうなうなじだ。

まだ、男に口づけさえされたことがない、清らかなうなじ。

暗い誘惑に駆られて、フィオーラはそっと、モナのうなじに口づけた。

男女の営みの手管を知り尽くした、その官能的な唇で。

「……!」

抱きしめた腕の中で、モナがびくりと身を縮めた。

口づけのあとを指の腹で撫でながら、フィオーラは言う。

「ねえ、モナ。」

結婚なんかしなくても、愛しい人を籠絡する方法はあるわ。なんなら、教えてさしあげるけれど」

「ほ、方法って……」

「今夜の花代は、もういただいているから。」

わたくしは、あなたと、ひと晩ベッドですごしてもいいのよ」

「ひと晩!？」

夜通しここにいるなんて、む、む、む、無理よっ!

リアンの命令がなくても、お父さまやお兄さまたちから盛大なお説教を食らったあげく、年単位で外出禁止にされてしまっわ!

下手したら、長兄のお嫁さんにまで叱られちゃっ!

わたし、あの人、苦手なのよ!

ヴィダリア侯爵家の女主人は自分だって威張り散らしているし、鼻持ちならないほどプライドが高くて、いつもわたしの顔を見ると、しょうがない人ねって感じで、露骨なため息をつくんだから!」

モナの慌てぶりはすさまじかった。

フィオーラの手を振り払いこそしなかったが、椅子から飛び上がるようにして立ちあがり、そそくさと壁際まで逃げてしまう。

顔は、真っ赤である。

寝室のほの暗い明かりの下でも、はつきりと確認できるほどに。

フィオーラは大きな声で笑った。

「冗談よ、モナ。そんなに怯えないで。」

小姑の奥様に叱られるのが、嫌なのもわかったから」

「冗談って、……ひどいわ！」

「なんと言えはいいのか、あなたって、無防備すぎるのよ。ここが
どいう場所なのか、もう少し自覚しておいたほうがいいわ」

「それは、わかったけれど」

「じゃあ、早々に本題の話をすませて、ご自宅へお帰りなさい。ま
だ今なら、ちよつと夜の散歩を楽しんできました程度で済む時間
ですもの」

「そうする」

すっかり意気消沈したモナは、ぼそぼそと口の中でしゃべった。

「知りたいのは、『踊る神官』みたいなパンフレットを発行してい
る、男の人たちの集まりのことなんだけれど」

「リジイの想い人のことね」

「この女性の恋人なの？」

「ちがうわよ」

フィオーラは、深いため息をついた。

「わたくしたち夜の女はね、みんな、本物の恋にあこがれているの。花街の女になったときから、そんな恋はもうできないのだと、あきらめなくてはならないのだけれど。

なかには、あきらめがつかなくて、それっぽい雰囲気に乗されてしまう女もいるのよ。

リジイの恋は、その典型。

彼女が恋人だと信じている男は、彼女を利用して思っているだけだと思っ
うわ。

リジイの年季が明けたら、田舎に小さな家を買って所帯を持とう
なんて、言っているらしいの。

その言葉を信じて、彼女はせつせと男にお金を貢いだり、自分の
部屋を集会所として貸してやったりしているのよ。

でも、それもそろそろ、終わりになると思うわ。

最初のうちは、リジイの部屋で集会有る夜にはリジイが店主に
倍額の花代を払っていたもので、店主も集会を黙認していたのだけ
れど。

ここの花代は、とても高額だから。

リジイは借金がかさんで、破産寸前みたい。

とうとう、たちの悪い高利貸しにまで手を出して、うちの店から
は追い出されそうな雰囲気なのよ。

夜の女の借金のかたになるのは、自分の身体だけ。

きっとリジイは一晚に何人も男と寝るような、ろくでもない売
春宿へ売られるわ。

そうなったら、恋人からも捨てられるでしょうね。

けつきよく、行き着く先は野垂れ死に。

それが、花街の女がたどる道なの。

わたくし、若くて綺麗なうちに死にたいわ。
年を取るのが怖いよ。

いつか、この店で働けなくなる時のことを考えると、どうしようもなく不安になるの」

「フィオーラ」

悲しそうなモナの様子を見て、フィオーラは後悔した。

モナは日々の生活に苦しんでいる人々のために何かをしようと考え、とても優しい人だけれども。

でも、しょせんは彼女も、侯爵家のお姫さまなのだ。

花街の女がたどる末路なんて、どうしようもない社会の底辺にある泥にまみれた人生の話なんか、モナに教えてやる必要はなかったのに。

ひとこと、「知らない」とだけ、言えばよかったことなのに。

どうして自分は、モナにリジイのかわらない恋の話など、してしまっただろう。

フィオーラは泣きたい気分で、そう思った。

大急ぎで王宮から街へ降りたローレリアン王子と護衛の士官二人は、日が暮れてから間もないうちに、歓楽街へたどり着いた。

馬を預り所に預け、こっちですと案内するシムスのあとについて、一行は目抜き通りの人ごみを通り抜けていく。

意外にも、シムスは役に立つ男だった。

麦わら色の髪と琥珀色の瞳を持つ若手近衛士官の彼は、歓楽街の女たちのことを、よく知っていたのだ。そこそこ二枚目の顔と明るい性格のせいで、彼はどこの店にいつても女たちから大歓迎されるのだという。

要するに、遊びなれているのだ。

その事実を知った上司のアレンは、無愛想に拍車がかかったような仏頂面だった。

彼はローレリアン王子に仕えたいがために士官学校で勉強と鍛錬に明け暮れていたから、青春期の一番大切な時期に、まったく遊んでいないのである。

いまだって、まだ18歳なのだから、彼は青春期にあると断言していい。

けれども、今度は彼の任務が、遊ぶことを許さない。

責任ある仕事を任せられ、十数人の部下を持ち、毎日忙しくすごしていることは、アレンの誇りである。

しかし、「あの店のミロちゃんは、歌がうまいんですよ」「などと浮かれている副官を見ていると、なんとなく面白くないアレンなのである。

しかも、いつもアレンが心配してやっているローレリアンまでが、なんだか失礼なのだ。変装用の伊達眼鏡を鼻の上でずらして、小馬鹿にしたような視線でアレンを見てくる。

「アレン、そのふてくされた顔を、なんとかしろ。我々は、歓楽街に遊びに来た若者なんだぞ。若者は若者らしく、この浮かれた街の雰囲気を楽しまなければ、怪しまれるだろう」

アレンは、ふんと、鼻を鳴らした。

「リアンだって、こんな場所に来るのは初めてじゃないのか。おまえが育った学問都市のアミテージには、こういった雰囲気の街はなかっただろう」

それぞれの店が灯す明かりが乱反射して煌めく大通りを見渡しながら、ローレリアンは言う。大通りは夏の夜を楽しもうとする人々で、おおにぎわいだった。

「歓楽街はなかったが、娼婦はどここの街にでもいるさ」

「へー、まるで経験があるみたいなき草だな」

ローレリアンは、はたと、立ち止まった。

「アレン。いちおう確認しておくが、わたしは童貞ではないぞ」

「はいっ?」

立ち止まったローレリアンの背中にぶつかりそうになったアレンは、あわてて後ずさる。

その、あつげにとられた青年士官の顔を見て、ローレリアンは、にやりと笑った。

「一国の王子が、22の歳まで、その手のことを知らずにいるわけがないだろう。」

わたしの初体験は悲惨だぞ。

16のとき、大叔父の命を受けた者に連れていかれたどこぞの貴族の別邸で、待ち構えていたその道のベテランの女に、手取り足取りされてだな。

それでも、いたしてしまえるところが、男の悲しい性というもので

「~~~~~!」

赤くなって開いた口を閉じられずにいるアレンは、とても国一番の剣士には見えなかった。

ローレリアンはやれやれと肩をすくめ、かたわらのシムスに目をやった。王子と同じ年の青年士官も、あきれた顔をしていた。

小声で、ローレリアンは言う。

「シムス、御苦労だな。次の公休日がきたら、こいつを適当な店へ連れて行ってやれ。」

純朴な田舎青年が尻込みしたりせずにはすむように、店は吟味するんだぞ」

「はいっ、了解です！」

完全に任務を忘れた護衛隊長は、わめきまくった。

「なんだなんだ、おまえらは、二人で勝手に納得しやがって！」

「だいたい、リアン！ きさまは、聖職者だろうが！」

「汝、姦淫かんいんすることなかれとか、いわねーのかよっ！」

「アレン、娼婦はローザニアの神教聖典が成立したとされる時代より、もっと古い時代から存在する職業だ。」

聖典は結婚を神聖なるものとして位置付けているが、娼婦の存在には言及していない。社会の秩序を維持していくためには、ある程度の必要悪を認める度量も必要だったことさ。

もつとも、人身売買は恥ずべき行為だと思うから、わたしも何とかしたいとは考えている。

労働には正統なる対価を。

それが、わたしの目指している国の在り方でね」

「ああああっ、おまえと話していると、時々俺は、頭がおかしくなるような気がする！」

「まあまあ、隊長、落ち着いてください。ほら、目的の店に着きましたよ」

シムスがさし示した店は、立派な作りの旅館に見えた。

この店が娼館であることを示すのは、重厚な鋳物で作られた『ポワンの宵の花亭』という看板だけである。

この界隈で店名に『花』をつけて名乗るのは、その手の店ですよという隠語のようなものだ。

「さて、どのようにして店に入りますかね？」

シムスの質問に、ローレリアンはあっさりと答えた。

「正面から、堂々と」

「はいはい。では、まいりましょう」

ものなれた副長は、さっさと店の正面の階段を登っていく。

ローレリアンは後ろを歩くアレンに言った。

「ここからは、思うぞんぶん、無愛想な顔をしていいぞ。

わたしは王子にもどる。

おまえは『王子殿下の影』でも『氷鉄のアレン』でも、なんでもいいから、それらしくふるまえ」

反政府活動家のジャン・リュミネは、日が暮れてあたりが暗くなつたところを見計らつて、裏口から『ポワンの宵の花亭』に入った。

歓楽街の表通りに店を構える高級娼館では、裏口も立派な玄関あつかいだ。背徳行為にふける館へ出入りしているところを知り合いに目撃されたくない紳士は、世間につばいいるのである。

裏口から店に入ると、社交サロン風の造りになっている表の待合室を通らずに、一階に部屋をもつ娼婦のもとへ直行できる。

王都でも名だたる美姫を寢所に侍らせたのならば、表の待合室で金をばらまいて自分の羽振りのよさを証明しなければならぬが、なじみの娼婦と気心知れた夜を過ごしたいのなら、裏口経由が便利である。一階に部屋を割り振られている娼婦は、容姿が平凡だったり、少々年増だったりするが、その気樂さを楽しみに通う常連客も多いのだ。

裏口でなじみの案内係に小銭をわたし、懇意にしている娼婦の部屋へむかう。

案内係の後ろを歩きながら、この娼館の内装は、最近台頭してきた平民成金連中の館とそっくりだなと、リュミネは思った。

できるかぎり豪華に煌びやかに、という意図はわかるのだが、時代も題材もがちがう統一感のない絵を並べてかけていたり、柱や手すりの装飾に金箔を多用しすぎたりする悪趣味さからは、主の教養

の程度が知れてしまう。

主義や信条が、まったく感じられないのだ。

廊下のそこかしこに飾られている美術品や骨董の類からは、金にあかしてそれらを集めた人間の、浅薄な虚栄心だけが伝わってくる。しばらく歩いて、いつもの部屋の前にたどり着く。

案内係が立ち去るのをまってから、リュミネは静かにドアをたたいた。

「俺だ」

短く名乗りを上げると、ドアが細く開く。

相手の男は、かなり緊張しており、早く入れとリュミネに手振りで伝えてきた。

男にひっぱりこまれるような形でリュミネが部屋へ入ると、そこに集まっていた十人足らずの仲間が、いっせいに詰め寄ってきた。

「どづいつことだ、ジャン」

「今日を限りに、しばらく集会を見合わせるとは」

「官憲に、何か感づかれたのか」

「危険はあるのか」

矢継ぎ早に発せられた問いは、かくしきれないあせりで、どれも
うわずっている。

リュミネはゆっくりと、部屋の中を見まわした。

中央のテーブルには葡萄酒のグラスが並べられ、簡単な料理も取りよせてある。

貴人を相手にする高級娼館の名にふさわしく、ここでは望めばどんな時間の過ごし方も可能なのだ。

話題が豊富で教養高い美姫たちが褥の相手をしてくれるし、心ゆくまで楽しい酒の相手も務めてくれる。

時には詩の韻文をたわむれに重ね、楽器を奏でて即興の音楽をつけたり、自分の裸体の絵を描かせたり、ついさっきまで劇場の栈敷でともに鑑賞していた演劇の批評に興じたりも。

必ずしも男と床をともしなくとも満足できる時間を提供できるのが、高級娼婦というものなのだ。

だから、リュミネ達の集会は、いままで小規模な紳士の親睦集会として、店主から黙認されてきたのだが。

「だいじょうぶだ、落ち着け。

ただ、この部屋の持ち主のリジイという女が、借金のせいで、この店から追い出されそうな雰囲気だな。

ここは、なかなか居心地の良い集会所だったが、そろそろ潮時ということなんだろう」

「なんだ、そういうことか」

「あせって、そんなをした」

安堵した様子の仲間たちを、リュミネは苦々しい気持ちで観察した。

この連中との付き合い自体も、そろそろ潮時なのかもしれないと思う。

仲間たちのうちの何人かは、ローザニアの将来を語る青年達の集いが、しだいに宰相や政府を批判する地下出版物を発行する組織へ変わっていったことに怖気づいていた。

だれよりも熱心に批判を口にしていたやつほど、自分の立場を気にしている。

徒労感でリュミネの思考は、どうしても後ろむきになる。

こいつらはみな、学生崩れや、中産階級出身のインテリばかりだ。言論に訴えて情報を得られない人々に危機感をもってもらおうとは考えても、みずからの手を血に汚してまでして、実力行使をしようとする者はいない。

期待倒れも、いいところだ。

苦労して集めた仲間だったのに。

こいつらは、理想論を唱えていれば、だれかがかわりに行動してくれるとも思っていたのだろうか。

* * * * *

『ポワンの宵の花亭』に正面から入っていったローレリアン王子一行は、まず社交サロン風のつくりになったロビーで足止めされた。

この店は王都でも指折りの高級娯館である。初めてここへ訪れた客は、自分が金回りの良い上客であると証明しなければ、つぎの段階には進ませてもらえないのだ。

こちらへどうぞと案内されたのは窓際のすみの席で、どうやら彼らは服装から、金持ちの平民の息子であるとクラス分けされたようだった。

部屋の中央で優雅に奏でられている音楽を聞きながら、シムスが言う。

「うーん。楽団からも遠いし、女の子もよってこない。近衛士官の制服を着てこの手の店に來ると、もう少し上席に案内してもらえますがねえ。近衛隊には、けっこう大貴族の子弟がゴロゴロいたりしますから」

ぼそりと、アレンが答える。

「軍服をくだらない目的に使うな」

「やだなあ、隊長は。野暮はまなこと、言わないでくださいよ」

周囲を観察していたローレリアンが、変装用の眼鏡を外しながら、うなずいた。

「なかなか、わかりやすいシステムになっているようじゃないか。明らかに貴族らしい派手なりの客には、すぐに接客係の案内がつく。」

会社の経営者や羽振りの良い商売人風の年配の男には、とりあえず酌女がついて、しばらく酒や会話でもてなしたあと、格付けが決まって、ご案内だ。

では、われわれ若造には？」

「ここのシステムを実体験してみたいところですが、今夜は時間がないですから、はしよりましょう」

真面目な顔になったシムスは椅子から立ちあがり、すぐそばを通り抜けていこうとした男の召使に声をかけた。

まるで宮廷に仕える従僕のような衣装を着た召使は、尊大な態度で立ち止まった。

なにか飲み物でも欲しいのかね、若いの、といったところ。

しかし、シムスから小さなカードを一枚受け取ったとたんに、召

使の顔色が変わる。

その顔色の变化を楽しんでいるシムスは、わざと怒ったような声で言った。

「いますぐ支配人なり店主なり、ある程度権限がある人物を、ここへ呼んでくるように」

「はい、ただいま！」

シムスから命じられた召使は、その場からかけだし、わずか数分で立派な身なりの初老の男をつれてもどってきた。『ポワンの宵の花亭』の主である。

主は震えあがっていた。シムスが召使にわたした小さなカードには、王家の紋章が刻印されていたのだ。

そのカードを見て、急いでかけつけてきたら、どうだろう。

窓際の椅子では、一人の青年が優雅な様子でくつろいでいた。

その椅子の左右には、服装こそ普通の裕福な平民と同じようなものを身に着けているが、いかにも軍人ですといった雰囲気、冷たくて無表情な顔をした男が二人立っている。

店主のおびえは、ますますひどくなった。

青年は、淡い金色の髪と水色の瞳の持ち主だったのだ。

現在の王家で、その容姿をもっている青年といえば、一人しかい

ない。

店主が目の前にかしこまると、青年はあでやかに笑う。

なんと鮮烈な笑顔であろうかと、店主は思った。

この方が、わがローザニア王国の未来をになうと噂される、ローザニア王子殿下なのだ。

「こつ、このような場所へ、たつとき御方の、おみ、おみ足をお運びいただき……」

震える声で店主が拝謁はいえつをたまわった感謝の口上を述べようとすると、王子はそつと人差し指を唇の前にたてた。

「わたしは、ここに来たことを、だれにも知られたくないのです。察していただけますね？」

店主は平身低頭である。

「は、はい！　もちろんでございます！」

「こちらに、わたしの大切な友人が来ているということなので、つれ帰りたいと思ひましてね」

「ご友人さまですか」

「ええ、すみれ色の瞳の、若いご婦人です」

恐れおののく店主の頭のなかで、ぴかりと、ひらめきの光がまた

たいた。

聖職者のくせに女性とダンスに興じる浅はかな男だとして、ローレリアン王子を非難する意図で書かれた反政府宣伝パンフレットの『踊る神官』は、いまでは王都の庶民のあいだで大流行中の読み物だった。王族の生活の様子など想像することすらできない街の住民にとって、王子と侯爵家の姫君の恋物語は、じつに楽しい読み物であったのだ。

「あつ、ああ　　っ！　　はいつ、おいでになられておられます！」

王子はすこし、こまったように笑った。

「彼女はとても楽しい友人なのですが、ときどき周囲を驚かせるような行動にでる人で。」

「今夜も、こちらへいらっしやるとうかがい、いよいよ直接、危ないことはしてくださるなど、お願いするつもりになったのです。」

彼女のもとへ、案内していただけですか」

「もちろんでございます。お望みは、なんなりとつけたまわります」

店主はかしこまりつつも、御苦勞はお察しいたしますよといった態度になった。

それを見ると、心おだやかならぬローレリアン王子である。

おそらく店主の頭の中では、『ポワンの宵の花亭』にモナが初めて訪れた日の騒ぎが、鮮やかに去来きょらいしているのだろう。それがどんな騒ぎだったかについての詳細をローレリアンはまったく知らないのだが、だいたい想像できてしまうあたりが、恐ろしいのである。

椅子から立ちあがり、王子は店主の耳元でささやいた。

「ありがとう。」

お礼に、ひとつだけ、よいことを教えてあげましょう。

今夜はもう、店にお客を入れるのは、おやめなさい。適当な言い訳をして、帰っていたただける方には、帰っていただくのもよろしいでしょう。

それが難しければ、一階にはお客を入れないことです。

あなたは今日、お金をもらって、ある人の質問に答えましたね。

その結果が、もうすぐここへ、やってきますから」

主の声は、派手に裏返った。

「く、来るのですか！ それも、今夜!？」

王子は胸元で、聖なる印字を切って見せる。

「あなたが王宮へもたらした情報は、さる方を、たいそう怒らせてしまったのですよ。」

しかし、わたしは聖職者ですので。

そのような騒ぎに無関係な人が巻き込まれるのを見るのは忍びない。

わたしは、わたしの良心に従って、あなたに忠告するのです。

それをどう受け止めるかについては、あなたにお任せいたします」

「感謝申し上げます！ 感謝申し上げますとも！」

やはり王子殿下は噂に名高いとおり、わたくしたち国の民を、慈愛をもって導いて下さるお方なのでございますね！

かつて、わたくしどものような、世間から卑しいと見下される職

につく人間へ、あわれみをかけてくださる高貴なお方など、いらしたでしょうか！

「真実、感謝申し上げます！」

感極まった『ポワンの宵の花亭』の主はひざまずき、王子の上着のすそを手にとって口づけた。

かたわらに立つシムスが、冷え切った声で言う。

「お許しなく殿下に触れてはならん！」

もう一人の護衛官『王子殿下の影』は、もっと冷たい。

シムスの声におびえてあとずさり、上目づかいで王子の様子をうかがった主は、腰を抜かしそうになった。

王子の背後に立つ近衛士官の手には、すでに短銃がにぎられていたのだ。その武器の先端は、まっすぐ主にむけられていた。

「アレン。ぶっそうなものを見せびらかすな」

不快をあらわにする王子に、アレンは淡々と答える。

「これが、俺の役目です。王子殿下の身に危険がおよびそうになれば、相手がだれであろうと問答無用で撃ちます」

「その心意気は、ありがたいと思うがね。
見てごらん。」

ほかの人たちを、驚かせてしまっているではないか」

王子がばやくそばから、あちこちで悲鳴やら、ガラスが割れる音やらが聞こえてくる。

浮世の憂さを晴らしにきた高級娼館で、銃を持った人間に出会えば、だれだって驚くだろう。気の弱い者は、早々に出口を求めて逃げ出そうとしている。

シムスがつぶやく。

「今夜の摘発は、失敗になりますかね？」

アレンは鼻で笑った。

「嗜虐趣味をもつリンフェンダウルに、手柄を立てさせてやることはない。」

今夜の摘発が失敗したところで、殿下の高名に傷はつかん。殿下は武力行使に巻き込まれそうな下々の者に、同情をよせられただけなのだからな」

ローレリアン王子は、唇の端をゆがめた。

「わたしがリンフェンダウルの邪魔をしたと、宣伝してどうする。」

おまえ、覚悟しておけよ。

あとで、たっぷり説教だ」

「ご随意に。」

そもそも殿下がこの店の主に警告なさった段階で、かくしごとは不可能な状態になったのだと、反論してさしあげますよ。

こっそりモナさまをここから連れ出すだけにしてあげば、あとでとがめられても、モナさまを迎えに行ったのは王子ではないと、とぼけることもできたのに。

喧嘩上等です。

受けて立ちましょう」

上司の言うことは正しいと、副官のシムスがうなずいている。

それを見て、やや分が悪くなったなと思った王子は、とぼけにかかった。

「まあ、このあたりで、目指す目的は同じでも、宰相とわたしでは基本的な考え方がちがうのだと、表明しておくのも悪くはなからう。それが、自分の失敗を発端として、やむなく動いた偶発的な行為の結果として生まれたものだというところは、気に入らないがね」

「たく、殿下は、あいかわらず理屈っぽい。

さあ、早いところお転婆姫てんぱぎさんさんを捕まえて、とつとつ、ここから退散しましょう」

王子と護衛官たちの会話を聞いて、『ポワンの宵の花亭』の主は床にへたりこんだまま、目を白黒させている。

思わず苦笑いした王子は、主に言った。

「すまないね。

王子と呼ばれるわたしだって、しょせんは、ただの人間なのだよ。側近の者は、よい喧嘩相手だし、失敗すれば叱られもする。

だから、わたしのようなものに、ひざまずいたりしてはいけない。最大級の敬意は、本当に尊敬できる人と出会うときまで、あなたの心の中にしまっておきなさい」

そのころ、モナと王都一の美女とつたわれる高級娼婦のフィオーラは、重い沈黙を返上して、ふたたび楽しい会話を始めていた。

「わたしには苦しんでいる花街の女の人たち全員を救うほどの力とはとてもないけれど、年季があけたあと春を売る生活から離れたいと思っている女性何人かにだけなら、手を貸してあげることができるかもしれないわ」と切り出したモナは、フィオーラに冷たいクリームを売りにするカフェの女店主を、何人が募りたいという話をしたのである。

「『ポワンの宵の花亭』おおだな くらいの大店に勤めた経験がある女性なら、読み書きも計算もできるし、社会経験も豊富だし、男の嫉妬のかわし方も心得ているしね」

そこまで話して、モナは顔をしかめる。

「女の商売が繁盛するとねえ、必ずとっていいほど、同業者の男から嫉妬を買うのよ。」

仕事がらみの男の嫉妬つて、とつても醜いわ。

わたし、夜道や人気のない場所で、乱暴されそうになったこともあるのよ。一発殴れば、女はひるむとも思っただんじやないの？

もちろん、返り討ちにしてやったけど」

フィオーラは大喜びで笑った。

「さすがは、モナだわ。相手の男性がどんな目にあつたか、眼に浮かぶようよ」

「あら、ちょっと刃物をつきつけて、出るころへ出ようじゃないのって、脅しつけたただけだよ。」

それでねえ、その手の男の人って、どいつもこいつも逃げるときに、お約束みたいに『覚えてるよ！』って言うのよねえ」

「ちょっと、モナ。」

どいつもこいつもって、そんなに何度も、危ない目にあっているの？」

声を立てて笑っていたモナは、しまったとあわてて、口をおさえた。

あきれたファイオーラが、モナをたしなめる。

「あなたは、あなたに護衛をつけるお兄様や、あなたの行動があまりに突飛だからと心配なさる王子殿下を、うるさがっていらっしやるけれど。」

でも、めんどくさいという理由で、侯爵家の護衛をまいてしまったりするあなたにも、問題はあると思うわ。

もつすこし、御自分の立場を自覚なさらないと。

あなたは国家の要職に就かれていますヴィダリア侯爵様のご令嬢で、王子殿下の妃候補とされるお姫様なのでしょう？

いままで、あなたに狼藉ろうじやくを働いた男たちが、お父様の政敵や、あなたを王子殿下の妃候補から追い落としたい人がよこした刺客でなかったのは、単に幸運だったからではなくて？

そういう人たちは物陰から、あなたを銃で撃つたりするのよ？」

だってと、モナはふくれる。

「銃で狙われたら、護衛がいつしよにいたって、意味がないでしょ。むしろ、わたしを逃がそうとして、死ぬ人が出たりするから。そういうの、嫌なのよ!」

「まさか、そういう目にあったことが、すでにあるというの?」

黙りこんだモナは、ソファアの上で身を固くして、床をにらんでいる。

「ああ、モナ。ごめんなさいね。

あなたの気持ちも考えずに、さも、わかったようなことを言ったりして」

ソファアへ席をうつして、フィオーラはかたくななモナの身体を自分のほうへ抱きよせて思った。

このお姫さまは、自分が思っているほど、世間知らずではないのかもしれないと。

何度もまばたきをして、目じりにたまった涙をこぼすまいとしているモナは、きつと過去に体験した出来事を思い出しているのだろう。

逃れられないしがらみに絡み取られて、娼婦からになるしかなかった自分を、かなり不幸だとフィオーラは思っていたけれど。

本当は、生きることが辛い人間なんか、一人もいないのかも
しれない。

そつとフィオーラが滑らかな黒髪をなでいたら、モナの身体の

こわばりは、すこしずつ解けていった。

暗がりを見つめていたモナが、悲しげにつぶやく。

「ねえ、フィオーラ。」

どうして人は、争わずにはいられないのかしらね？

家族を愛するのと同じ気持ちで、隣人を愛せるようになればいいのに。

そう思うと、わたしは、家の中でじつとしていることができないの。

わたしのような立場の女は、家の中でおとなしくしておくべきなのかもしれない。

そのほうが、周囲の人には、迷惑をかけずにすむもの。

でも、わたしは知っているのよ。

プレブナンの下町には、助けを必要としている人が、いっぱいいるの。

その人たちを、すこしだけでも助けてあげる方法があるのも知っている。

それに、わたしは侯爵家のお姫さまで、ある程度お金も動かせるし、いろいろな知識もあるわ。

その力を使えば、普通の人にはできないことが、できるのも知っている。

だから……、ね。

知っているのに、何もしないでいることは、わたしにはできないの

なんて素直で、可愛らしい人なのだろう……！

フィオーラは腕の中のお姫さまを、強く抱きしめた。

きつと彼女は、心から彼女を思いやる大人たちから、愛と導きをたっぷり受け取って育った人なのだ。

彼女の家族や友人が、苦笑しながら彼女を見守る気持ちは、わかっただよな気がする。

そしてモナは、その人たちから自分が受け取ったものを、また誰かに渡さずにはいられないのだろう。

そうやって愛情の絆をつないでいけば、人はみんな幸せになれるのに、愚かな人間は、争うばかり。

かすかに空気が動き、娼婦の部屋の枕辺を照らす、ほの暗い明かりがゆらぐ。

フィオーラは顔をあげた。

扉の外に、複数の人の足音が聞こえた。

その足音は、フィオーラの部屋の前で止まる。

「フィオーラ。わたしだよ。

ちよつと、ドアを開けてもかまわないかね」

『ポワンの宵の花亭』の主が、ドアのむこうから低い声でたずねてきた。

娼婦の部屋は、いつでも他人の閨房だ。店の主は、それを心得ているから、来客中の娼婦の部屋へ入るときには、とても気を使っている。

モナがフィオーラの腕の中から身をはなす。

彼女の横顔には軽い緊張があつた。

左手は、いつでもスカートをたくし上げられる位置へ移動する。

街へ出るときモナのスカートの下には、いつも細身の剣がかくされている。

その秘密を、フィオーラは知っていた。

目で、モナに「いいかしら？」とたずねてから、フィオーラはドアの外にむかつて言う。

「どうぞ、お入りになって」

「では、入るよ」

開いたドアのむこうから足早に室内へ入ってきたのは、店の主ではなく背の高い軍人だった。彼の服装は裕福な階級の平民のものだったが、一目で軍人だとわかるほど、彼の行動そのものには警戒心が満ちていたのだ。

「アレン！」

モナが見知った青年の名を呼ぶ。

ひととおり室内の検分をすませてから、青年は、にやりと笑った。

「こんばんは、モナさま」

そして、部屋の外へ呼びかける。

「どうぞ、殿下」

呼びかけに応じて室内へ入ってきた人は、不満そうな顔を青年士官にむけた。

「いちいち、大げさだ」

青年士官は、しれっと答えた。

「検分もしていない袋小路めいた場所へ殿下をおつれする勇氣は、俺にはありません。」

「これをするなどお命じになるならば、もう殿下のお供はお断りです」

「いまさら、つまらない労力を使う気はないさ。どうせ何を命じたところで、おまえは、わたしの言うことになど、したがいはしないんだ」

「俺の忠誠心を信じていただけないと、心外ですね」

フィオーラはソファアの上で固まってしまった。

殿下と呼ばれた若い男は、淡い金色の髪と水色の瞳の持ち主だった。すこし憂いをふくんだ表情を宿した彼の顔は怖いくらいに整っており、姿勢のよい立ち姿には威厳が満ちている。

そういう男の噂を、フィオーラは嫌になるほど、モナから聞かされていたのだ。

恐れおののいて固まってしまったフィオーラのとなりで、モナは勢いよく立ちあがった。

「ちょっと、どうということなの!？」

王子殿下が、こんなところに現れるなんて、ありえないわ! アレン。あなた、どうしてリアンを止めないのよ!」

つめよられた青年士官は、天を仰ぐ。神々よ、どうぞ、あわれな王子を助けてやってくださいと。

案の定、モナはアレンのそばから離れ、つぎはローレリアン王子へと迫っていく。

すみれ色の瞳がきらきら輝いて、怒ったモナの横顔は、やけにきれいなあと、アレンは思った。王宮からここへ直行してきた彼女は、娘らしくて綺麗な形に髪を結っていたし、化粧もしていた。もうおたがいに、子供ではないのだ。

両の足で床をしつかりとふみしめ、モナは人差し指で王子の胸を突いた。

「だいたい、あなたの横暴が、ことの発端なのよ?」

王子の権力でわたしの行動をしばらくとするから、わたしは反発

するんだわ！

わたしだって、自分の立場くらい自覚してるの！

必要な情報を集めたり、お友達との仕事の打ち合わせをすませれば、しばらくはおとなしくしているつもりだったわよ！

なのに、どうして

「黙って、モナ」

自分の胸に突きつけられたモナの手を、王子は強く握りしめた。

「きみは、本当に自分の立場を自覚しているのか？

なぜ、王子のわたしが、ここへきみを迎えに来たと思っている？

今夜、ここには宰相の命令を受けて、憲兵隊総監リンフエンダウル男爵が率いる一軍がおしよせる。きみがもたらした情報のおかげで、革命派の集会が今夜もあると、発覚したからね。

そんな場所に、きみの兄上や、わたしの腹心の部下を、単独で来させるわけにはいかないだろう。

もし、現場の乱戦に、彼らが巻き込まれてみる。

場合によっては、ヴィダリア侯爵の政敵に攻撃の口実を与えるかもしれないし、わたしはわたしで、腹心の部下を失う。

きみの父上は内務省の長官で、わたしに政治の中枢の動向を逐一ちくいち知らせてくれる最大の協力者の一人だ。

わたしをこの国の最高権力者にしたくない連中は、きみの父上を追い落とすチャンスも、虎視眈々こしたんたんと狙っている。

きみは、そういう立場にいる女性なんだ。

きみの存在は、すでに国の未来にかかわる存在なんだよ。

名門侯爵家の姫君として生まれ育つとは、そういうことなんだ。

だから、護衛を街中へ置き去りにしたり、一人で危険な場所へ出入りしたりしないでくれ。

きみの身におよぶ危険は、きみだけの問題ではすまない」

最初の勢いはどこへやらで、モナはローレリアンに手を握られたまま、うなだれた。

「ごめんなさい。

わたし……、かっとなつて、そこまで深くは考えてなかった……。わたしの行動が、国の未来に、かわるなんて……。」

アレンがローレリアンをたしなめる。

「その言いぐさは、公平ではないな。

リアンはここへ冷静な判断力に定評があるリドリー・ブロンフ卿を派遣しようとしたけれど、宰相とやりあって、しくじったんですよ。その後始末を、しなくちゃならなくなったわけで。

無関係な人間が銃撃戦に巻き込まれるなんて、悲劇は避けたいでしょう？

それに、リアンに行動を起こさせたのは、まちがいなくモナさまなんだ。

モナさまがここにいなけりゃ、リアンは行動を起こさなかった。

なにしろ、こいつは王子殿下ですからね。

なにもなさないうちに自分が死んだら、ローザニア王国のお先は真っ暗だつて判断する程度の、自制心は持ち合わせてます」

硬直が解けたフィオーラは、ソファアの上で優雅に身体をしならせて、嫣然と微笑んだ。

「つまり、殿下の自制心は、モナさまのために、吹き飛んだというわけですね？」

アレンも笑って答えた。

「そのとおりですよ。」

俺はモナさまに感謝しますけどね。

殿下はきつと、ここに来なければ、無関係な人を銃撃戦に巻き込んだのは自分だとして、もんもんと悩むに決まってるんです。

こいつは陰気になると、際限がなくて。

そばに仕えている俺たちは、たまりませんよ」

「アレン、おまえ」

怒ったローレリアンが文句を言おうと身構えた瞬間、階下でなにかが壊れる大きな音がした。その音のあとに、大勢の足音と男たちの怒声が響き渡る。

「はじまってしまったか！」

「そのようですね」

シムスが廊下にいた『ポワンの宵の花亭』の主を部屋の中へおしこみながら言う。

「自分が扉の前に立ちます」

「そうしてくれ。」

ここは下手に出歩かないほうがいい。まさかリンフェンダウルの部下も、出会う人間すべてを、無差別に撃つたりはしないだろう。

わたしといっしょにいる限り、この部屋の中の人間は安全であるはずだ」

「そうであるといいんですがね」

それだけ返し、シムスは部屋のドアを閉じた。

すでに階下では、何発か発砲の音がしている。

腋の下のホルダーから、銃を抜き取って点検をする。ポケットの弾薬ケースから紙薬莢と雷管もいくつか取出し、いつでも手にとれる状態にして、シムスはぼやいた。

「リンフェンダウルが乗り込んでくる前に退散しなかったけれど、やっぱり世の中つーのは、そんなに甘くはなかったな。

がんばれ、俺。

王国の未来は、なにがなんでも、守らなくちゃなんねーんだからな」

一階の娼婦の部屋で、酒を飲みながら仲間とつぎの反政府思想の宣伝パンフレットの内容について打ち合わせをしていた男たちは、破壊音と女の悲鳴を聞いて、いつせいに立ちあがった。

「なんの音だ、あれは！」

仲間の内で、もっとも気の小さい男がドアに駆けつける。

ドアを開けると、その男はなりふりかまわず廊下へ飛び出していた。

「兵隊だっ！」と、絶叫しながら。

その声に、複数の銃声と悲鳴がかぶる。

ジャン・リュミネと仲間たちは、緊迫した顔を見あわせた。

このタイミングで仲間が撃たれるということは、警告しても逃げる者には発砲してよいという、許可が出ているのだろう。

複数の男の物である重い足音が、入り乱れて近づいてくるのが聞こえる。

ドアの外には、すでに退路はない。廊下に飛び出して自分だけ逃げようとした仲間は、兵隊を直に見ているのだ。

リュミネは中庭に通じている窓を開け放った。

窓から身を乗り出して上を見あげると、建物にぐるりと囲まれた狭い夜空には月が輝いていた。

緊張のせいで頭に血がのぼるのか、首筋や耳のまわりが焼けるように熱い。

必死に、考える。

「逃げられる可能性が残っているのはどこだ？」

おそらく、建物の出口は、すでにすべて封鎖されているはずだ。

中庭に飛び出す。

仲間もあとに続く。

早くも兵士がリジイの部屋に！

高圧的な声が、リュミネ達の足を止めようと叫ぶ。

「動くな！」

動くなと言われて従えるものか。

中庭を駆けぬけて、むかい側の部屋の窓ガラスを割った。

中に腕を差しこんで鍵を開ける。

リュミネが真つ暗な部屋に飛びこんだ瞬間、銃声がいくつもとどろき、背後でガラスが砕けて飛び散った。同時に、甲高い仲間の悲鳴が聞こえる。

撃たれたのか！？

迷ってなどいられない。

動かなければ、自分も標的になってしまう。

やつらが容赦なく発砲してくれたのは、リュミネにとっては、幸運なのかもしれない。先から弾を込めなければならぬ銃は、一回発砲してしまうと、次の弾を装てんしおわるまでの一、二分間は、飛び道具として役に立たなくなってしまう。

鉄砲のことなど、どうでもいい。

こんなことを考えている暇はない。

逃げ場所として一番ふさわしいのはどこだ。

兵隊の足音が！

弾が出ない銃でも、先には銃剣という凶器がついている。追いつかれたら、自分の命はない。

自分は新聞記者だ。ペンは剣よりも強しというが、これだけの暴力の前では、無力もはなはだしい。持っている武器はペーパーナイフ一本。護身の道具としては、お話にならないお粗末さだ。

暗がりですぐ家具につまづきながら、ドアへたどり着いた。

同じ部屋に転がりこんだ仲間たちを呼ぶ。

先に廊下へ仲間を出して、自分も後に続くこととする。

われながら、ずるいやつだ。

こちら側の廊下に兵隊がいるかどうかの確認役を、仲間には押しつけたのだから。

廊下に出たリュミネは足をとめた。

後ろをふかえりもせずに逃げ散る仲間の背中を、ながめながら。

ひどく息があがっていて、胸が内側から心臓に連打されている。考えをまとめるためには、自分にむかって言い聞かせなければならなかった。

「落ち着け。落ち着くんだ、ジャン」

すぐに中庭にいる兵士たちがこちらへ来ないのは、銃に弾をこめているからだろ。連中も、こちらが武装している可能性を、ちゃんと考えて行動しているのだ。

残りの持ち時間は、一分か、二分。

どうする？

両手をあげて、投降するか？

そうすれば、問答無用の射殺はまぬがれる。

だが、待て。

下つ端の仲間は抵抗しなにかぎり、牢屋行きくらいですむ。だが、自分、ジャン・リュミネは、知識人が愛読することで有名なサンエツト紙の論説委員だ。追及は政治犯としてだけでは終わらないだろう。

宰相なら、これを機会に反政府活動家のつながりを明らかにして、あらゆる反政府運動を根絶やしにしようとする。リュミネを拷問して自白を強要するくらい、当然やるにちがいない。

今、捕まるわけにはいかない。

自分は、まだ目的をなにも果たしていない。

大昔の手柄で先祖が得た地位をそのまま世襲して、何の疑問ももたずに民衆から搾取した金で遊び暮らす貴族たちを、リュミネは絶対に許さないと誓った。

何代にもわたって積み重ねられた、やつらの膨大な罪には、天誅が下って当然だ。

そうでなければ、貴族の理不尽のせいで死んでいった者達がかばれない。

何人もの人の顔が、リュミネの脳裏に現れては消える。

両親、弟や妹、無邪気な友達、生真面目で働き者の村の人々……。

20年前の飢饉の年、リュミネが生まれ育った村は全滅した。飢えて痩せ細った人々のあいだに、たちの悪い流行り病が出たのだ。

ひとたまりもなかった。

みんなが死んだ。

その時、領主は王都にいた。

領主は何もしなかった。

ただ、自分たちが流行り病にかからないように、遠くへ逃げただけだ。

怒りで、眼の奥が赤く燃える。

自分は、まだ死ぬわけにはいかないのだ！

「ジャン！」

女の声が自分を呼ぶ。

娼館の帳場のほうから女が走ってくる。

リュミネ達に自分の部屋を集会場として提供していた娼婦のリジイだ。

『ポワンの宵の花亭』ほどの店にいる娼婦なら、それなりに教養

があつて、社会事情にも通じているはずだ。しかし、この女は頭が弱いんじゃないかと、リュミネは思っていた。

何度か情を通じあい、娼婦らしからぬ控えめな性格が気に入って、「おまえみたいな女と田舎で所帯を持ちたい」と言ってみたところ、リジイはなんでもリュミネの言いなりになるようになった。

金が必要だとなれば、いくらでも貢いでくるし、「集会が終わるまでは邪魔だから、どこかへ消えている」と命じれば、文句も言わずに部屋からでていく。

おかげで彼女は借金まみれになった。

しかし、リュミネは一度だつて、彼女に借金を強要したことはない。ただ、情事のあとで請求書や督促の手紙を見ながら、ため息をついただけだ。

リジイはリュミネのもとへたどりつくと、彼の手を取り、強くひっぱった。

「兵隊は憲兵よ。」

抵抗するものは誰であろうと射殺しろという命令が出てるみたい。台所の下働きの男が、窓から逃げようとして撃たれたわ。

やつらは、花街の住人のことを虫けらだと思ってる。

ここにいたら、あなたは殺されてしまう!」

「どこか、逃げ道はないか」

リジイは、悲鳴や足音におびえながら、あたりを見まわした。

「外は無理。一階の道路に面したすべての部屋の窓には、娼婦の逃亡を防ぐための鉄格子がついているし」

しばらく考えたリジイは、なにかを思いついたらしく、リュミネの手をひいて走りだした。

ひとつの扉の前にたどりつく。

そのなかは薄暗くて狭い使用人専用の階段だった。

リュミネの手をひきながら階段を登り、リジイは言う。

「仲のいい売れっ子の部屋に、かくまってもらおうわ。」

彼女の広い部屋なら、身をかくす場所が、いくらでもあるの。夜が明けるまで、そこにかくれていきましょう」

因縁のはじまり … 6

階段を駆けあがって、リュミネと娼婦は廊下を走った。

冷静になるために、リュミネは何度も深い呼吸をする。

階下の激しい物音を聞くと、胸を乱打している心臓が縮みあがる。

今、自分はいったい、どういう顔をしているのだろう。

勇気の神オリス、俺に、力を！

回廊をまわって、店の表側に面した立派な廊下へ入る。

そこでリュミネは、また緊張した。

リジイが走っていく先には、一人の若い男が立っている。彼の服装は街でよく見かける裕福な平民のそれだが、体格が立派だし、眼光が鋭すぎる。きな臭い男だ。

王子殿下がおいでになる部屋の扉の前に立ち、あたりを警戒していたシムスは驚いた。

階下では大変な騒ぎが起こっており、その騒ぎが、いつ二階へ波及するかと思っていたのだが。

一組の男女が、自分のほうにむかって、走ってくる。

女は、まちががなく、この店の娼婦だ。派手な赤い衣装を着て、素朴な顔に似合わない濃い化粧をしている。

彼女が手をひいているのは、情夫といったところか。一夜限りの客を、娼婦がかばったりはしないだろうから。

さえない容姿の男だ。

年のころは三十をすこし超えたくらい。

やせぎすで、疲れた顔をしている。

情夫というよりは、ヒモかな。

すがりついてくる情けない男の行動を、愛情があるからだと勘違いする娼婦はよくいる。

だれだって、愛が欲しいんだよなあ。だから俺も公休日には、歓楽街へ来ちゃうわけでき。

しかし、いまの俺は、お仕事なんだぜ。

心の中でぶつぶつやったあと、シムスは女の前に立ちふさがった。

「すまんが、ここから先には通せない」

女は取り乱した様子で、シムスにすがりついた。

「どうして？」

わたしは仲良しのフィオーラに用があるのよ！

下では憲兵が、銃を撃ちまくっているのよ！

彼女のところへ行かせて！

わたしのいい人を、憲兵に殺させたりしないで！」

ドアの外の騒ぎを耳にして、ローレリアン王子とアレンは顔を見あわせた。

ローレリアンはソファーにすわるフィオーラにたずねる。

「ドアの外の女性は誰ですか」

「リジイです。さきほどお話しした、部屋を恋人に貸している娘です」

「では、いつしよにいるのは、ジャン・リュミネか！」

これは思わぬ僥倖うらいただと、王子は笑う。ジャン・リュミネが、みずから我が手中へ落ちてきたのだ。

彼は、この場で殺してしまうには惜しい情報源だ。

しかし、せつかく捕まえてもリンフェンダウルの手に渡ったのは、拷問されて、まともな情報など取れなくなるだろう。

これも、神々のお導きか。

王子がこのような場所へ出てくるなど愚かな行動だと恥じていたが、ジャン・リュミネを自分の手で捕縛とらできるといふのならば、恥をかく程度の気まずさなど、帳消しにできる。

「アレン、いいか？」

王子に絶対の忠誠を誓う青年士官は冷静な顔でうなずくと、ドアのわきに立ち、懐ふしから短銃を取り出して構えた。

これはこまった、どうしたものかと、女に取りすがられながらシムスが思った瞬間、彼が守っていた扉は内側から開いた。

扉を開いたのは、部屋の主のフィオーラである。

「リジイ、大きな声で騒がないで。早く部屋の中へ、お入りなさい」
すでに泣きはじめていたリジイは、わななきながら言う。

「あ……、ありがとう、フィオーラ。もう、わたし、どうしたらいいの？」

「泣くのは、あとにして。さあ、早く」

国一番の美女ともてはやされる美しい娼婦は白い衣装に身を包んでおり、唇には優しい微笑を浮かべていた。その姿は廊下のほの暗い明かりに照らされて、心やさしき天女とはかくやという様子である。

天女に誘われ、リジイは開かれた扉をくぐる。そのあとに続いて、ジャン・リュミネも部屋の中へ入った。

その瞬間、早鐘の勢いで脈を打っていたリュミネの心臓は凍りついた。

「両手をあげて、ゆっくりと壁際まで下がれ」

ドアのすぐわきの暗がりから、低い男の声がそう命じる。

あたりの空気が冷え冷えとしているのは、まちががなく、この男のせいだ。

銃をまっすぐに構え、リュミネの急所に狙いを定めた男の眼は、薄暗い空間に浮かんで爛々と輝く夜行性の獣の瞳のように見えた。

「ど、どうして!?!」

悲鳴のように叫んだリジイにむかって、フィオーラは答えた。

「娼婦のさびしさにつけこむ卑劣な男を、わたくしが助けると思っているの?」

リジイ、あなた、いい加減に目を覚まさない!」

ゆるゆると自分の手をあげながら、リュミネは考えた。

どうやら俺は、この部屋の主の女に憎まれているらしい。女を食い物にする男だと。俺は一度だって、この女に、何かを求めたことはないというのに。

だが、最後くらいは、悪人らしくしてやってもいいか。なじみの娼婦とも、どうせ今夜限りだ。

勢いよく一步をふみだし、リュミネはリジイの首に腕をかけ、自分のほうへ引き倒した。

拳銃を構えていた男が、一瞬、躊躇する。

なぜ、撃たない？

なぜ、迷う？

おまえは軍人じゃないのか？

いかにもそれっぽい眼光で、俺を射殺しそうな勢いなのに。

リュミネは叫ぶ。

「動くなよ！ それ以上、俺に近よるな！ 近よれば、この女の首を掻き切つてやる！」

ペーパーナイフ一本でも、女を人質にとれば身を守る道具になった。

リュミネは皮肉な笑みを唇の端に浮かべながら、ぐいぐいと部屋の奥へ進んでいった。

廊下から、その様子を見ていた、シムスがわめいた。

「たいちよー！ なにやってるんすか！ らしくもない！」

ドアのわきに立つアレンが怒鳴り返す。

「うるさい！」

殿下の前で、無益な殺生などしてみる！
聖職者の懺悔さんげつてのは、うざいんだぞ！

何日も、何日も、暗い顔で、『神々よ、罪深きわたくしをお許してください』なんて、お祈りされるのは、まっぴらごめんだ！」

「殿下だと？」

バルコニーへ通じる窓へむかおうとしていたリュミネは、歩みを止めた。

月明かりが差しこむ、その窓辺には、一人の男が立っていた。

彼の髪は淡い金色で、月の光を吸いこんだその髪は、まるで後光のように輝いて彼の整った顔を縁取っている。

「こんばんは、リュミネ殿」

聞き覚えのある声が、リュミネに話しかけてくる。

「おまえは、リアン？」

クレール商会の、無気力な跡取り息子……？

いや、ちがう。おまえは……」

リュミネのもとへ、理解の波が、急激に押し寄せてきた。

金色の髪と水色の瞳。

どうして今まで、気がつかなかったのだろう。

この男は……！

因縁のはじまり … 7 (前書き)

文章のつなぎ目が中途半端であるため、前のお話と始まりの3行がかぶります。

金色の髪と水色の瞳。

どうして今まで、気がつかなかったのだろう。

この男は …… !

自分の愚かさに、無念の思いがわく。

言論をゆさぶる活動を長年つづけてきて、その世界では名の知れた存在となつてから、自分の思考にも奢りおごりや油断による歪ゆがみが生じていたのだ。

もっと澄んだ思考で考えていれば、疑いをもつたはずだ。こんな容姿に生まれついた男が、世界に何人もいるわけがない。

金色の髪、水色の瞳、整った顔立ち。落ち着いた表情、威厳ある態度、聖職者らしい、慈愛に満ちた微笑……… !

「きさま、ローザニアの聖王子、ローレリアンか!」

そう呼びかけたら、王子の表情に影がさした。その影に呼応して、窓の外の月が雲間にかくれ、部屋のなかも薄暗くなる。

まるで王子に備わった魔力を見せられたような気分になり、リュミネは乾いた喉を鳴らした。

低い声で、王子は言った。

「あなたにとつては、悪魔かもしれませんよ。
民衆を煽あおって国家の秩序を乱そうとする者を、わたしは許さない。
人を敵として憎み、策を弄もよぼしておとしいれる背徳者になろうとも、
この国のためなら、わたしはなんでもする。
王子として生きるを決めた時に、わたしは神々と交わした『万人
を愛する』という約束を破棄した。そのために、死後煉獄れんごくへ落ちよ
うとも、けして後悔はしないと誓って」

「ちっ！」

悔しさのあまり、リュミネの口元からは、舌打ちがもれた。

相手が王子と知って気が遠くなったのか、彼の腕の中の娼婦は急に重くなり、いまにも床の上に崩れて倒れそつだ。

ちゃんと立てと、女をゆすりあげた。

なにをうるたえる。

王子だつて、しょせんはただの人間だ。

それに俺は、長年肌をあわせてきた女を殺してしまうほど、ひどい悪人ではない。

おまえだつて、それがわかっていたから、恋人氣取りでいたのだろつに！

女がよろめき、そばの家具にあたる。

いまいまいしいと思ひながら倒れそつな女をもう一度ひきあげた瞬間、ペーパーナイフを握るリュミネの右手の甲に激痛が走つた。

目の前に飛び散ったのは、自分の血だ。生ぬるい液体とともに、ナイフも音をたてて床へ落ちていく。

「アレン！」

鋭い女の声が、青年士官を呼ぶ。

次の瞬間、飛びかかってきた青年士官によって、リュミネは床上にねじ伏せられていた。

床に押さえつけられた顔を横にむけると、視線の先には紺色の女物のドレスのすそと、血が滴る細身の剣があった。

その剣を持つ女は、怒りに震えている。

「あんたって、なんてひどい男なの？」

リジイは、本当に、あんたのことを好きだったのよ?!

あんたのためなら、身を滅ぼしてもいいと思うくらい、愛してたの!」

「ひどいな。この傷じゃ、もう右手ではペンを握れなくなるかもしれない」

完全に、思考停止だ。リュミネは、声もなく笑いながら、自分の右手の心配だけをしていた。

血は流れつづけ、痛みがひどい。

なんて、女だ。一瞬のすきについて、正確に狙った場所へ、剣をくりだしてくるなんて。

おまけにこの女は、ヒステリーもちだ。

「なんなの、この男は！ 笑ってるわよ！ ほんとに、自分のことしか考えてないのね！ その手、切り落としてやればよかった！」

きーきーわめく女を、フィオーラと王子がなだめている。

「落ち着いて、モナ」

「ほら、剣をしまつて」

「だって、リアン！」

後ろ手に縛られて、リュミネは床にすわらせられた。

それで、やっと女の姿が見られるようになる。

すんすん鼻をすすりながら、女は剣についた血をぬぐい、鞘に納めた。貴族の跡取りの少年が持つような、細身の剣だ。柄と鞘の細工がとてもみごとで、由緒あるものであることが、ひと目でわかる。

涙に濡れた眼が、ふたたびリュミネをにらんだ。

なんと印象的な瞳であろうか。

雲が風に流されているのか、窓から差し込む月の光は明るくなったり暗くなったりをくりかえしている。その光が当たるたびに、彼女の紫色の瞳は色味を変えた。

なるほど、この女が、ローレリアン王子との恋仲を噂されている
ヴィダリア侯爵令嬢なのだ。少々変わり者であるとは聞いていたが、
実物は噂以上にすごい。とくに、瞳にあふれる力は圧倒的だ。

生気に満ちた彼女の瞳の力にあてられたのか、リュミネの耳元にも、
現実の喧騒がもどってくる。

銃声はいつのまにか止み、二階の廊下には男たちが走る荒っぽい
音が響き渡っていた。

「くまなく探せ！」

首謀者のジャン・リュミネの死体がない！

外に出ようとしたりした者はみな殺すか、拘束するかしたのだ！

やつはまだ、建物の中にいる！

なんとしても、探し出せ！」

足音にまじる怒鳴り声を聞いて、アレンと呼ばれた青年士官が肩
をすくめた。

「あのドラ声は、リンフェンダウルだ」

たのむから、その短銃を俺にむけるのはやめると、リュミネは思
った。なにかの拍子に、うっかり引き金を引かれたら、たまったも
のではない。

この青年士官にも、まんまとだまされた。

よくよく思い出せば、この青年士官とも街のカフェで会っている。

あの時は、どんくさい田舎者だと思ったが、王子の護衛だったと

は。

とつとつドアの前で、男たちがやり取りを始めた。

「なんだ、おまえは！」

「はっ！ 近衛護衛隊に所属しております、シムスであります！」

「近衛護衛隊だと？ 上官は誰だ？」

「第二王子付き第三小隊長、アレン・デユカレット卿であります！」

「なんだ、なんだ、桂冠騎士殿は夜遊び中だったのか？」

「こんな高級娼館にお出入りとは、たいした御出世ぶりだな。あの小僧、王子のお気に入りでだからといって、いい気になりやがって」

「恐れながら、上官の名誉のために申し上げます。わたくしどもは、任務中であります」

ドアの外のやり取りを聞いて、王子が馬鹿めと、額をおさえる。

「アレンの名誉など、どうでもよからう！」

「こいつの優雅な夜遊びということにしておけば、部屋の内部の改めを、逃れられたかもしれないのに！」

青年士官の眉が、ピクリと動く。

「そりゃどうにも、ひどくないですか」

「ひどくなんか、ないぞ。」

それどころか、おまえにとっては名誉な噂になるぞ。
国一番の剣士アレン・デュカレット卿の夜遊びの相手は、国一番の美女フィオーラだとな」

すこし離れた場所にすわっていた美女が、扇の影で艶やかに微笑む。

「噂ですませなくとも、よろしいですわよ。」

アレンさまなら、いつでもわたくし、大歓迎でお迎えいたします」

モナが、そっぽをむく。男の人たちって、どうしてこうなの、と
いった顔で。

そうこうするうちに、ドアの外のやり取りの風向きが怪しくなってきた。

「あー、ですから、わたくしどもは、任務中にして」

「護衛隊の任務とは、護衛であろう！

誰の護衛をしているというのだ！

とにかく、この娼館は、いまは我が指揮下にある！

すべての部屋は、内部を改める！」

「ですからあー！」

アレンが顔をしかめた。

「あいつには、難しい交渉事はまかせられないな」

「同感だ」

うなずきながら、ローレリアンは傍らのモナに手をさしだした。

「リンフェンダウルが部屋にふみこんでくるとき、きみは顔を見られなければ、それに越したことはない。ちよつと、そのカーテンの影にかくれておいで」

そういった王子は、モナをフィオーラのベッドの上にあがらせて、みごとなビロードで作られた天蓋のカーテンを引いた。

男に手を取られてベッドの上にあがるなど、本来ならば、これ以上なめかしい行為はない。分厚いカーテンで視界をさえぎられたあと、モナは暗がりのなかでうずくまり、赤くなった。

無数の男女が愛の営みをくりかえしてきたのである。娼館のベッドからは、甘い匂いが立ち上ってくる。シーツや羽根布団は、やわらかく彼女の手足にあたった。

結婚などしなくても、愛しい男を籠絡くわうらくする方法はがあると、フィオーラは言った。

それはまさしく、このベッドの上で営まれてきた愛の行為をさすのだらう。

自分が女としてローレリアンを愛し、彼の疲れきった心を慰めようとするならば、やはり男女の愛の行為は無視できない。

たがいを抱きしめあったり、口づけをかわしあったりすると、人は強い慰めや満足を感じられる。その満足を得ると男も女も、二世を誓う契りを求めずにいらなくなるものらしい。その過程は、熱

く、狂おしく、激しいものであるとか。

男の人を怖いと思っていたころには、耳年増の小間使いの少女から聞きかじったその話を信じる気にはなれなかったけれど。

いまなら、理解できる。

好きな人のことを考えると、心がうずくから。

好きなのは、ローレリアンだけなのだ。

他の誰にも、こんな気持ちは持てない。

彼になら、何もかも許して、さらけ出してもいい。

自分の身体を征服する男として、受け入れられる。

暗がりにも身をひそめながら、モナは自分の手で自分を抱きしめた。

息を止めなければならぬほど強く体を拘束すると、眩暈めまいがしそ
うな感覚にとらわれる。

ローレリアンの腕に抱かれる感触を、思い出すのだ。

刺客に殺されそうになったとき。

衆目の前で、王太子に迫られたとき。

その体験は、いつだって極限の状態へ追い込まれているときに限

られていたけれど。

強いローレリアンの腕の力からは、モナへの想いだけが伝わってきた。

それは、怖かったり恥ずかしかったりして、ひどく苦しい瞬間の出来事であったはずなのに、いま思い出すのは、ローレリアンの腕の感触だけだった。

自分がつくづく、普通の貴族のお姫さまではないなと、モナは思った。

好きな男に身も心も征服されたいと妄想するお姫さまなんて、聞いたことがない。

みずからを拘束する腕の力をゆるめたら、ちりっとしたかすかな痛みが首筋に走った。

そこに痛みの原因を作ったのは、フィオーラの口づけだ。

口づけの感触を思い出すと、全身に、ぞくりとくる震えと熱がわく。

この身を焼く熱さのつきには、なにがあるというのだろう。

続きを教えてくれるのが、ローレリアンであればいいのに。

モナは唇をかんだ。

王子の孤独を癒して慰めたいなんて、たいそうなことを、自分は

願っていたけれど。

でも、本当は、自分自身も幸せになりたいのだ。

彼を、抱きしめて。

やるせない思いに身をよじり、深くモナがうなだれた、その時だった。

部屋のドアを蹴破る激しい音が、あたりにとどろいた。

それと同時に、野太い男の蛮声が人の名を呼ぶ。

「きさまは、ジャン・リュミネ！」

「やめろ、リンフェンダウル！」

「殿下、お下がりにください！」

複数の声とともに聞こえたのは銃撃音と、女の悲鳴だ。

そして、乱闘めいた足音と、ガラスが割れる音。

モナは暗がりです息を殺し、身を固くした。いま下手に動けば、それこそローレリアンをこまらせるかもしれない。

カーテンのすき間からは、部屋中に充満しているのだろう硝煙の臭いが、ゆるりと入りこんできていた。

因縁のはじまり … 8 (前書き)

本文中に血が流れる描写があります。苦手な方はご注意ください。

煮え切らない態度で、のらりくらりと言いつきを重ね、部屋の中の人物が誰なのかを明かそうともしないシムスに腹を立て、とうとう憲兵総監リンフェンダウル男爵は『ポワンの宵の花亭』で一番立派な部屋のドアを蹴破った。

蹴破る必要など欠片もなかったのだが、いらだちが最高潮に達していたので、そうせずにはいられなかったのである。

ひさしぶりに、やりたい放題できると大喜びで乗り込んだ『ポワンの宵の花亭』で、リンフェンダウルは盛大な肩透かしを食らったのだ。店に客はほとんどおらず、一階の奥の部屋で呑気に酒を飲んでいた反政府活動家たちからは、抵抗らしい抵抗もなかった。すでにリーダーのジャン・リュミネを除く全員を、逮捕拘束している。半数は死体だったが。

捕り物劇に巻き込まれて死んだ一般人は、店の従業員の二人だけだった。いずれも、盗品売買にかかわっていたり、下っ端の麻薬密売人だったりして、憲兵隊に捕まったらただではすまない人間だったので、逃げようとして撃たれたのだ。

本来ならば、迅速に進んでいる任務遂行の具合を喜ぶべきところなのだが、リンフェンダウルは怒り狂っていた。彼は今夜、この場所で、血沸き肉躍る体験をするはずだったのだ。王都一の高級娼館で、金や権力を持った男たちが閨ねやをあばかれ羞恥にまみれて裸で逃げ惑う姿を嘲笑あはわい、彼は至福の時をすこすはずだった。

それが、なぜ、何も無い！

彼はもともと、あまり機転がきく男ではない。あくまでも宰相の命令に忠実で、汚れ仕事も嫌がらずにやってきたから、いまの地位まで登りつめた男である。

いらだちが最高潮に達していた彼の視界は、極端に狭まっていた。

そのとき、感情にまかせて蹴破ったドアのむこうに、今夜の捕獲目標最重要人物であるジャン・リュミネを発見したのである。見失ったかと焦っていた、彼の獲物だ。

自分勝手な怒りの感情と、ついに見つけたという歓喜の感情がなймаぜになり、リンフェンダウルは迷うことなく、狭窄した視界の中心にむけて手にした銃の引き金を引いた。

もともと、この時代の銃の命中精度は、それほど高くはない。至近距離の相手を撃つときには、銃を腰に構えてまっすぐに撃つと兵士に教えるほどである。そのほうが、あわてて狙いを定めるより、よく的に当たるのだ。とりあえず体のどこかに弾が命中すれば、相手の行動力をそぐことができる。

それに、嗜虐趣味をもつリンフェンダウルがリュミネを撃つた真の目的は、獲物が苦しむ様子を見たいという、純粹な欲望を果たすためである。今夜の捕り物劇が思うような展開にならなかったせいで、欲求不満は溜まりに溜まっている。ジャン・リュミネを捕獲したあかつきには、とことんまでいたぶってやるつもりだったのだ。

リンフェンダウルの凶暴な性格をよく知っていたアレンは、ジャン・リュミネには目もくれず、ローレリアンに飛びついて凶弾の射

線から遠ざけた。

「やめろ、リンフェンダウル！」

「殿下、お下がりにください！」

ふたりが叫ぶと同時に、銃声がとどろき、女が悲鳴をあげる。

悲鳴はフィオーラのもだった。

彼女は目の前の出来事に感情を翻弄ほんろうされて、何度も、何度も、絶叫した。

「どうして！ どうしてなの！ リジイ！ いやああ つ！」

リンフェンダウルの凶弾を浴びたのは、ジャン・リュミネではなく、彼の前に飛び出した情婦のリジイだった。しかも、彼女は血にまみれながら、リンフェンダウルの行く手に立ちふさがる。彼女の腹からは致命傷にふさわしい量の血が噴き出していたが、それでもリンフェンダウルへとむかっていくのだ。

「逃げて……、ジャン。 はやく……！」

「リンのアマー！」

先込め式の銃は、一度撃ってしまつと、次の弾を込めるまでは玩具も同然だ。兵士の銃には白兵戦用の銃剣も取り付けられるが、より実戦むきの剣を持ち歩く士官の銃には、そんなものはない。

リンフェンダウルは迷うことなく銃を投げ捨て、腰の剣帯から剣を抜いた。その剣で、目の前の女に切りつけ、後につづく部下へ命じる。

「なにをしている、早く獲物を撃て！ 逃がすでない！ 殺してしまわん！」

断末魔の叫びとともに血だまりの中に倒れこむ女を飛びのいてよけながら、リンフェンダウルのそばにしたがっていた副官と下士官は、とまどいの声をあげた。

「しかし、総監閣下。あちらの方からのご命令は？」

その隙に、ジャン・リュミネはバルコニーへ突進し、後ろ手に縛られた肩で窓を破って外へと脱出する。

リンフェンダウルは眼を血走らせてわめいた。

「追え！ あいつを、追え！ 殺せ！ 逃がすな！ 殺してしまえ！」

娼婦の血にまみれた剣をふりまわすものだから、あちこちに赤い滴が飛ぶ。

その滴の一滴が、ローレリアン王子の頬を濡らした。

王族の顔に、死人の血を塗りつけたのである。これ以上の不敬があるつか。驚愕のあまり震えながら、リンフェンダウルの副官は上司に取りすがった。

「総監閣下。どうか、お気を静めてください。御前ごぜんでございます」

「御前だと……?!」

正気に返ったリンフェンダウルは、壁際に王子の姿を認めて慄然じつぜんとした。

頬に飛んだ血の滴をぬぐいもせずに、王子はリンフェンダウルのほうへやって来る。その水色の瞳は極寒の地の湖のように冷たく凍りつき、整った顔は彫刻のように動かない。

薄暗がりには、王子の声は朗々と響き渡った。その声はまさに、聖堂の中に響く聖職者の声である。人が犯すおろかな罪を追及する、裁きの声だ。

「すでに拘束されていた者を、なぜ撃つたのだ。リンフェンダウル男爵」

リンフェンダウルは一瞬、言葉をなくした。

月明かりが、王子の顔を半分だけ照らしている。

光の反対側には深い影が落ち、その翳かげりは美しく若い王子を、この世の者とは思えない様子に見せるのだ。

「王子殿下がこちらへお出ましとは存じませず、ご無礼もうしあげ

」

「わたしの問いに答えよ、リンフェンダウル」

ローレリアン王子の前にひざまずき、首を垂れたリンフェンダウルは唇を噛んだ。宰相の権力を後盾に持ち、長年にわたり怖いものは何もないと言い放ってきた彼の前に、とつじょとして現れたのが、この王子である。

そして、ここ最近、憲兵隊への出動要請があると、わざとリンフェンダウルの影響力が強くおよぶ部隊を外して命令を出してくるのも、この王子。

またかと、リンフェンダウルは屈辱の思いを噛みしめる。

おそらく、今夜の出動命令には宰相が絡んでいるため、自分の思惑通りに事を進められなかった王子は、ここへ直接出向いてきたのだろう。聖職者のローレリアン王子は、殺生を極端に嫌うという噂を聞いている。だから、残虐な行為を好むリンフェンダウルは、うとまれるのだ。

リンフェンダウルにしてみれば、聖人めいた王子の態度が歯がゆくてならない。不穏分子は徹底的に排除すべきなのだ。それが、結局は国を守ることにになると、彼は信じている。

だが、王子の態度を苦々しく思っても、リンフェンダウルには、どうすることもできないのだ。時の権力者の座はまもなく、この王子へ移ろうとしている。

その現実には、王子の自信ともなっているのだろう。リンフェンダウルの弁明は、はるかな高みからの叱責で、容赦なく封じられている。

「宰相閣下からのご命令で、やつらは殺してもかまわぬと

」

「被疑者を尋問する機会を、わざわざ逃す命令は、宰相も出してはおらぬはず」

「しかし」

「そのうえ、貴殿はここで、反政府活動とは無関係な者も撃っている」

「その者達は犯罪者で、抵抗したので」

王子は足元の娼婦の遺体を見下ろした。

「では、この女は、何をした」

「ジャン・リュミネを逃がそうと」

「貴殿がいきなり撃たなければ、この女は死なずに済んだし、ジャン・リュミネも逃げられはしなかったはず。そうではないか、リンフェンダウル」

言い逃れはできないと悟り、リンフェンダウルは逆に居直った。自分を今の地位から追い落とそうとするならば、たとえ相手が王子であろうと、一矢報いてやるつもりである。とにかく、少しでも深い傷を負わせてやると、自分勝手な男は牙をむく。

「王子殿下、お言葉ですが。今宵摘発の舞台となる店に、よもや王子殿下がおいでになっていらっしやるとは、誰が想像できませんでしょうか？」

わたくしは、この店に入るとき、決死の覚悟でございました。

軍人の決死の覚悟など、聖職者であらせられる殿下には、お分かりいただけないのかもしれないかもしれませんが。

決死の覚悟とは、生きるか死ぬかの、極限の覚悟でございます。その覚悟で飛びこんだ場所で、敵に出会えば立ちむかう。

当然とは、思われませぬか」

「一軍の指揮をとる者に、わたしが求めるのは、勇氣と冷静な判断である。

わたしの警告によって客がほとんどいなくなっていたこの店で、貴殿はどのような抵抗にあったというのか。判断の根拠を示せ」

「わたくしの判断を狂わせた原因は、まさしく殿下の驚くべき行動でございます。

大勢の人の中から短い時間で、わたくしは反政府活動家どもを逃がすことなく、探し出さねばならないと考えておりました。ですから、抵抗するものは撃てと、部下に命じたのです。

しかし、殿下はこの店の客の大半を、あらかじめ逃がしておしまいいになった。肩透かしをくった我々は、あわててしまったのでございますよ」

「そなたの詭弁は、もう聞きたくない」

「さて、わたくしの言が詭弁かどうかは、どなたがご判断くださるのか。

そのお裁きの場では、わたくしにも言うべきことがあると申し上げておきましょう。

王子殿下は、国王陛下の勅命による憲兵隊の行動を、作戦開始前に外部へもらしてしまわれたのですからな！」

それだけ言い放つと、リンフェンダウルは部下を引き連れて部屋

から出ていった。

「外の見張りは、どうしたのだ！ 街の警備兵にも連絡を取れ！
まだ反政府活動家のネズミは、そのへんにいるはずだ！ 何として
も、やつを捕らえよ！」

開け放たれたドアのむこうで、リンフェンダウルの怒声が遠ざか
っていく。

ローレリアンは深く、息をついだ。

王子としての気迫を求められる場面に遭遇すると、いまだに緊張
で胸がつぶれそうになる。この感覚には永遠に慣れることはないだ
ろうと思う、ローレリアンである。

あらためて部屋の中を見まわせば、陰鬱な光景が、そこにはあった。

床のうえには、おびただしい血と娼婦の遺体。

娼婦は赤い衣装をまもっていたし、この部屋の装飾には赤が多用されていたから、眼の奥に赤い色が焼きついてしまいそうだ。

娼婦の遺体のそばではフィオーラがうずくまるようにして泣いており、『ポワンの宵の花亭』の主が、「おまえのせいではないよ」と、彼女を慰めている。

「殿下、お顔の汚れを」

「すまない」

アレンがさしだした水に濡らした手布を受け取り、頬の血をぬぐう。

布にこびりついた赤錆色の血を見ても、ローレリアンの感情はあまり動かなかった。

王子と呼ばれるようになってから三年の間に、ローレリアンは何度も、目の前で人が血を流す光景を見てきた。その多くは、ローレリアンを殺そうとする刺客の血である。師弟二代にわたる『王子殿下の影』は、ローレリアンに害をなそうとする者を、一度たりとも

手の届く場所まで近づけたことはなかった。

しかし、慣れとは恐ろしいものだと思う。目の前で人が死んでも、涙ひとつ湧いてこないのだから。

なるべく早く、この場からは離れたほうがいいだろう。

そう判断して足をふみだすと、靴の先に割れて飛び散ったガラスが当たった。

苦い思いで、ローレリアンは無残に破られた窓を見た。

ジャン・リュミネが体を張って飛びこんだせいで、優雅な形の窓の格子は壊れ、床には無数のガラスのかけらが散らばっている。その欠片はどれも、月の光を反射して美しく輝いていた。

破れた窓からは、夏の夜風が吹き込んでくる。

その風は、遠い呼子の笛の音や、男たちの叫び声までも、ここへ運んでくるのだ。

まだ、あの男は捕まっていない。

下手をすると、取り逃がしてしまうことになるだろう。

ローレリアンの胸中は、ざわつく。

激しい勢いで後ろへさがれと壁際まで押しやられたとき、たくましい親友の護衛隊長の肩越しに、ローレリアンは確かに見たのだ。

バルコニーから飛び降りるすんぜん、ジャン・リュミネはふりかえり、ローレリアンをにらみつけた。

必ず、もう一度、おまえの前に立ってやる！

月の光に照らされた彼の顔は、鋭く研ぎ澄まされた覚悟で、うちからはじけそうに見えた。

ローレリアンは、ジャン・リュミネが書く新聞の論説の愛読者だった。それどころか、地下出版される反政府思想の宣伝文ですら、どれも素晴らしいと思っていた。

彼が書くの文章には、いつも国の未来を憂える深淵な思想と、貧しい人々への愛がある。革命によって現王朝を倒し、一刻も早く共和政治を実現しようという過激な思想の持ち主でさえなければ、自分の側近の一人として迎え入れたいくらいだった。

だから、ローレリアンはときおり、リュミネの様子をつかがいにフィールミンティア街の『ふくろう亭』まで出かけたりもしていたのだ。

おそらく、ジャン・リュミネが目指す理想とローレリアンが目指す理想は同じで、そこにいたるまでの道筋が、ちがうだけなのだろうと思う。

けれども今夜、おたがいの道は、決して一つにまとまることはないのだとわかった。

革命をなそうとするジャン・リュミネは敵だ。敵として、憎まなければならぬ。

わたし、ローレリアン王子は、誰の血であるつと血が流れることは望まない。

神々との約束を破るのは、本当に必要な時だけ。そして、その罪は、すべておのれが背負っていく覚悟だ。

なんびとたりも、わたしと罪を分かつことはできない。

この恐るべき罪は、いまの時代に王子として生まれた者だけが、背負う定めのものなのだから。

壊れた窓から視線を外し、ローレリアンは豪華な部屋の一角を占める立派な天蓋つきのベッドへ近づいていった。

閉じられたカーテンに手をかけながら、内部に話しかける。

「よく最後まで我慢してくれたね」

あの騒ぎの最中にモナが物陰にかくれたまま自制してくれたのは、かなりありがたかった。これ以上の混乱など、考えたくもなかったから。

やはり彼女は賢い女性だ。ほんのひとこと助言しただけで、すべての状況を飲み込んで、最良の判断ができる。

そう思いながら、ローレリアンはカーテンを開き、息をのんだ。

重いビロードのカーテンにおおわれた空間は暗かった。

その暗がりの中へたりこんで、モナは宙を見つめ、安心していった。

いつも生き生きとした光に満ちているすみれ色の瞳からは輝きが失せ、ほほにはいく筋もの涙が流れている。

「モナ、どうして、きみが泣く？」

戸惑いもあらわにローレリアンがたずねると、モナはやっと我にかえり、ひいと、大きくしゃくりあげた。

また彼女のほほに、新しい涙が伝い落ちていく。

「みんな、わたしのせいだわ。リンフェンダウル男爵がここへ来たのも、リジイが死んじゃったのも、みんな、思いつきで行動する、わたしのせい！」

わたしは、なんて馬鹿で、浅はかなのかしら。

もっといっぱい、考えなくちゃいけなかったのに！

わたしの行動の結果で、なにが起こるかを、考えなくちゃいけなかったのに！」

ローレリアンはモナの側にすわり、自分の肩へモナの頭を抱きよせた。

「きみのせいではないよ。リンフェンダウルが今夜の指揮官になったのは、わたしのしくじりが原因だ。そこからすべての出来事は、連綿とつながってきているのだから」

まだ涙がおさまらないフィオーラも、モナの側に腰かけて、ローレリアンに同意する。後悔に打ちひしがれているモナの、背中をな

でながら。

「泣かないで、モナ。

きつと、リジイは満足していると思うの。

彼女は愛する人を守りたかったのよ。たとえ、だまされていたとしても、リジイは、あの男を愛したかったの。真実の恋に、わたくしたち娼婦は心の底から憧れているのよ。

借金のかたに、ひどい環境の売春宿へ売られてしまっくらいなら、愛に殉^{じゆん}じて死ぬ^{しゆん}ほうが幸せ。

そう思ったからリジイは、命をかけて、あの男を逃がしたの」

「でも、こんなので……、ひどい。男の人を好きになった結末が、こんなふうになるなんて……」

黙ってローレリアンは、泣きじゃくるモナを抱きしめた。

男と女が愛し合って、また何か新しい幸せを見いだせたら、その男女には素晴らしい未来が開けるのだらう。けれども現実には、美しいばかりではない。世界は誰にでも、優しいわけではないのだ。運命に翻弄^{ほんろう}されて幸せをつかみそこねる人間も、世間には大勢いる。

げんに自分だって、普通の幸せとは縁遠い場所にいるではないかと、ローレリアンは思う。

愛しくてならない女性は、彼に抱きしめられながら泣いている。

彼女がこんなに苦しい思いをするのは、わたしとかかわりをもっているせいだ。わたしは近い者を、おのれの宿命に巻きこんでいく。それが、王子として生きるといふことなのだ。

ローレリアンの胸に顔をうずめたまま、モナがつぶやいた。

「リアン、わたし、一生懸命……、考える。もっと、ちゃんと、いるんなことを考えるから……」

「いいんだ、モナ。きみは、そのままで」

モナにはいつまでも、明るく元気で笑顔の似合う人でいてほしいかった。

やはり、彼女からはしばらく、離れていよう。

すっかり女らしくなった柔らかいモナの身体を抱きしめると、ローレリアンの決意は、いよいよ固くなった。

彼女の身体は、娘らしく、華奢な身体だった。剣をふりまわすお転婆姫であるために、要所にはしなやかな筋肉もついているが、骨は細いし、肌はどこまでもなめらかだ。こんなに美しくて心優しい彼女が、涙するところなど、もう二度と見たくない。

これで最後と思うと、彼女を抱きしめる腕にも力がこもる。

彼女が愛しくてならない。

どうしてこんなに、愛しいのか。

そう思えば思うほど、ローレリアンの引きちぎられるような心の痛みはひどくなった。

その日の夜更け、モナは王子を迎えに現場へ駆けつけたアストウール・ハウエル卿につきそわれて、ヴィダリア侯爵邸へ帰り着いた。

目を泣きはらし、足元がふらつくほど疲れはてている様子の彼女を見て、父侯爵や乳母のシャフレ夫人は、あえてその日のうちに何があつたのかを問いつめようとはしなかった。

『ポワンの宵の花亭』のそとでローレリアン王子を待ち受けていたアストウールは、見なれない黒い軍服を着ており、同じ制服で身を固めた部下を数名つれていた。どの男も、まだ若くて精悍せいかんな顔つきをしている、立派な青年だった。

王子の無事を確かめるなり、アストウールは深く首を垂れながら言った。

「申し訳ございません、我が王子。かような時に、お役に立ちませ
ず」

ローレリアンは、王子の顔で答えた。

「あせるな、アストウール。いくらあなたが優秀な男であっても、
わずか数か月で新設の部隊を実働に耐える状態にできるとは、だれ
も思っていない」

隻眼せきがんの騎士は、かしこまった。

「つぎの機会には、必ずや」

「たよりにしている。たのむぞ」

そんなやりとりをアストウールと交わしたあと、ローレリアンは護衛の青年士官たちをひき連れて街へ消えていった。

市民の姿に身をやつした彼の護衛は、いつのまにか小集団と呼べる人数に増えていた。

みなローレリアンを『我が王子』としたい、命運を共にする誓いを立てている男達であるらしい。彼らを束ねる桂冠騎士のアレンが王子とともに街へ下ったと聞きつけ、いずれも遅れを取るまいと、自身の判断でここへ駆けつけてきたのだ。

「きつと、俺はこのあと、なぜ自分たちにも声をかけてくれなかったのだと連中から詰め寄られて、あげくに、袋だたきにされますよ」と言いながら、アレンは笑っていた。

自室にもどり、化粧を落として身を清め、夜着に着替えたモナは、月明かりが差し込む窓辺にすわって考えた。

ローレリアンは王国の未来を担う王子で、その責務を立派にはたそうと日々努力している人だ。周囲の人間も、そんなローレリアンに期待を寄せて、盛り立てようとしている。それをモナは、今日初めて真近で目撃した。

国境の街で神学生として生活していたころのローレリアンは、うちに何か熱いものを秘めてはいても、ごく普通の青年だった。嬉しければ笑ったし、憂鬱な時は暗い顔。自分が情けないとか言いなが

ら、泣いたりもしていた。

けれど今は、そういう普通の顔を見せられる時があるのだろうか。彼の感情を受け止めてくれる人が、いるのだろうか。

モナを侯爵邸まで送り届けてくれたアストウールは、道行きの中で、現在自分は王子直属の親衛部隊を立ち上げる準備に追われていると話してくれた。今日のように微妙な成り行きになりそうな任務を安心して任せられる、えりすぐりの者を集めた精鋭部隊だ。

泣き疲れた身体を冷たい窓ガラスにおしつけて、こもった熱をなだめようと試みる。モナのため息は、いまだに覚めない興奮の余韻を帯びているのだ。今日は本当に、いろいろなことが起こった日だった。

なかでも情けないのは、『ポワンの宵の花亭』でローレリアンに助けてもらったこと。彼があのお店へ駆けつけてくれなければ、もっとたくさん死者が出たにちがいないと思う。

ローレリアンからは、「侯爵家の姫君としての自分の立場を自覚して行動するように」と、叱られてしまった。

まったく、そのとおり。

もう自分だって、無邪気な子供ではない。もっと大人になって、物事の裏の裏まで考えられるようにならなければ。

リンフェンダウルがフィオーラの部屋に押し入ってきたとき、自分は呑気に、恋の行方のことを考えていた。結婚さえ望まなければ、ローレリアンの心をとらえることができるだろうか。

ローレリアンが王子の責務に心を砕き、一人でも多くの人を助けたいと望んで行動しているときに、自分は馬鹿げたことを考えていたのだ。色ボケといってもいいくらいに、馬鹿げたことを。

それがとても、恥ずかしかった。

いつのまにか、ローレリアンが遠い人になってしまったように思える。

彼は大国の王子で、自分は取るに足らない馬鹿な小娘。

せめて、彼の足をひっぱるような失敗だけは、しないようにしなくては。

周囲から王子の妃最有力候補だなどと噂されて、自分はすこし、いい気になっていたのかもしれない。このままの自分では、ローレリアンを影から支える女友達でさえいられないという予感がある。

彼を真実愛するならば、彼をまつだけの受け身の女でいてはだめなのだ。

彼の真摯な瞳は、つねに前を、広大な世界を見ている。

そんな彼を愛そうとするなら、必要な時に、こちらから手をさしだせる女にならなくては。

彼の背中をつねに見つめて、その背中を抱きしめる。そして、そのままあなたは前を見ていていいのだと、わたしはわたしで、ちゃんとあなたの後についていくから、ふりむく必要はないのだと、言

い切れるだけの強さをもたなければ。

そうは思うけれど、その先を、どうすればいいのかわからないのだ。

よく考えて行動しなければ、また失敗をしそうだと。

けれども、考えれば考えるほど、先へふみだす勇氣はしぼんでいく。

するとまたモナノすみれ色の瞳は、新しい涙で濡れていくのだ。た。

8月の初旬、王都プレブナンの歓楽街で憲兵隊が銃撃をもって反政府活動の摘発行動を行った翌日、ローザニア王国第二王子ローレリアンは、王子と呼ばれるようになってから初めての朝寝坊をした。

早朝から何度も、「お目覚めになられましたら、すぐさま国王陛下の御前へおいでいただきたいと、王子殿下にお伝えください」との使者をもらっていたローレリアン王子付きの侍従は、夏空へ高く登っていく太陽を恨めしい気分でながめていた。

王子の宮では、とつくの昔に出勤してきた事務官達が忙しそうに動きまわっている。

そのなかから王子の筆頭秘書官カール・メルケンの姿を見つけだした侍従は、一縷の望みをかけて、彼にすがりついた。

「メルケン殿。無理なお願いであるのは重々承知なのだが、王子殿下へ、そろそろ寢所からお出ましいただくように、たのんでみてはもらえまいか」

書類の束を小脇に抱えたメルケンは、肩をすくめて答えた。

「今日は特別、殿下に急ぎで決裁していただかなければならない案件はないので。べつに、たまの朝寝坊くらい、よろしいのでは？
日頃、ローレリアン殿下は働きすぎですから」

侍従は苦り切っていた。

「お疲れでお休みだというのならば、何も問題はないのです。ただ、本日の朝寝坊の原因が、昨夜の夜遊びのせいであるところか……。その件について、国王陛下が、いたくお怒りであること……」

「ほう、夜遊びですか」

「護衛隊の若い者達をひきつれて、歓楽街の居酒屋で深夜まで飲酒されたご様子なのです。小姓のラッティが、殿下は二日酔いですと、侍医を呼びに行きました」

はははと、首席秘書官は声を立てて笑った。

「結構なことではないか。まだ殿下はお若い。憂さ晴らしも必要なのでしょう。いままでがそもそも、優等生すぎたのです。やっと、のびのびと、やりたいことをなさるようになったというのならば、喜ばしいことですよ」

「そんな、のんきな……」

王子殿下のお怒りを買うことなく寝所へ入れる次なる人物を求めて、侍従はメルケン首席秘書官から離れていく。

その後ろ姿を見送りながら、メルケンはやれやれと肩をすくめた。

昨夜、王子が憲兵隊の行動の邪魔をしたことは、どうやら王宮内では公になっていないらしい。

それはそうだろうと、メルケンは思う。

王子がやったことは、勅命を発した国王への背信行為にまちがいない。

しかし、たいした反撃もないというのに街中で銃を乱射し、あげくのはてに王子がすでにとらえていた革命派の大物を逃がしてしまったのは、リンフェンダウルの大失態である。ことがすべて公になれば、作戦指揮官にリンフェンダウル男爵を指名した宰相の名誉まで、けがされてしまうだろう。

現実問題として、王子の行為は多くの人の命を救っている。命を救われただけでなく、名誉を守ってもらった者も大勢いるはずなのだ。なにしろ『ポワンの宵の花亭』は国一番の高級娼館だ。昨夜の客の中には、有力貴族の身内だの、大きな会社の経営者だのといった、名士も多かったことだろう。その者達は、ひそかに王子へ感謝しているはずだ。

しかし、そのあとに酒盛りとは……。

書類を抱えたまま、メルケンは近衛護衛隊の待機所へ行ってみた。

すると、そこには今朝方王子殿下の身边警護当番任務が明けたはずのアレン・デュカレット卿と、彼の部下である第三小隊の面々が、まだ居座っていた。

それがどうにも、おかしい光景だった。

本日から当番任務に就く第一小隊の隊員に遠慮しているのだろう。彼らは部屋の隅に固まっていた。

その様子が、屍累々といった状態なのである。みな机に突っ伏していたり、椅子にへたりこんでいたりで、ひどい者は部屋の隅にうずくまり、壁に頭をおしつけて唸っている。

眉をひそめたメルケンは、アレンにたずねた。

「アレン隊長、ひよとしてこいつらは、二日酔いなのか？」

一人涼しい顔で報告書の作成をしていたアレンは、書類から顔をあげて答えた。

「まったく、情けない連中です。殿下が酒盛りを御所望だったので、勤務中の飲酒を大目に見たところ、この通りのていたらくで。始末書を書き終わるまで帰ってはならんと申し渡したところ、全員撃沈です」

「殿下が酒盛りを御所望されたのか？」

「はあ。いろいろと、晴らしたい憂さも、おありのようで。

シムスが陽気な男で助かりました。店選びから、料理と酒の手配、はては酔った仲間のかした不始末の清算から宴会の盛り上げまで、すべてやつ任せですよ」

「で、アレン隊長は始終冷静に、しらふですごしたわけか？」

「喉をうるおす程度には、飲みましたよ。しかし、俺まで酔ってしまっわけにはいかないでしょう。殿下は俺がいるから、『憂さを晴らしに行くぞ！ わたしのおごりだ、全員ついてこい！』とか、言えただけで」

「甘えてもらえて、嬉しそうだな」

「首席秘書官こそ、嬉しそうじゃないですか。シムスから、いろいろ聞きましたよ。『まわりの者に甘えろ』と殿下に忠告したのは俺だぞと、顔に書いてある」

にやにや笑いながら、メルケンは言う。

「知っているか？ 王子殿下も本日は二日酔いだそうだ。さきほどラッティ坊やが、侍医を呼びに行った」

めったに笑うことがない『氷鉄のアレン』も、盛大な笑顔をみせる。

「それはよかった。たまには殿下にも、羽目を外すことが必要なんですよ。」

昨夜も楽しそうでしたよ。レヴァ川に鋼鉄の橋を架けるなんて、夢みたいな話に夢中になっていたし。

意外と酒にも強いので驚きました。かなり飲んだはずなのに、最後まで理路整然としていましたからね。初代聖王パルシバル陛下も酒豪だったということですから、ローレリアンは容姿だけでなく、体質も聖王陛下から受け継いでいるのかもしれない」

「聖王パルシバル陛下の再来か……」

メルケンは遠い目で宙を見る。

「いよいよこれから、ローレリアンさまは、新しい伝説を築こうとなさるのだな」

手にしたペンを置き、アレンも深く考えこむ。

「それを成し遂げなければ、この国を救うことはできません。ローレリアンには、頑張ってもらえないのですよ。」

そのころ『黒の宮』の最奥に位置する寢所のベッドの上では、側近から聖王の再来とたとえられ敬意を払われていたはずの王子殿下が、幼子のような態度ですんでいた。

ただの青年としては、3年越しの恋をあきらめようとする苦しさ
と、尊敬すらしていた文筆家を敵としなければならなくなった悔し
さ。王子としては、その敵を取り逃がしたことに対する怒り。そし
て、聖職者としては、娼館などという破廉恥な場所^{はれんち}でリンフェンダ
ウルのような男とやりあわなければならなくなった恥ずかしさと、
無用な死者を出した哀しみ。

昨夜のローレリアンは、あまりにも多くの感情を抱えて、爆発寸
前だったのだ。このままでは悪感情の渦に巻き込まれて、気が変に
なりそうだとさえ思った。酒でも飲まなければ、やっていられな
かったのである。

護衛隊の連中との酒盛りは楽しかった。大勢での飲食を心から楽
しんだのは、王子の地位に返り咲いてからは初めてだ。王子にとっ
て他人との会食とは、すなわち義務に他ならなかったから。

ところが、朝になってみれば、周囲の状況は何も変わっていない。

仕事は山積み。国王からは昨夜の件で呼び出しの伝言。おまけに
自分はひとりだという孤独感は、もっとひどくなっている。昨夜、
護衛官たちが王子の酒につきあってくれたのは、それが彼らの仕事
だからである。王宮の奥の寢所でひとり目覚めると、その実感がひ
しひしと迫ってくる。

親友のアレンでさえ、昨夜は仕事中の態度だった。

部下と王子が杯を酌み交わしながらにぎやかにしゃべっているそばで、アレンは酔わない程度に酒を舐めながら、静かにすわっていた。そして、ときどき目が合うと、ふっと笑うのだ。

その笑い方が、気に入らなかった。

あとのことは俺にまかせて、おもいきり羽目を外せよ。

そうアレンの目は語っていた。

甘えていいよと言われると、ローレリアンは戸惑うのだ。

素直に感謝すればいいだけなのに、罪悪感にかられる。そして、罪悪感を感じる自分が嫌になり、さらに卑屈な気分におちいつてしまっ。

その卑屈な気分をひきずって、今朝の目覚めは最悪だった。

頭が痛いし、鳩尾みぞおちもむかつく。

だから頭から布団をかぶって、わめきまくる。

「わたしは頭が痛いんだ！ 今日のは気がすむまで寝る！ わたしにだって、仕事をさぼりたい日くらいはあるんだ！ 何度呼びにきたって、絶対にベッドからはでないからな！」

最悪の機嫌の王子殿下を朝からあつかいあぐねている小姓のラッ

ティは、ため息をつきながら答えた。

「はいはい、好きなだけお休みになってください。ですが、リアンさま。二日酔いのお薬は飲んだほうがいいですよ。ふて寝しているだけでは、一日中、お辛いままでしょう」

心優しい少年は、王子のために侍医から処方された薬を持ってきてくれたのだ。

もともと生真面目なローレリアンは、忠実なラッティ少年の世話焼きに弱い。ここで薬なんかいらないと突っぱねれば、「殿下、そんなにお辛いのですか？ お辛いのは、お体だけではないのでしょうか？ ぼくに何かできることはないですか？ いったい昨夜は、なにがあったのですか？ 急なおでかけだったし、やっとお戻りになられたと思えば、お酒をすごされたご様子ですし、御衣裳に血がついていたりするし！」とやられたあげくに、うわーんと、泣かれてしまう。

ラッティの涙には、いつも半分くらいは嘘泣きが入っているのだが、のこりの半分は本気である。やはり、泣かれるのは嫌だ。

しぶしぶ布団からでて半身を起こし、ローレリアンはラッティがさしだす銀の盆から、優雅な金彩をほどこしたティーカップを受け取った。なかには、異様な臭気の湯気を放つ、どろりとした液体が入っている。

「ラッティ、これはなんだ？」

「ええとですね。ホソバオケラ、オモダカ、カワラヨモギ、ケイヒ、あとは……、ええと、なんかのキノコ、それに、……忘れました。」

変なものが入っていないと思いますよ。宮廷医が処方したお薬ですし、御毒見も済んでいますから」

「なるほど」

ローレリアンはかつて医者の手も務めたことがある青年だ。せんじ薬の内容を聞いて、顔をしかめてしまう。

しかし、ベッドから身体を半分起こしてしまえば、これ以上寝ているわけにもいかないという気持ちになる。昨夜の行動の後始末として、国王のもとへ出向かなければならないことは承知しているのだ。

覚悟を決めてティーカップを口に運んだら、予想したとおりの味だった。ひどく苦いくせに後味には微妙な甘さとえぐみが残り、鼻には青臭さと清涼な匂いが混じって届く。そのうえ、我慢して飲み下せば、微妙な喉越のどこしのせいでむせてしまう。

「ひどい味だ」

けほけほとむせると、目に涙がにじんだ。しかし、二日酔いに効きそうではある。

しばらく抱えた膝に額を押しつけてじっとしていたら、胃のあたりが、じんわりと温まった。

なんとか動けそうだ。

「ラッティ、黒の聖衣を準備してくれ。丈が長いものを」

「はい、わかりました」

ラッティは、すこし緊張したおももちで寢室に隣接している衣装室へむかった。

ローレリアン王子は聖職者としても高い地位にあるので、普段から黒い法衣を愛用している。この法衣の上着は詰襟つめえりで、丈は足の付け根がすっかりかくれる程度。細身のズボンと対になっており、とても動きやすく、実用的な聖職者の普段着にあたる衣装である。

ラッティが準備を命じられた黒の聖衣は、典礼服と呼ばれる司式の衣装につぐ格式の衣装にあたる。上着の丈は足首まであり、腕は肘のあたりまで肩掛けにおおわれている。全体が重い布で作られているので、この衣装をまとった人の歩みは自然にゆるやかとなつて、神々しい雰囲気醸し出されるしくみだ。

この衣装には、やはり特別感があるので、ローレリアンも王宮内の聖堂へ出向くときにだけ着用している。安息日の礼拝には、王子も三位の神官として祈りの唱和に参加しているのだ。その姿には独特の華があり、いまでは王子を目当てに、安息日の宮廷礼拝に人が集まるほどだった。

* *

* *

しばらくのち、ラッティに手伝ってもらって身なりを整えおわったローレリアンは、すっかり高潔な雰囲気をもつ王子殿下へともどっていた。

彼が長い黒衣のすそをさばきながら、ゆったりとした足どりで私室からでていくと、廊下にはすでに本日の護衛役である第一小隊長のイグナーツ・ボルン卿と第三小隊長のアレン・デユカレット卿が控えていた。

イグナーツはローレリアン王子付き近衛護衛隊に3人いる小隊長のなかで、もつとも先任にあたる士官である。現在はアストウール・ハウエル卿が他部署へ転任してから空席になっている第二王子付き護衛隊長の代理も兼任している。外見はきんげんじつちやく謹厳実直な中年士官で、実際の性格も真面目そのもの。その働きぶりに人目を引く華やかさはないが、大過なく集団をまとめていく管理能力には定評がある。

当初、周囲はイグナーツをアストウールの後任にすえようとしたが、管理職経験が長い彼は、その名誉ある役目を引き受けようとはしなかった。

自分には『王子殿下の影』という異名を得ているアストウールが持つようなカリスマ性がないことを、イグナーツはよく知っていたのである。そして、これから王国の舵取り役として政界へ漕ぎ出していくローレリアン王子に必要なのは、王子の特別さをより華々しく引き立てるだけの、輝く個性をもつ側近であることも十分心得ていた。

「その役目にふさわしい者が現れるまでの代理ならば、つつしん

で勤めさせていただきます」と、アストウールが去ったあとの部隊管理業務を引き受け、イグナーツは誠実に任務を果たしている。彼もまたローレリアンを『我が王子』と呼び、王国を共に立て直していく誓いを立てた男なのだ。みずからの出世より、なにが王子にとってもっとも大切かを、一番の判断の基準としている。

そのイグナーツは苦笑しながら、ローレリアン王子とアレン・デユカレット卿の顔を見くらべた。

「どちらも昨夜の騒ぎのことなど素知らぬ顔で澄ましているのだ。

「アレンは今日から王宮勤務明けの休暇だろう。宿舎へ帰らなかったのか？」

王子からたずねられて、アレンは飄々《ひょうひょう》と答えた。

「俺はしがない宮仕えの身ですよ？ 昨夜の騒ぎのあと、そう簡単に帰れるわけがないでしょう。殿下が国王陛下のもとへ出向いてお叱りを受けるところを、しっかりと見届けさせていただきますよ。そのあと、昨夜の報告書を近衛護衛隊総隊長のところへ持って行って、俺も説教されてきます。クビになったり、左遷されたりしないように、祈っていてください」

隊長代理のイグナーツは、失笑をかくそうともしなかった。肩を震わせながら、彼は言う。

「報告書は読ませてもらいました。昨夜は殿下もデユカレット卿も、たいそうご活躍でしたな。いや、わたしもリンフェンダウルがやりこめられるところを、ぜひ見たかった。

総隊長殿には、わたしからも一報を入れておきました。リンフェ

ンダウルの横暴ぶりを好ましいと思っ
ている者はおりませんから、
総隊長殿も鷹揚おつようなものでしたよ。
デュカレット卿の処遇については、
4日ほどの営倉入りでいかがかと上
申しておきましたので」

「営倉ですか」と、アレンは顔をしかめた。

「飯がまずそうですねえ。しかも、
期間が4日というところが、山
盛りうさんくさい。きさまは休み
なく、せつせと働けというわけ
ですね。ボルン卿も、お人が悪い」

イグナーツは笑ってうなずいた。
王族の警護につく近衛護衛隊は、
小隊ごとに二泊の休暇、二泊の訓練、
二泊の王宮勤務をくりかえす
体制となっている。つまり、今日
から四晩を営倉ですごせば、アレ
ンは出てきてただちに王宮勤務へ
復帰しなければならぬことになる。
る。

「どうせデュカレット卿は、休暇の
ときも殿下のお側にいるのでは
ないか。いつそ黒の宮のなかに部
屋をたまわってはどうか？ 練兵
場での訓練のとき以外は、いつも
黒の宮にいるのだから、住んで
いるのも同然だろう」

国一番の剣士の証である桂冠騎士
の称号を持つ若者は笑った。

「俺だけ特別というわけにはいき
ません。仕事は俺の趣味も同然で
すから、当直室住まいも、べつに
苦になりませんしね」

「では、早く管理者の仕事を覚
えて『特別』になることだ。士官
学校生活をつねに首席で押し通
してきた貴兄は、管理業務に関
しても優秀だ。そう時間は、か
かるまい」

アレンは肩をすくめて苦笑した。わたしが隊長代理を預かっているのは、おまえが一人前になるのを待っているからだぞと、イグナーツは言いたいのである。

認めてもらうのは嬉しいが、十八の歳でそれだけの責任を背負えと言われても、正直、こまってしまう。それに、自分が周囲から、いずれは第二王子付き護衛隊の隊長になる男だと思ってもらえるのは、個人的にローレリアンと友人関係にあるからだろう。

ほんの一度、御前試合に勝って国一番の剣士の称号を得た程度では、とうてい手柄とは言えない。これから自分は、名ではなく、実を積み上げていかなければならない。そう思うとアレンは、ゆっくり休む気になれないのだ。

腹心の者たちの会話を聞いて口元に笑みを浮かべた王子は、重い衣のすそを華麗にさばき、ふたたび歩きだす。

「さて、わたしはこれから国王陛下の説教を聞きに行く」

「はい、お供いたします」

うやうやしく一礼し、イグナーツとアレンも王子のあとへしたがう。

次の廊下の曲がり角からは、イグナーツの部下も数名合流した。ローレリアン王子は、行列を作ったの移動を嫌う。護衛隊士達は、そのあたりも心得ており、いつもさりげない距離をとって彼らの王子を守るのだ。

こうして守られているのは、歯がゆくもあり、ありがたくもある。

自分がこれからなそうとしていることは、とてもひとりの力ではなしとげられない大仕事なのだ。自分は王子として生まれたから、その大仕事の旗頭となったけれど、本当は大勢の人の意志を代表する存在であるだけなのだろうとローレリアンは思っている。

そうでなければならぬとも、思うのだ。

自分は、この国の独裁者になりたいわけではない。

ただ、少しでも多くの人を、できるだけ良い方向に導ければと願う。

神々に仕える人の証である聖衣をまとうと、ローレリアンの胸には切ない望みがあふれかえる。それを静かな表情の下に押し隠すと、あふれる望みには熱がこもり、炎となって彼の胸を焦がすのだった。

国王の説教を聞きに行くと言いながら、ローレリアン王子がたどり着いた場所は王宮の中にある聖堂だった。

ローザニア王国は神々に祝福された聖王パルシバルによって開かれた国とされているので、王家と宗教のかかわりは、かなり深い。王族が王都プレブナン大神殿の大神官長に就任する例も多く、現在の大神官長も前国王の従兄にあたる老人であった。

王宮の中の聖堂は、いわばプレブナン大神殿の分院にあたる建物で、ここでは国家的な宗教行事とともに、日常の礼拝も行われる。もちろん、王族も安息日の礼拝には、必ず出席しなければならないことになっている。

先触れを走らせておいたので、ローレリアンは聖堂の入り口で、ここの管理責任者であるマーリン神官長に出迎えられた。先方も黒の聖衣をまとっている。腰の帯の色は薄桃色で、神官位は二位。つまり、神官としては王子の上役にあたる人物である。

しかし、神官長からしてみれば、目の前の相手は王子殿下。総白髪の前髪を深々と垂れて、あいさつの口上をのべる。

「ようこそおいで下さいました、王子殿下。祈りの場に貴きお方のおみ足をたびたびお運びいただき、神々もさぞや、ご満足なされておられることごさいますよう。聖なる祈りの場を預かる我々も、嬉しくありません。世間が騒がしくなると、人々は万物に宿る神々の存在のありがたさを忘れがちになりますゆえ」

ローレリアンは腹の少し上あたりで両手を組み、聖職者の作法で返礼をかえした。

「そのお言葉は、わたしへのお叱りと受け止めておきましょう。近頃のわたしは、祈るよりも、俗世のしがらみのあしらいにばかり忙しい」

「殿下のご身分と責務を考えれば、当然のことでございます。折に触れ、こうしてこちらへおみ足をお運びくださるだけで、十分、神々はお喜びであると存じます。下々への立派な範となっておりますゆえ。」

ところで、本日はどのようなご用むきでございましょうか」

「神官長には煩わしいことこのうえないであろうが、昨夜、わたしは殺生の場に立ち会いました。亡くなった者のほとんどは政治犯とされる者や小さな罪を犯した者達だったが、わたしには彼らの罪が死に値するとは思えない。これも、わたしの力不足ゆえ。せめて死者のために祈りたいと思い、こちらへまいりました」

「死せる者は世に満ちる霊の力と融合し、世界を生かす存在となりましょう。御心を、あまりお痛めになりませぬよう。どうぞ、奥へお進みください。殿下の祈りを妨げる者は誰もおりません。心ゆくまで、神々との対話をなさいますように」

神官長に導かれて、ローレリアンと護衛騎士二人は祭壇の前へ進んだ。

王宮の聖堂の成り立ちは古く、伽藍がらんの装飾のすべては煤と埃で黒ずんでいた。細い窓から差し込む光は弱々しい。数百年前の建物はすべてが石でできているため、壁が厚く、大きな窓は作れなかった

のだ。天井のドームも石組みだけで作りあげられており、その石の重みを支える力学的な曲線で構成された、独特の美を放っている。

正面の祭壇には、絶えることなく火を灯す無数の蠟燭ろうそくの明かり。

祈祷台きとうだいに両の手を乗せ、王子は身をかがめる。

深い懺悔ざんげの礼が神々にささげられ、口元で祈りが唱えられる。

懺悔の祈りは、神々との対話。ほかの誰にも、聞かせるものではない。

いったいローレリアンは、なにを神々に告白しているのか。

祈祷台からやや後ろの位置で跪拜きはいの姿勢を取りながら、アレンは切ない思いで王子の横顔を見守った。

この国を守るためなら、神々との約束だって破棄する。死後煉獄れんじやくへ落ちようとも、決して後悔はしない。

その誓いは、誰よりも優しいこの男を、苦しめているにちがいないのだ。

しかし、危うい状況にあるローザニアを、救える男は彼しかない。

どうか、神々よ。万物に宿り、すべての命を生かす、霊力である神々よ。

我が王子、ローレリアンに多大なるご加護を。

神々の守りがなければ、この男の心は死んでしまいます！

アレンがそう思った瞬間だった。

聖堂の入り口の扉が開き、あたりに人の気配が押し寄せてくる。

ローレリアンの祈りを妨げる者は、誰もいないのではなかったのか？

アレンの側で同じように跪拝していたイグナーツが小声で言う。

「国王陛下です。宰相閣下も随行すいこうされています」

ローレリアンの閉じられていた目が開き、横顔にも生気がもどった。

「祈りの場にふみこむとは、陛下もずいぶんとご立腹のようだ。いつまで待っても、わたしが御前へ参上しないもので、しびれを切らされたのだろう」

アレンがぶつぶつと愚痴ぐちる。

「お祈りより先に陛下のところへ行かないからですよ。ますますお怒りを買ったんじゃないですか？」

「酒を飲んで憂さ晴らしなんて、兄上は毎晩じゃないか。なんでわたしだけが、お叱りを受けるのだ？ こうしてきちんと、みずから反省もしているのに」

「反省のつもりのお祈りだったんですか?!」

「まあ、いわゆるアピールのパフォーマンスだな。なんでもわかりやすく説明しようとするのは大切だ」

「またリアンの屁理屈がはじまった……」

「ローレリアン!」

アレンのつぶやきの言葉尻に、国王の大きな呼び声が重なった。

優雅な衣擦れの音とともに、ローレリアンは礼拝の姿勢を解いて立ちあがり、背後へ振りむく。

そのしぐさを見て、なるほど、パフォーマンスだなと、アレンは思った。

重い聖衣を華麗にさばいて聖職者が立ちあがる姿には一種の様式美がある。その様式とは、歴代の神官たちが研究に研究を重ねて編みだしたもののだろう。その証拠に、いまのローレリアンは、立っているだけで神々しい気配を放っている。大きな声では言えないが、豪華な衣装をまとい、大勢の随行者をひきつれている国王のほうに、位負けしてしまいそうな雰囲気である。

その空気は、国王も感じている様子だ。聖堂へ入ってきたときには、かくしきれない怒りの感情を帯びた顔をしていたのに、王子の前へたどりついた今は、王子が持つ気配に驚いて鼻白んでいる。

古色蒼然とした聖堂の高い天井と石壁に反射して鳴り響いていた人々の足音が、ぴたりと止まる。

あたりに静寂がもどるのを待ち構えていたかのように、ローレリアンが口を開いた。

「おはようございます、国王陛下」

おだやかな微笑とともにくりだされた王子の挨拶は、ますます国王を驚かせた。ローレリアンの軽い礼は、あくまでも父親への敬意の会釈えしやくだったし、呼びかけにこそ尊称の『陛下』を使っていたが、その口調には今までのような遠い距離感がまったくなかったのだ。

とまどいもあらわに、国王は言った。

「なにが、『おはようございます』だ。もうまもなく、昼ではないか」

「はい、昨夜はいろいろと兎戯あそびに等しい失態をくりかえしてしまいましたので、深く自省じせいしておりましたところ、このような時間になつてしまいました」

「自省とな？ 余が耳にした話では、そなたは宿酔で起きられぬと
いうことであつたが」

「それも重大な反省点のひとつです。おのれの酒量の限界を知ることも、案外大切なことでした。しかし、わたしは俗人の楽しみを学ぶべき10代の時期を聖なる神々の家ですごしましたので、大人になつた今ごろになつて、あらためて子供の遊びを体験しては、はしやいでしまうのです。お叱りは甘んじて受けますので、どうか寛大なるお心をもつて、お許しいただきますように」

国王は口ごもる。ローレリアンを国境の町の神殿に預け、子供らしい体験をなにもさせてやらなかったのは、他ならぬ自分自身なのだ。いくらそれが息子の命を守るためだったとはいえ、酷なことをしたとも思っている。

いままで、息子と、そのことについて語るのは、あえて避けてきた。国王も人の子なのだ。家族から憎まれていることを、わざわざ確認などしたくはなかった。

しかし、いよいよその話題に触れなければならない時がきたのだ。

国王の勅命ちよくめいに反した行動をとった息子に対して感じていた怒りは、すでにしぼんでしまっていた。ついさっきまでは、人の上に立つとする者が規範を乱す行動をとるなど、息子に厳しく当たるつもりでいたのだが。

「そなたは……、神殿に預けられたことを、いまだ怨みに思っているのか……？」

ローレリアンは静かに、だが、壮大な伽藍がらんによく響く声で、父の問いに答えた。

「いいえ、父上」

その場に居合わせた者達が、いつせいに息をのむ。国王の近くにいる者は、みなローレリアン王子が過去に一度たりとも、国王のことを父と呼んだことがないのを知っていた。

当の国王は、ぼうぜんとして息子の前に立ちつくしている。

王子は言った。

「こうして黒衣をまとい、神々におつかえする自分こそが、もっとも自分らしい自分だと思えます。『ローザニアの聖王子』という異名を得たことは、いつか必ず、わたしの誇りとなるはずです。そうなるように、精一杯務めるつもりです。

ですから、父上のご命令を無視して、昨夜わたしが憲兵隊の行動の邪魔まじをしたことについては、いっさい謝罪はいたしません。

そもそも、謝罪とは犯した罪に対してなされるもの。わたしは、罪を犯したとは思っておりません。反政府活動摘発のためであること、無関係な国民が危険にさらされてはならないのです。そのことについては、今後も信念を曲げる気はございません」

すっかり王子を問い詰める気力を失った国王に代わり、宰相カルミゲン公爵が叱責しっせきの言葉を浴びせる。

「では、王子殿下は国王陛下からお受けになられた。一刻も早く出頭せよ」とのご命令を無視なさり、ここで神々と対面しながら、何を反省されたと言われるのですか。昨夜といい、今朝といい、国王陛下のご命令を、陛下のもっとも厚き信任を得ておいでになるはずの王子殿下がお破りになるようでは、周囲に示しがつきませぬ」

ローレリアンは宰相の叱責など気にもとめていない様子で答えた。

「過去の自分について、いろいろとです。」

幸いにも、わたしは側近に恵まれておりますので。

昨日も、じつをいいますと、側近から叱られました。国王陛下にわたしの思うことを正しくお伝えできないのは、情を軽んじるからであると。

そして、彼らは失態の後始末を望んだわたしの行動をとがめもせず、気が済むようにせよと、黙ってつきあってくれました。

まさに、わたしは側につかえてくれている者達の情に、支えられて生きています。

その事実にあらためて気づいて、神々に感謝せずにはいられませんでした。

ですから、ここで神々へ自省と感謝の報告をしてから、父上のもとへうかがうつもりでありました。

わたしの信念を貫くために側近がなしてくれたことに対して、いかに感謝しているかを、父上にも聞いていただきたかった。おそらく、わたしの今の気持ちを本当に理解してくださるのは、若くして王位へおつきになり、今日に至るまで32年ものあいだ至高の存在として周囲の者達に支えられ、守られておいでになられた、父上だけであろうと思います」

宰相へローレリアンは語りかける。

「カルミゲン公爵。我が父を、よくぞ長きにわたって助けてくれた。感謝申し上げます。」

あなたの腹心の部下をわたしが嫌うのは、わたしが神々に仕える男であるがゆえの信念を曲げられないからだ。けして、公爵自身に對して、なにか含みがあるからではない。その件については、許してもらいたい」

王子から謝罪されているというのに、宰相はちつとも謝られている気分になれなかった。

ローレリアン王子の声は聖堂のなかに朗々と響き渡り、神々の意志をもって、宰相を叱責しているように聞こえるのだ。リンフェンダウルのような男を重用するおまえは、神々の教えを守らぬ愚か者である。

表面では謝罪しているが、真の正義は我にありと、王子は暗に宣言したのだ。この宣言をしたいがために、王子は国王を長々と待たせてじらし、会見の場所が聖堂になるようにしむけたのかもしれないと宰相は思った。

空恐ろしかった。

ローレリアン王子は、さまざまな才能を持つ人間だが、もつとも秀でているのは、この人の感情を読みとり、あらゆる場所をおのれの劇場と化して、さりげなく相手の立ち位置を自分の支配下に置いてしまう才能なのではないだろうか。

この王子は、王国の実権を握ったとき、いったい何をなすのだろうかと。

国王が深いため息をつく。

「ローレリアン、そなたの気持ちは理解した。よくぞ、余の宰相に感謝の意を示してくれたとも思う。」

しかし、国王の勅命を破るのは、やはり重罪なのだ。たとえそなたが王子であろうとも、なんのともなしというわけにはゆかぬ」

「はい。承知しております」

「そなたには、一週間の謹慎を命じる。みずからの宮より出ることはもちろん、人と会うこともあいならん。よいな？」

「寛大なるご処置に感謝いたします」

「そなたの宮の出口には、余の命をおびた憲兵を置く。」

今度はいさかいにならぬよう、この役はそなた気に入りの、リドリ・ブロンフ卿へ命じるところ。あれは冷静な男ゆえ、そなたが懐柔かいじゅうに走つても、言うことは聞かぬだろう。

とにかく、そなたは油断がならぬ」

「油断がならぬとは、心外なお言葉です」

「心当たりがないとは言わせぬぞ。」

王国の将来を担う王子が、危険にみずから飛びこむようなまねをしてはならぬと、忠告したはず。

余が昨夜はどれだけ、心配したと思っておるのだ。

その心配には、もちろん、父としての情も入っているのだぞ。

国王としての義務を抜きに言う。

たのむから、危険なことはしてくれるな」

ローレリアンは苦笑した。

「こればかりは、お約束いたしかねます。」

わたしは、王子として生まれたからには我がローザニアのためのみ生きると、心に決めておりますので」

「こまった息子だ。誇らしくはあるが」

最後に、どこか諦めたような雰囲気おきの笑みを残して、国王は聖堂から出ていった。もともとバリオス三世は文治の王として名高く、芸術や文学を愛し、静かな生活を好む人物である。争い事からは距離を置きたいと、考える人なのだ。

随行者すいこう達が、そろそろとあとにつづく。最後の一人が扉のむこうへ姿を消したのを確かめてから、王子は大きく息をついだ。

「やれやれ、なんとか事を荒立てずにすんだか」

昨夜の事件の後始末について、さまざまな方策を考えていたアレンは、肩透かしを食った気分だった。雨後の地面は固くなるという

ことわざを、思い出していたくらいだ。なにしろ、いきなり、親子の和解を見せられたのだから。

ほっとするあまり、言葉も乱暴になる。

「なんだよ、その言いぐさは。おまえ、ついさっきまで愛国の精神と人の情について、熱く語っていたくせにさ！」

ローレリアンは、むっとして答えた。

「なんだもへつたくれもあるか。

わたしは自分の身が可愛くて、国王や宰相へ謝ったわけではない。おまえやカールに尻ぬぐい役が回るのは悪いと思ったから、こんな芝居しげがかつたまねをしたんだ」

「芝居にしちゃあ、嬉しそうだったな。親父さんから『誇らしい』なんて言われたら、そりゃあ嬉しいよなあ、息子としちゃあ」

「あれは、方便ほうべんだ！」

これからだつて、嫌でも国王陛下とは仕事を続けていかなければならないのだからな。

それならば、わだかまりは自分の胸の内にとまっておこうと、思っただけだ！」

「父上にしか、わたしの気持ちはわからないって、甘えていたじゃないかあ」

「うるさいっ！」

怒ってそっぽをむいたローレリアンは、乱暴な足運びで出口へむ

かつて歩きはじめた。

彼の足元では、さばききれない長い衣のすそが、バサバサと音を立てている。

アレンが思っていた通り、聖職者の優雅な動きは訓練のたまものなのだ。優雅にふるまう目的を失うと、重い衣はやはり、あつかいにこまるものらしい。

それに、そつぽをむいた時のローレリアンのほほは、かすかに赤くなっていた。

アレンは笑いたいのを、懸命にこらえた。

父親から褒められて、嬉しくない息子はいない。

親子の情を知らずに育ったローレリアンが、けして埋められない孤独感に苦しんでいることは、アレンもよく知っている。でも、神々は、人に絶望を与え続けたりはしないのだ。どんな苦しみのなかにも、一筋の光明はある。

国を統べる立場を通して父と息子が情を交わしあえるというのなら、それもいいではないか。常人には想像もできない心の交流だけれども、それだって立派な愛の形だ。

王子として生きること、ローレリアンは多くの苦しみを背負っているけれど、王子だからこそ凡人とは違う形で、受け取るものもあるのだと信じたかった。

アレンの忠誠心だって、そのひとつだ。

アレンが、いつもいつもローレリアンのことばかり考えているのは、友情だけが理由ではない。彼となら、大きなことをなすとげられると、信じているからだ。

だから、俺は、いまここにいる！

強い想いを胸に刻みながら聖堂の外へ出たら、真夏の太陽は頭上はるかで輝いていた。

くらむ目をしばたきながら、アレンは先任士官のイグナーツに頭を下げる。

「では、自分は総隊長殿のところへ出頭いたしますので」

中年らしく目じりにしわをよせて笑いながらイグナーツは答えた。

「4日間の休暇と割り切つて、営倉暮らしを、せいぜい楽しむといい。あとで部下に、酒肴しゅこの差し入れをさせよう」

「ありがとうございます」

アレンとイグナーツは、おたがいに物のわかった顔でうなずきあった。

貴族の士官が入る営倉は、牢屋らうやとはいえ、それほど居心地が悪い場所ではない。よほどの重罪を犯したものでなければ、差し入れも自由に受け取れる。営倉内に自前の家具や楽器を持ち込む強者もいるくらいだ。

桂冠騎士の称号を得て貴族の仲間入りをはたした時には、それで何をやるのだろうかと思つたアレンであつた。しかし、こつこつ特権を享受たじろむできるのは悪くない。

ローレリアンも、国王から一週間の謹慎処分を食らつた。守らなければならぬ主が黒の宮から出ないというのなら、アレンも安心だ。

4日間、酒と昼寝で、思う存分だらけてやる。

そう思いながら、アレンはイグナーツへ後を任せて、近衛護衛隊の本部へむかつたのだつた。

ローレリアン王子と聖堂でのやり取りを終えたあと、ローザニア王国の国王バリオス三世は宰相のカルミゲン公爵をともなつて、王宮の長い廊下を歩いた。300年にわたって増改築がくりかえされた王宮は、とにかく無駄に広いのだ。

国王の背後には、護衛だけでなく侍従や事務官が列をなして歩いている。広い廊下に雑然と響く大勢の人の足音を聞きながら、国王はさまざまなことを考えていた。

18歳で王位についてから、バリオス三世はひとりきりになったことが一度もなかった。それこそ、もつともプライベートな時間であるはずの閨わねの営みいごなですら、侍従に見守られている。

若いころは、それも国王の義務かと思っていたが、歳をとって物事の裏の事情を理解するようになるると真実が見えてきた。

国王は表向き、国の最高権力者であり、至高の存在とされている。

だが、実際は個人として認めてもらうことすらできない、国家に所有されている奴隷なのだ。

国王の閨房けいぼうがいつも監視されているのは、国王にやたらと子供を作られては困るからである。国王の相手を務めた女が懐妊かいにんしたとき、胎内の嬰兒えいじが本当に国王の子供であるかどうか、知っているのは本人だけという状況になつてもこまる。過去の歴史には、放蕩者ほうとう者のの王が死んだあと、我こそは国王陛下の落とし種という人物が10人も現れて、国が大混乱におちいったという記録も残っている。だから

バリオス三世は、王宮に閉じ込められてきたのだ。

市井で育ち、国民の生活感覚を肌で知っている次男のローレリアンは、最近よく国王へ「その御判断は、民の感覚からしますと、許しがたいものであると思います」という意見を述べてくる。その見識の広さが、国王はうらやましくてならない。王宮からめったに出ることもなく、つねに重臣たちに囲まれて、自分の意志とは無関係に決められた政策の書類に唯々いいたく諾々と署名を続けた、自分の若いころとは大違いだ。

息子は父の国王より、はるかに自由なのだ。

国王と宰相のやりようが気に入らぬと、みずから街に出て憲兵隊とやりあったり、仲間と徒党を組んで憂さ晴らしの酒盛りをしたり。その翌朝には堂々と、自分の信念は曲げませんと、宣言してのける。「王子として生まれたからには、我がローザニアのためにのみ生きる」と言い切ったときの、息子の迷いのなさには嫉妬すら感じた。

ローレリアンには国のために生きる覚悟がある。そう、本人も言っている。

今までは、父親らしいことを何もしてやらなかった負い目で、彼に王族の義務を強いるのはかわいそうだと思ってきたが……。

「宰相」

国王のすぐそばを歩いていた宰相が、なんでしようかと、しぐさで答える。国王は立ち止まることなく、なにげない口調で話し始めた。

「そなたが勧めてくれた、エレーナを王妃として迎え入れる話だが」
「はい」

「そなたの提案通り、秋の国王生誕50年記念式典のさい、同時に婚儀も行えるように取り計らってほしい」

「かしこまりました」

「ローレリアンは、王位になど興味がない様子ではあるがな。国家のためには、いざとなればあれが王位につけるよう、準備おこたりにくしておくべきなのだろう」

「御英断と存じます」

「ローレリアンには、また怨まれるであろうが、余も国王としての国の将来を憂えるのだ。」

因果なものだな。国王などという地位にあると、親子の情ですら、切り捨てなければならなくなる。その結果、長男は人生をあきらめ、軽拳愚行をくりかえし、賢い次男からは怨まれる始末だ」

「陛下。ローレリアン殿下は、さきほどはつきりと、陛下をお怨み申し上げてはいないと、おっしゃられたではありませんか」

「そういわねば、表面上の和解すらできぬ。それが、王と王子の親子関係なのだ」

さびしげに、国王は足元を見た。自分は息子から情を示されても、その想いを完全には信じきれない、悲しく愚かな男なのだと思う。バリオス三世もまた王族に生まれ、真の幸福とはなにかを知らずに

生きてきた人間だった。

国王の足元には、見なれた大理石の床があった。いつのまにか、国王が政務をおこなう王宮の西翼へたどり着いていたのだ。

石の床を踏みしめながら、さらに国王は思った。

32年間、国王はこの廊下を歩きつづけた。歴代の王も毎日、この廊下を歩いたのだ。きつと、バリオス三世のあとを継ぐ者も、この廊下を毎日歩くのだらう。

自分の力だけでは解決できない、さまざまな問題に苦しみながら、ただ歩くのだ。

「そういえば、ローレリアンが特別あつかいしているというヴィダリア侯爵令嬢との仲は、どうなっているのか。堅物のローレリアンが令嬢には甘い顔を見せるというので、周囲の者達が騒いでいたと記憶しているが」

突然、国王が息子の恋路のことなど気にしはじめたので、宰相は面食らって答えた。

「さあ？ 詳細は存じません。ローレリアン殿下は、公務の場に私情を持ちこまれる方ではございませんので。真実をお知りになりましたければ、いつも殿下のお側にいるデュカレット卿あたりに、たずねてみますが」

「いや、いまはまだよい。正嫡の王子としてローレリアンの足場を固めてやり、正式に国王の輔弼ほつとして発言する権利を与え、将来は摂政大公となる王子であると国内外に知らしめることが、まずは優

先されるべきであろう。

しかし、それらの問題が落ち着いた頃には、ローレリアンにも真面目に結婚を考えさせねば。酒浸りのヴィクトリオの種から、まともな跡取りが生まれるとは、とうてい思えぬ。ローレリアンの子供に、期待をかけるしかあるまい。

ヴィクトリオの祖父であるそなたに、このような相談をもちかけるのが酷であることは承知しておる。しかし、父親の余は、さらに断腸の思いなのだ。ゆるせ」

「陛下の御心の内、この老臣は十分に承知しております。どうぞ、わたくしへのお心づかいなど、無用に願います」

いよいよ国王も、できの悪い兄王子を切り捨てる気になったかと、宰相は思った。本人ばかりでなく、王太子の子供までも見放す発言には、国王の覚悟のほどがうかがえる。

これでやっと安心して自分も引退できると、宰相は深いため息をついた。ヴィクトリオ王太子の軽拳愚行に悩んでいるのは、父親の国王だけでなく、祖父の宰相も同様なのだった。

その日の夕刻、国王から謹慎を命じられたローレリアンは、自分の宮でのんびりと書類の整理をしていた。人と会うこともあいならんとこの命令なので、本日から7日後までの接見の予定はすべて取り消されており、ぽっかりと予定に穴が開いたのだ。

黒の宮に訪れた客は接見の予定の取り消しにあい、最初は怒ったり落胆したりしていたが、秘書官たちから事情を聞かされて、最後には一様に笑った。

いつも涼しい顔で膨大な量の公務をこなしていく超人めいた王子殿下にも、同じ年頃の若者たちと徒党を組んで街へくりだしたり、二日酔いになるほど酒を飲んだりするような人間臭い一面があるのかと、思われたのである。

しかも、国王と王子の間に、どういうやり取りがあったのかについての噂も、刻一刻と広まりつつある。経済力で国の動向を動かすほどになった市民たちの口に、蓋ふたをしておくのは不可能なのだ。銃撃戦になった昨夜の捕り物劇の顛末てんまつなどは、すでに街中の人間が知っている。

宰相は、人心を読み、あらゆる場所を自分の劇場と化して、いつのまにか相手を自分の支配下に収めてしまう不思議な才能がローレリアンにはあると評した。しかし、彼の真の才能は、演技力にあるのではなかった。自分のイメージをいかに見せるかという、演出力こそが、彼の才能の本領であった。

街の噂には尾ひれがついて、王子殿下が反政府活動家の前で正体

を現した時の情景が、まるで見てきた事であるかのように語り広められていく。「あなたにとっては、悪魔かもしれませんよ」という王子の殺し文句は、それこそ流行語になりそうな勢いだ。

外見は華麗そのもの。頭脳も秀逸。本気で怒ると怖くもあるが、仲間と酒盛りをして父国王から叱責される悪戯小僧いたずら小僧でもある王子。

そんな王子を、庶民は愛さずにはいられない。

どんな失敗も、見方を変えれば次の成果につながられる。そう考えるローレリアンが、わざと『ポワンの宵の花亭』の亭主や従業員に事件に関する口止めをしなかったとは、誰も考えつかなかった。

もちろん、黒の宮の客に「父親から叱られてローレリアン王子は謹慎中」との情報を、おもしろおかしく流させたのも王子自身である。

そして、夕暮れ時を迎えたいま、執務机のまえに立ち不要な書類を処分用の箱に放り込みながら、ローレリアンはカール・メルケンと、これからのことについて話していた。いまだに二日酔いの体調が尾を引いているせいで、王子のしぐさは、どこか気だるげだ。

しかし、会話の内容は、めまぐるしく次の可能性を検討している王子の頭の中身を言葉に表したものである。メルケンは、つきることなくあふれ出る王子の言葉から、重要な命令を聞き逃さないように、せつせとメモをとりながら相手をしていた。

王子は空中に焦点の定まらない眼をむけながら、つきつきに言う。

「街の間諜かんちょうに情報収集を怠ると伝達をまわしておいてくれ」

「はい、かしこまりました」

「噂なんてものは、どう転ぶかわからないからな。うまく反政府活動は悪いことで、みんなで王子殿下を応援しましょうという方向へ、流れがさだまってくればいいのだが」

「いまのところは、こちらの意図通りに、進んでいるように思いますが。噂にヴィダリア侯爵令嬢のことがあがってこないのも、ありがたいですな」

「おそらく彼女の友人のフィオーラが、その件についてだけはしゃべるなど、『ポワンの宵の花亭』の亭主に口止めしてくれたのだろう。」

モナは不思議な女性なんだ。なぜか、周囲の者の保護欲をそそる。いつだて危なっかしくて、放っておけない。しかし、こちらがハラハラしながら見守っているあいだに、とんでもないことをやりとげてしまう。じつに、おもしろい人だよ」

ヴィダリア侯爵令嬢のことを語る王子殿下は、いつも優しく微笑んでいる。王子に近い位置にいる者たちは、令嬢と王子の出会いから現在に至るまでのロマンスについて、だいたいの事情を知っていた。王子殿下の賢いお小姓であるラツティが、この人ならと思う人間を選んで、いきさつを語っていたからだ。年齢に似合わず処世術に長けた少年の人を見る目は確かで、事情を知っている者達は沈黙を守り、ただ密かに王子の恋の行方の心配をしている。どうせなら、王子自身にも幸せになってもらいたいと、側近たちはみな願っているのだ。

だから、ローレリアンの笑顔を見たメルケンは、つい、言ってし

まった。

「殿下。さしでがましいことを申し上げますが、ご結婚に関する方針について、今一度、お考えなおしになるおつもりはございませんか」

大きな音と共に、書類が箱に投げ込まれた。

メルケンは、しまったと、自分の失態を心の中でなじった。ついさっきまで笑っていたはずの王子の表情は硬く冷たく変化して、感情がいつさい読めなくなってしまうている。

「カール」

呼び声も、鋼はがねのように硬い。メルケンはかしくまって、王子の言葉ことばを聞くしかなかった。

「結婚はしない。

わたしの意志は、何度もあなたに伝えたはずだ。あなたも賛成してくれていたのではなかったのか。

わたしは、この国の議会制度と税制を改めて、ローザニアを民の意志で動く国にしたいのだ。国王など誰でもよい。兄上がこの国の歴史に名を残す最後の王になるなら、それでもいいと思っおもっているくらいだ。

次代の王がぼんくらであることは、きっと神々の采配さいはいなのだろうよ。わたしがヴィクトリオ兄上の腹違いの弟として生まれたことにも、奇跡の采配を感じる。

神々は、わたしに民の国を築けと、お命じなのだ。わたしが王になる必要はないし、ましてや、王家の血筋を残すための結婚など不要だ」

「しかし、殿下は誰よりも濃い王家の御血筋をつくお方です。ローザニアの民が王家の存続を望めば、殿下には御子をなす義務も生じるかもしれない」

「血筋などが、何の意味を持つ？ この国がいま必要としているのは、傾国の危機を乗り切る知恵をもち、人の力を集めることができる指導者だ。その力さえあれば、指導者の出自など、どうでもいいわたしに子供がなければ、みな王家の血筋に頼る甘えを捨てるだろう。なんとか自分たちで国を動かしていく方策を考えようとしてくれるはずだ」

これ以上、この場でこの話を続けても、王子を怒らせるだけなのはわかりきっていた。王子は愛する女性を、自分の宿命に巻き込またくないのだ。その思いには、メルケンだって共感できる。しかし、カール・メルケンは、これからこの国を一人で背負っていかなければならない王子に、心の支えとなる家族をもつことまで、あきらめてほしくない。妻子を争いに巻き込まないための努力になら、自分だって喜んで協力するのにと思うのだ。

複雑な胸中を冷静な表情の下にかくして、メルケンは声をひそめた。

「殿下、この話は、そうそう他人に聞かれてよい話ではありません。この場で、これ以上の議論は、やめておきましょう」

王子はメルケンから視線を外し、陰気に黙りこんだ。

ローレリアン王子が目指す理想とは、民の国である。その国に、王は必要ない。いても飾りで十分だ。ヴィクトリオ王太子が、最後

の国王になるなら、それもまたよし。

この考え方は、貴族の存在どころか、王家の存在そのものまでも否定する危険な思想だ。王子として生まれたというのに宮廷からは離れた場所で育ち、帝王学という名の洗脳にさらされなかったローレリアンだからこそ、はぐくめた思想である。とても人前で、おおっぴらに語れはしない。

ローレリアンも、それは十分に承知している。いままで王宮以外の場所で、若手の側近を相手に、同様の話を冗談めかして語ったことは何度もある。しかし、その話に「自分は、この夢を実現可能だと思っている」という熱意を匂わせないように、細心の注意も払ってきた。ここまで具体的な内容を真剣に話し合ったことがあるのは、もっとも自分の身近にいて、知性と見識の深さを尊敬している首席秘書官、カール・メルケンその人だけである。

親友のアレンにさえ理想について深く語らずにいるのは、ローレリアンが危険な思想の持ち主であると知れば、彼の負担になるかもしれないと思うからだ。

忠実な護衛騎士の地位にある彼は、ローレリアンのためなら、なんでもしてくれるだろう。国王の勅命に逆らい、馬鹿げた酒盛りにつきあってくれたあげく、責任を取って営倉入りなど、象徴的な出来事だ。

あの未来を信じる明るい瞳の持ち主が、鉄格子のはまった部屋にとらわれている姿など、考えるのも嫌だとローレリアンは思う。しかし、それはすでに現実となっている。

アレンはローレリアンに、無条件の信頼をよせてくれている。』

我が王子』ならば、必ずやローザニアを良い方向へ導けるはずだと。

そんな彼から示される友情を感じ取ると、ローレリアンの乾ききった心には潤いうるおいがもたらされる。

その瞬間、どんなに心が癒いよされることか……！

皮肉な笑みが、ローレリアンの口元に浮かんだ。

自分が本心をアレンに打ち明けられずにいるのは、きっと彼からの友情を失いたくないからなのだろうと、思い至ったのだ。

だれも知るまい。

ローザニアの未来を担う男として期待を寄せられている王子は、本当はこんなに弱い男なのだ。孤独におびえ、友人からの愛を乞う。みっともないくらいに、惨めな男だ。

すっかり気落ちして窓辺に歩みよると、外の景色は夏の夕闇の中に沈もうとしているところだった。

ローレリアン王子の執務室は王宮の奥の宮の東翼にあり、その窓の下は王都の中央を大きく蛇行して流れるレヴァ川に面した急斜面となっている。

おかげで大きな窓にも、安心して近よれる。どんなに腕のいい射手でも、川のむこうから王子の執務室を狙撃するのは不可能なのだ。この時代の銃の有効射程距離は、まだ100メートルにすら達していない。レヴァ川は水運に利用される大きな川なのだ。

王子の執務室からのながめはレヴァ川の東岸の街並みになる。その街並みは、王宮や商業地区がある西岸とはちがって、ごみごみとしており、けして美しいものではなかった。

王都プレブナンの現在の人口は公称30万人だが、統計は正確でないうえ、下町の人口は毎日増えつづけていると言われている。経済の活性化は、よいことばかりを生むわけではない。経済活動圏が広がると、たくさん生産された物は国境を越えて流通するようになり、今まで村単位の経済活動で暮らしていた人々の生活を脅かすようになった。少しでも安い物が手に入るなら、人々は今まで使っていたものや食べていた物を、いとも簡単に捨てて、安い物へ乗り換えてしまう。それを作っていた作り手は仕事を失い、思いあぐねて都市部へと集まる。大きな都市になら、仕事があるかもしれないと

都市に仕事があるのは事実だ。ただ、どの仕事も、極端に賃金が安い。仕事を求めている人は毎日都市へやって来るのだから、雇い主側はいくらでも賃金を安くできるのだ。

少ない収入で喘^{あえ}ぎながら暮らす人々は、街の中心部ではなく、外縁部の新しい街に住む。レヴァ川の東岸も、昔はのどかな風景の農地であった。それが、先代王の時代あたりから、しだいに街へと変わっていったのだ。王都に集まり、従来^{しん}の街へ納まりきらなくなった人々があふれ出す形で、東岸の街は形作られていった。

現在のレヴァ川の東岸は、小さな工場や臭いや騒音のせいで近隣から嫌われる食品加工工場、石炭の集積場、船のドック、倉庫街など、街の機能を維持するためには欠かせないが、およそ文化的とは言えない施設が集まり、その施設で働く貧しい人々が肩を寄せ合って生きている場所である。

ローレリアンは毎日、執務室の窓から東岸の街をながめては、その街に住んでいつも明日の心配をしている人々のことを想い、憂鬱になっていた。どうしたら、ローザニアの国民全員の暮らしを、もっとよくできるだろうか。彼はいつも、その答えを探している。

そもそも東岸の街は、王国の首都機能をはたす西岸の街からは、川によって切り離された存在なのだ。

プレブナンの真ん中を大きく蛇行して流れるレヴァ川は大陸を横切るようにして流れる大きな川だが、上流の気候が安定しているため、一年を通じて水量があまり変化しない。そのおかげで川を利用した水運が栄え、川のほとりに王国の首都がおかれたのである。

帆に風をいっばいはらんだ川舟がひっきりなしに行き交うレヴァ川の光景は、ローザニアの豊かさの象徴だと言われている。しかし、この川舟のマストの高さが、川に橋をかけられない原因のひとつになっている。従来の技術でも、建築に金と時間と膨大な労力さえついやすれば、なんとかレヴァ川に石橋を架けることは可能だ。ただ、王都の周辺に石橋をいくつも架けられてしまうと、背が高いマストをもつ川舟の通行が妨げられてしまうのである。

王都の住民の生活利便性と経済や流通の円滑化を天秤にかけて比べてみたところ、より重かったのは経済と流通を支配している資本家達の利潤追求意欲だった。貧しい人々の「王都の西岸と東岸を自由に行き来できる橋が欲しい」という願いは、簡単に、金持ちの欲望によって踏みにじられてしまったというわけだ。結局、川の兩岸を行き来する交通手段は、いまだに小さな渡し船に頼っているのが現状である。

政治経済の中心部から分断された東岸の街は、西岸の街の豊かさ

からも取り残され、いつまでたつても貧しいままだった。農村を捨てて都会へ集まった人々は無秩序に工場や住宅を建て、その貧しい東岸の街を、どんどん大きくしていった。

いちおう王都に建物を建てる時には、街を巻き込む大火事をおこさないように、建物の材料や建築法に一定の基準が定められている。しかし、明日をも知れない暮らしの人々に、約束事を守らせるのは至難の業だ。貧しい人々は、法令順守より、自分たちの生活を優先する。

結果、住人が無秩序に建物を建て、好き勝手に増改築をくりかえした街であるプレブナンの東岸は、地図が存在しない街といわれるほど混沌とした街になった。

いまでは、王都の治安を守る憲兵ですら、東岸の街の奥へ入っていくのを嫌がるほどである。迷路のような街の中で方向を見失うと、いつまでたつても目的地へたどり着けないし、犯罪の取り締まりをする憲兵は貧しい人々からは嫌われているので、路地の奥で道に迷っていると頭から汚水をあびせかけられたりしてしまう。もちろん、悪戯の犯人は付近の地理に詳しいから、気分よく腹いせをすませたあと、さっさと逃げてしまふわけだ。

いままさに闇のなかへ沈もうとしている東岸の街を見下ろして、ローレリアンは深いため息をついた。

この東岸の無秩序な街並みは、将来、王都の都市計画を考えようとするときの、大きな足かせになるだろうなと思うのだ。

東岸の夜景は、暗い。

貧しい人々はランプの明かりにすら事欠く暮らしをしているので、薄汚くごみごみとした街並みは闇に覆われると、まるでそこに存在しないかのように見えなくなってしまふ。唯一、夜も明かりを灯し続ける川べりの港湾施設の輪郭だけが、川むこうの街の存在を感じさせる程度だ。

その暗い風景の右奥に、赤く輝く点が一つだけあった。

おやと、ローレリアンは窓ガラスに身をよせる。目を凝らしてみると、その赤く輝く点は、ちらちらと瞬く炎のように見えた。

「あれは、なんだろうな？」

王子に問いかけられて、首席秘書官も窓辺へよってきた。

「鑄物工場の煙突の炎ではないでしょうか？ 日が暮れたというのに、残業でしょうかね？ 商売が繁盛しているというのならば、喜ばしいことです」

「なるほど。炉で鉄を溶かしているとき、鑄物工場の煙突は火を噴くことがあるからな」

「はい」

「さて、今日は、わたしも早めに休む。あなたも、早じまいにしたらどうだ？」

メルケンは慇懃に腰を折った。

「わたしは気楽な独り身です。どうせ家に帰っても待っている者な

どおりませんで、もうしばらく仕事をしております」

「勤勉なことだ」

「主に影響されまして」

王子と首席秘書官は、たがいの顔を見て、にやりと笑った。

自分は本当に、側近に恵まれていると思うローレリアン王子であった。

夜の闇は、誰のもとにも公平に訪れる。

自分の部屋の窓から暗くなった街をながめおろしているヴィダリア侯爵令嬢モナシェイラ姫のまわりも、すっかり夜の帳におおわれている。

ローザニア王国の首都プレブナンの中心地である王宮を囲む城壁の内側には、さまざまな行政機関や神殿などのほかに、古い家系の名門貴族の館もたちならんでいる。

古い家系のなかでもとりわけ名門とされるヴィダリア侯爵家の屋敷は、貴族の屋敷がならぶ街並みのなかでも目立つ一角にある。そこは王都にそびえる丘の上で、王宮につぐ高い場所にある一等地だ。ローザニア王国建国当時から王家に仕えていたヴィダリア侯爵家が、いかに名門とされる家系なのかは、王家から与えられている屋敷の用地の素晴らしさからもうかがえる。

高台にある屋敷だから、モナの部屋の窓からのながめも素晴らしいものだ。花の季節、雪の季節と、季節ごとに移り替わる美しい景色を、モナは子供のころからながめて育った。

けれど、大人になったいま、モナが一番気にするながめは、レヴァ川のむこう側にある暗い街の影である。王都の東岸の街は、とても貧しい街だ。

遊学にでかけた国境の街アミテージで、貧しいとはどういうことを学んできたモナは、ひたすら陰気な気分で暗い街の影をながめ

た。

あの暗い街の影の中で、今夜はいつたいどれだけの人が、お腹を空かせたまま眠りにつくのだろうかと思う。少しでも多くの人に仕事を与えようと、ローレリアン王子を筆頭に、この国の政治を動かす立場にある人たちが努力していることは知っているけれど。

でも、今現在苦しんでいる人には、今すぐに助けが必要なのだ。

自分がやっていることは、ほんのわずかな力にしかならないことかもしれない。でも、何もやらないよりは絶対にいいはず。そう信じなければ、なにもできない。

部屋の扉にノックの音があり、どうぞと答えると、入ってきたのは盆を手にした乳母のシャフレ夫人だった。

「お嬢様、夕食をおもちしましたよ。本当に、食堂へ降りて、皆様とごいっしょに召し上がらなくてよろしいのですか？ 今夜は父君様もおいでですよ？」

モナは苦笑して答えた。

「いいのよ。もうお兄様方とアンナお義姉さまから、たつぷりと叱られたもの。このうえ、お父様からも叱られるなんて、まっぴらごめんだわ。」

ファシエル兄様なんて、これがヴィダリア侯爵家の跡取りである長兄の役目だからとかいって、わたしに当分の謹慎を命令したりするし。そのうえ、アンナお義姉さまにむかって、『侯爵家の女主人として妹に淑女の心得を教育してくれ』なんて言うんだから。

おかげでわたしは、得意絶頂の雌鷄めんどりみたいになつた兄嫁といっし

よに、今日の午後は貴婦人らしく優雅に針仕事よ。外へ出られないならせめて、レース工場の設計図を見るとか、診療所の備品の発注書を書くとか、家でできる仕事をしたかったのに」

テーブルに盆を置きながら、シャフレ夫人は口をとがらせた。

「若奥様は貴族の奥方様の鏡のようなお方でございますよ。つつましやかで、つねに旦那様をお立てになり、気品あふれるお姿で社交界へお出ましになってファシエル様の人付き合いのお手伝い。」

毎日のように外出なさって、ドレスの裾を泥だらけにしたり、男性とケンカをして帰ってきたりは、なさいませんかね」

モナは、むっとして答える。

「なにが貴族の奥方様の鏡よ！ アンナお義姉さまったら着飾るのが大好きで次々に新しいドレスを作るものだから、このあいだもファシエル兄様は、お父様に叱られておいでだったわ。ヴィダリア侯爵家は質実剛健を家訓とし、古くから文武両道に秀でた功臣を多く輩出してきた家系なのだ。その名譽にふさわしい節度ある生活をするように、自分の妻をしつけるって。」

「だいたい、アンナお義姉さまがお買い物ばかりなさるのは、ファシエル兄様も悪いのよ。お仕事、お仕事、お仕事で、いつもお義姉さまを一人になさるから。」

「政略がらみで愛のない結婚だったからって、それが奥様を放置していい理由になるわけ？ 結婚するからには、相手に対する責任を果たすくらいの覚悟は必要だと思わない？」

「はいはい、御説、ごもつともでございますよ」

ぷりぷり怒りながら食事を始めたモナにお茶を入れてやりながら、

シャフレ夫人はさまざまな思いを巡らせた。

ヴィダリア侯爵家の長男ファシエル様が、やっきになって仕事ばかりしておいでになるのは、若いころには『ローザニアの鷹』とまで称され、いまでは内務省の長官職にある名臣の父親が乗り越えがたい存在だからだろう。ファシエル様は線の細い学究肌の方で、父親の侯爵のように大胆な発想や決断で周囲を引っばっていく胆力はおもちでない。そんなご自分をよくわかっていらっしやるからこそ、緻密な仕事ぶりで父親とは違う才能を証明したがっておいでなのだ。

目の前にすわって、健康的な食欲で食べ物をおいしそうに口へ運ぶモナを見てみると、若い時代って誰でもけっこう残酷なものよねと、思ってしまう。自分と違う価値観をもって生きている人を認めるには、それなりの人生経験が必要なのだ。

モナが食事をしているあいだ、シャフレ夫人はそばの安楽椅子に腰かけて縫い物に精を出した。

夫人が侯爵家に仕えるようになってから、すでに15年の歳月が経過している。自分の子供を6人育て上げてからのことだから、彼女も、もういい年である。王都へ帰ってきてからは、モナの身辺の世話も若い侍女たちに任せて、半分引退したような生活ぶりだ。

それでもシャフレ夫人が田舎で家督を継いでいる息子のところへ帰らないのは、大切に育てた侯爵令嬢の嫁入りを見届けたいからに他ならない。いま彼女がせっせと縫っているのも、モナの嫁入り道具にする下着や夜着だ。結婚後、当面必要となる身の回りの品は、たっぷり用意しておくに越したことはない。

針をピンクッションに刺して、今まで縫った部分を指でしごいて

落ち着かせる。

作業に満足すると、シャフレ夫人は膝の上に手にした白い布を広げてみた。これは秋の夜の寝室で女性がくつろぐとき、肩が寒くないように羽織る薄手のナイトガウンだ。裾や襟元に縫い付けたレースの美しさには、ほればれとしてしまう。モナが「いくらでも使っていていいわよ」と、自分の仕事の関係で手に入る試供品のレースを山のようにくれたので、シャフレ夫人は思う存分、大切なお嬢様の嫁入り道具に贅を凝らすことができるのだ。

ナイトガウンの打ち合わせは、絹のリボンをはらりとほどけば外せるように作った。

新婚の女性のための着物なのだ。この程度の心づかいは、当然だろうと思う。このリボンをはとく男性が、お嬢様の想い人であるようにと、あとはひたすら祈るだけだ。

「ごちそうさまでした」

モナが綺麗なしぐさで、ナイフとフォークを置く。

その様子を、シャフレ夫人は満足して見守った。お嬢様はハチャメチャな方だけれど、侯爵家のお姫さまとして、どこへ出しても恥ずかしくないだけの礼儀作法は、きっちり教えたつもりなのだ。その成果は、ちゃんと現れている。

「もう一杯、お茶をいかがですか」

「そうね、いただくわ。ばあやも、いつしよにどう？ フィールミンティアのカフェから、秋の焼き菓子の試作品が届いているのよ」

「あら、メニューを変えるのですか」

「商売つて、いろいろ考えないとね。この店なら『これ』をつていう定番商品と、目新しい季節商品を、両方そろえようと思うのよ。とにかくお客様に『もう一度来たい』と思わせる仕掛けを作らないと」

「はあ、大変なんでしょうね」

「こういう成果を得たいと計画して、そこへ至る方法を考えるのは楽しいわよ？」

食後のお茶の用意を頼むために呼び鈴を鳴らしながら、シャフレ夫人は肩をすくめた。

きっと、モナと兄嫁のアンナが仲良くなることは永遠にないだろう。ひたすら受け身で夫を待つだけのアンナと、目標を決めてさっさと行動するモナは、水と油と違っていいほど相性が悪いはずだ。だからこそ、ご立派なお嬢様にふさわしい、御嫁入り先が早く決まればよいのにと、夫人は思う。

食事の後片付けが終わったテーブルで、もう一度、熱いお茶を入れた。

モナがシャフレ夫人に披露してくれた秋の焼き菓子は、どれも女性客を意識した美しいものばかりだった。

とくに、枯葉の形に薄く焼いたパイに、粉砂糖をまぶした菓子がよかった。粉砂糖が、まるで枯葉の上に降った霜のように見えるし、

パイも高温でカリツとした食感に焼きあげてあって、枯葉を食べているようなイメージを豊かに感じさせる。ほっとする甘さは、少し肌寒くなつた秋の気候にぴったりだ。

女二人で菓子を分けあって、ああでもない、こうでもないと話するのは楽しかった。お屋敷の外の世界をよく知っているモナは、話題も豊富だし、冗談もうまい。

あなたは、わたしの自慢のお嬢様ですよ。

シャフレ夫人が切ない気分で、そう思つた時だった。

窓の外の暗がりには、神殿の鐘の音が鳴り響いた。

夜のモナの部屋は、テーブルに置いた燭台の蠟燭ろうそくと、暖炉の上の棚に据え付けられたランプの明かりで、ほの暗く照明されている。

静かで薄暗い部屋の中になると、鐘の音は不気味に聞こえた。

そもそも、夕刻の祈りの時間がとくに終わった今頃、鐘が鳴ること自体がおかしいのだ。いったい、どうしたことだろうかと思つて、モナとシャフレ夫人が顔を見あわせると、鐘の音はどんどん数を増していった。

最初は、遠い音だったのだ。

それが、驚いているうちに数をまし、大きな音となる。しかも、音が鳴りやむ気配はなく、無数の鐘が乱打をくり返すさまは恐ろしくさえあった。

何があったのかを確かめようと、モナは窓辺へかけよった。

窓の外を一目見て、驚愕する。

「火事だわ！ 東岸の街が、燃えている！」

普段は暗闇の中に沈んで見えなくなるレヴァ川の東岸は、いま、燃え盛る炎に明るく照らしだされていた。燃えているのは街の奥側の一部分だったが、そこから立ち上る火の粉のせいで、東岸の夜空は火花が上がったような赤い斑点で覆われている。

モナは部屋着の上に薄手の上着を羽織って、部屋から飛び出した。王都プレブナンは四季が美しい街とされているが、夏は短く、夜は肌寒い気候だ。

階段を駆け下りていくと、玄関ホールには、それぞれの職場へむかおうとする侯爵家の男たちが集まっていた。侯爵は王宮へ。長兄は内務省。次兄のエドウィンは判事なので司法省へ行く。三男のノールは王都を守る第一師団の将校だから、普段は軍の官舎に住んでいて、今夜もここにはいない。ひよっとしたら、もう配下の部隊をひきつれて、火事の現場へむかっているかもしれない。

「お父さま！」

階段の途中でモナが大声をあげると、侯爵は垂れ下がった白い眉をひそめた。

ヴィダリア侯爵も、この3年でさらに歳を取った。ローレリアン王子の最大の協力者として王子の地位を押し上げるべく貴族勢力の取り込みに奔走した侯爵の老体には、かなりの疲れがたまっている。

いつの間にもやら髪も、みごとな総白髪となっていた。

老侯爵は、重い口を開く。

「よもや、モナシエイラ。これから下町へ、出かけるつもりではなかるうな？」

「ええ、行くわ。診療所は、もうすぐ完成するのよ？ 燃やしてしまっわけにはいかないわ」

「モナ！」

無鉄砲な妹を叱りつけようとして大声をあげた長兄は、父親に押しとどめられた。

「モナシエイラ。診療所は、もうあきらめなさい。

これからレヴァ川の東岸は大火事になる。あの街には、防災の機能などひとつもない。それどころか、建物は違法建築だらけで、道は狭く、そのうえ迷路になっている。火はとどまることなく、燃え広がるだろう。

いつかはこういうことになるのではないかと、政治を預かる人間は、みな心配していたのだ。

恐れていたことが、現実になってしまった。いまは、そのことを悔やんでいる暇はないがな。

とにかく、我々は登庁して、できるだけのことにはするように努力する。

おまえは火がおさまるまでは、屋敷にいなさい。王子殿下から、お叱りを受けたのであるう？ おのれの立場を考えてから行動せよと。

いま火事場に出て行って、おまえに何ができる？

おまえに求められている役割は、おまえの知識を生かして、火事のあとの始末をすることだと思っがな」

モナと侯爵は、まっすぐに見つめあつた。

「火がおさまつたら、東岸へ行つていいんですね？」

「もちろんだ、モナシェイラ。わしがそなたをどう思っているか、いままで語つたことはないがな」

「はい」

「誇りに思つておる。自慢の娘だ。だから、よく考えて行動するよ
うに」

侯爵はそう言い残して、玄関から出ていった。

開かれた扉のむこうから、激しい調子で鳴りつづける鐘の音が聞こえる。

侯爵家の玄関ホールに集まつた人々は、恐れおののいて不安を口にしていた。

そのざわめきにむかつて、モナはよく通る声で命じた。

「みんな、落ち着きなさい！

家じゅうのシーツを集めてちょうだい。それで包帯を作るの。

男の人たちは、荷馬車を準備するのよ。載せる物のリストは、すぐに作るわ。

コックは酒蔵から、ありつたけのシャデラ酒を出して。お医者様

が刃物を使うときに必要だから、いくらあっても足りないくらいなのよ。

近所のお屋敷にも、協力を頼んでちょうだい。親戚の家にも、使いを走らせて」

どうしたらいいのかわからずに、ただ不安がっていた人々へ、目的が与えられたのだ。侯爵家の使用人たちは、一斉に了解の声をあげ、それぞれの持ち場へと散っていく。

不気味な鐘が鳴り響く玄関ホールの真ん中に立ち、次は何をするべきなのか、モナは懸命に考えた。

人手を集めて、物ももつと集めて、輸送の手段を考えて……。清潔な水を確保するためには、どうするのが一番効率的かしら？ 食料も必要だわ。まずは救援に行く人が飢えないようにしないと。そのうえで、焼け出された人たちにも……。

緊張のあまり、動悸が高まる。冷や汗が出る。

時間が惜しい。早く考えなければ。

「モナシエイラ」

ふいに話しかけてくる女の声が、モナを現実へひきもどした。興奮ではちきれそうな頭をなだめて目を凝らしたら、モナの前には兄嫁のアンナがいた。

「モナシエイラ。この家の中のことは、すべて、わたくしに任せてくださっていいわ。なにをすればいいのかだけ、教えてちょうだい。それでも、わたくしはヴィダリア侯爵家の女主人ですからね。家

の切り回しのごとは、誰よりもわかっているつもりよ。あなたは外との連絡に集中してください、大丈夫よ」

モナは驚いてアンナの顔を見た。彼女の表情には、真剣な覚悟の色がある。

『侯爵家の女主人は、わたくしよ！』というアンナの口癖は、家の中でなにかという衝突する小姑のモナに対する牽制なのだろうと思っていた。けれども、それは、モナの勝手な思い込みであったようだ。モナは、いつかは侯爵家から出ていく身なのだ。兄嫁のアンナはアンナなりに、この家を守るのは自分だと思ってくれていたのだろう。

モナは心の中でつぶやいた。

さびしいと買い物に走ったりする、ちよつとばかり頼りない人ではあるけれど。でも、この人は、お兄様の奥様なのよね。将来の、……ヴィダリア侯爵夫人。

おかげでひとつ、決心がついた。

モナは、はきはきと宣言する。

「ありがとう、アンナお義姉さま。じゃあ、必要なもののリストを作ったら、すぐにお届けするわ。よろしくお願いします」

兄嫁に後を頼んで、モナは再び自分の部屋へむかう。

「ばあや、身支度を手伝ってちょうだい！ 王宮へ参内するわ！
誰か、御寵妃のエレーナ様へ、これからお伺いしますって、先触れ

を出して！」

次から次へと方策を考えるモナ頭は、ふたたび沸騰状態へ入る。

興奮しきった頭で考えるのは、もっとも自分らしいことだった。

利用できるものは何でも利用して、できることはやりつくしてやる！

反省するのは後でいいのよ！

いろいろな人から説教を食らって、すこし迷いはしたけれど。

結局、モナの主義は変わらないのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3863v/>

ローザニアの聖王子

2011年10月28日14時05分発行